
とある姉の原作破壊

食器野さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある姉の原作破壊

【NZコード】

N8172L

【作者名】

食器野さら

【あらすじ】

死んだと思ったら目の前に見知らぬおっさんが！？え、何？原作ブレイクしてくれ？行先は・・・『魔法少女リリカルなのは』あ！？

チート能力を手にしたオタクっ娘、同じ境遇を持った一人と共に原作ブレイクをすべく西へ東へ奔走する！－！
タイトル一部変更です。

砂原をばくと申します。

これから書く小説は、ブーム（？）のひとつに転生物を書いていきます。

原作ブレイク、残虐な描写、多数ではありませんが含まれます。上記の一いつが苦手、あるいは嫌いだ、という方は読まないことをおススメします。

なお、下記の一一名様からオリキャラの設定をいくつか提供していました
だきました、この場を借りて、お礼を述べさせていただきます、本
当にありがとうございました！

桃桜様

サワノ様

新参者ゆえ未熟な部分が多いですが、長い目で見てくれるとありがたいです。

よろしくお願ひします！

プロローグ（前書き）

プロローグです。

あと、登録し忘れていたタグがいくつかあったので、追加しました。

プロローグ

よーし、状況整理だ。

あたしは秋葉原にいつた。

そりやもう初めてだつたし、楽しかつたよ？リリカルの同人誌を買つたり、劇場版のポスターを拝んだりして、充実の一言につきたね。ん？何？あたしの性別？残念ながら女よ。

・・・・・いいじゃん、リリカルかつこかわいいじゃん、魔法少女つてのは女の子の夢なんだよ。

つていけねえいけねえ、話が反れたね、ごめん。

でだ、結構満喫した後、喫茶店で昼ご飯を食べてたんだ。

そしたら、（多分居眠りとか、ハンドル操作しくじったとか）ト ラックが突っ込んできたんだ。

しかもあたしに向かつて一直線に。

うん、意識途切れた、多分、や、絶対死んだよ。

・・・・・死んだはず・・・・・なんだけどなあ？

「とりあえず、おっさんだれよ？」

「・・・・・おっさんとは失礼だな？」

いやいやいや、だつて死んだと思つたら真つ白な空間に浮いてて、目の前にはかのFATEに出てくる・・・・なんだつけ？麻婆豆腐が好きな神父さん・・・・だつたと思つけど、とにかく！そいつっぽいのが目の前にいるのさ…！

「ふう・・・まあいいだろ？、わたしは・・・そうだな、クリイとでも呼んでくれ」

「・・・・クリイ？」

「ああ

うーん・・・・・・が、いいか。

「おっけ、クリイさんね」

「本当に名無しなんだがな」

「ふーん、そんで？死んだはずのあたしに何か用？」

「ああ、とりあえず率直に言おつ、今からお前にはそれなりで『魔法少女リリカルなのは』と呼ばれる世界に転生してもいい、そこで起こる悲劇を、最善の結果で終わらせて欲しい」

「…………はい？」

つまり・・・・・。

「それ遠まわしに原作ブレイクしきつて言つてゐようつなもんだよね？」

「やうだな

この野郎、否定しなかつたな。

「お前達の世界で通つてゐるこの世界で起きた悲劇……プレシア・テスター・ロッサの暴走、死亡や夜天の書の管製人格の消滅……わたしはお前達の世界でそれを見て、止めなければならぬと思つた」「ということは？その残された人……フェイトやはやて達に同情したつてこと？」

「それもあるが、実は理由はひとつある」

もう一つ？何だろ……。

「同じ世界で、何箇所かの歴史が歪んだのだ」

「…………とこつと？」

「具体例を述べれば、死ぬべきでない人が死んだり、敗北すべき悪が勝利したり……だな」

「…………何となく分かった、つまりあたしがそこにいつてその歪みをとめて来いってことね？」

あたしがそういうとクリイは「理解が早くて助かる」といった。んーでも、疑問が……。

「『何故自分が行かなければならないか？』…………だろう？」

ちょ、この人読心術でも備えてんの！？

「顔がそう語つていたからな、結論から言うと無理だ……実を言うとわたしは『記憶図書館

『ライブラリ』』と言う能力の管製人格だからだ、この次元の狭間以外で実体化が出来ん、だから適合者を見つけては故意に死亡させ、わたしの能力を与えて転生させていた……今回はお前を含めて三人適合者がいた」

・・・・・をい、ちょっとマテや。

「あたしが死んだのは故意？しかもあと二人いるだつて！？」

「そうだ、おまえ達にはいい迷惑かもしない、だがわたしとてこれだけは譲れん、侘びといつては何だが、お前と後の二人にはわたしの能力以外に、あと二つ能力をくれてやろう」「…………それはいいけどさ、一つ聞いていい？」

腹は立つたけど、この人は本気だ、そして、心から救いを願つている。

でもあたしだってどうしても気になることが一つあった。

「あたしが死んだとこの喫茶店……あたしと後の二人以外での死亡者はいる?」

「おらん、さすがに怪我人は出でしまつたが、わたしは適合者以外犠牲者を出さん主義でな」

「そう、よかつた」

ま、とりあえずは一安心?

「んじや、後二つの能力をくれるんだっけ?」

「そうだ」

「だつたら・・・」

かくかくしかじか

「ふうむ・・・・・いや、くれてやると言つておいてなんだが、反則ではないか?」

「大丈夫、あんたほどじやないから」

ああ、そうそう、実はさつきの『かくかくしかじか』の間に記憶図書館《ライブラリ》の能力を教えてもらつた。

つつても、結構簡単なもので『アニメや漫画、ゲームの術技、アイテムを実際に使える』っていうけつこうチートなものだつた。

さらに『デバイス無しでそれを発動できるつてんだから驚きだけど、詳しく聞いてみるとデバイスが不要な代わりに、デバイスのAIにあたるやつ(管理者つて言づらしい)^{オーナー}』を、第一人格として埋め込まれるみたい。

つと、その前に・・・。

「後の二人は?」

「まだ目覚めておりん、当たり所が悪かつたよつでな、もつじまぢ
くは眠り続けるだひつ」

「やつか

クリイが、あたしの足元に向き直る。

「わろそろ時間だ、準備は？」

「おつけ、いつでもこらつしゃーーー！」

「やうか、では」

あたしの足元に真っ黒い穴が開い・・・・・ん？穴？

「健闘を祈る」

クリイは何事もないよつてあたしにサムズアップしてきました。
んー・・・・とりあえず。

「わうわん・・・・」

一瞬の浮遊と、怒りを感じながら。

「せめぐれこづれ」とせもつと叫べこづれほしかつたなああああ
あああああーー？」

あたしは落ちていった。

プロローグ（後書き）

プロローグ終了ですが・・・。

長い

なぜもつと短くまとめ切れなかつた自分 o_rz
ごめんなさい、いきなり未熟つぱりの披露です；
次回からいよいよ本編です。

ユーチャー登録していなくとも感想かけるようにしましたので、ご意
見、ご感想いつでもお待ちしております！
それでは！

第一話現地到着！（前書き）

一話です。

第一話 現地到着！

（穴に落ちたときはさすがにびびつたけど、無事に転生できたみたいだし、まあ、いいのかな？）

でも・・・ね。

あーはい、皆さんお察しの通り、今のおたし赤ちゃんです。

(· · · · オ · · · · オ · · · · ハ · · · ·)

やつぱり冷静が一番よね、うん、でなきやこれから先やつていけな
さん。

(マス・・・・・は・・・・・・・・・・)

つーかこいつちでのあたしの名前はなんだろーな?
どれどれ・・・・・って、プレート外側についてんじゃん。
よめねー。

（いいかげんに気付けやー！アホマスターーーー！）
「ぎゃん！？」

なんだなんだ！？いきなり頭の中で男の声が！？

(つたく・・・・やつと氣付いたが、マスター)
「あ、ふ・・・・・? — (ます・・・・・?)」

あ、そーいやクリイに管理者オーナー^{おっさん}をもらつたんだつけ?

「ふふ～・・・・・— | (やーいめん)めん、短時間 — (?)で色々
々ー(?)あつてちよつと混乱してたわ」

(まあ、話自体が急だつたから・・・・しかたないか、改めて初
めましてだマスター、お前の管理者オーナーだ)

「あ、ふいー— (よりじく~)」

・・・・・つて

(名前無いの?)

(ああ、クリイからお前からむりうつて言われた)
(ふーん、じゃあ・・・・暗羅!『暗い阿修羅』で暗羅つての
はどーよ!?)

(暗羅か・・・うん、悪くないな文字的に)
(でしょでしょー、じゃよろしくねー暗羅~)

その後、今の状況とか、これからのこと話をし合つた。
とりあえず現時点で分かつてたり、決まりしたことは。

1・あたしの名前は『一条飛鳥』といつ。
1・ここは海鳴市の隣の市の産婦人科である——(しかし両親の住所
は海鳴)

1・あの時クリイにもらった能力は、今は使えない——(ただし、世
間で言う『物心ついたとき』には発動可)

1・原作開始の数年前、なお現時点では、なのは、フエイト、やは
ては誕生していない。

「ここまでが分かつた」と、で、「」からが決まりたこと。

1・いつ原作が始まるか、終わるかが不明なので、介入は原作第一期三話の『巨木騒動』（飛鳥命名）か、よく戦闘の舞台になつている臨海公園周辺をうろつくことに。

1・クリイの言うとおり、テスター・ロッサー一家、リインフォースは絶対助ける。

1・同じ能力を持たされて転生してくるであろう、後の一人を探索、発見次第協力要請（ただし、必ず二人とも味方としてでてくる訳ではないので必要であれば……）

（ま、こんなもん？）

（だな、最後の二人に関しては賭けといつてもいいかも知れないが・
・・・・赤ん坊の今じやなんともいえん）
(ですよね~)

あ、そーいやさつきから眠いわ～。

「ぐあ・・・・・」

（眠氣か？）

（うん、赤ちゃんだからかな？眠くて眠くて・・・・おやすみなさい）

（あ、おい！）

~~~~~・・・・。

（・・・・本当に寝やがった、この野郎）

次の日、あたしが目を開けると、一いちでのお母さんがあたしを抱き上げていた。

本当に嬉しそうで、何度も何度も頬ずりをしてきてちょっとくすぐつたかった。

何となく、前世のお母さんを思い出した。

今考えると親にとって子供が先に死ぬってのは相当な精神ダメージよね。

・・・・・元気にしてるといいけど。

## 第一話現地到着！（後書き）

はい、終了です。

長いんだか短いんだか・・・・（

次回かそのまた次回、多分主人公無双です。

## 第一回口説（前書き）

何とか病氣も治り、復活です！  
遅くなつてすみませんでした；

そ、時はすぎあれから十年・・・・・・つてこりやー、話がすつ飛びすぎだつていわない。

こういのではよくある展開でしょー? 気にしけや駄目なのよー?

つげフングエフン、続けるよ?  
といつても、まあ色々あつて、今あたしはとある剣道場でバイト中です。

労働基準法? 大丈夫大丈夫、バイトつていつも、最初と最後の掃除を道場のみんなとやつたり、お密さんにお茶出したりする程度だから、労働に入らないわ。

ま、それは『今』問題にすべきことじやない。

今更だけど、あたしが置かれている状況を確認しづつと思つ。

「どうした? こないのか! ?」

「いや、こんなん無茶振りに近いでしょ? う? 」

「つ黙れ!!」

ひゅつと今まであたしがいた場所に竹刀が振り下ろされた。

うん、お察し(?)の通りただいま戦闘中です。

ただ相手(辻つて名前の男子)の竹刀はあたしにかすりもしていな

いけどw

まあ、そういうあたしの竹刀も辻にかすつてないけど。

ええー、だつてめんどくさいもーんww

だつてこいつ負かしたら負かしたで『まだだー!』とかいしながら文字通り飛び掛つてくるのよ! ?  
おねーさんもういやー!!

「つとおー。」

「よけるなー！」

「無茶振りやめてよ～あたし痛いのやーよ？」  
「せやけー！」

あーもうほんと諦めてくんないかな？言つてないとは言え、あたしには『能力』がある限り勝てないんだけどな。  
つかいい加減疲れてきたあ！

今日はもうこの辺でいいかなあ？師範雇い主さんの視線が痛くなってきた  
し（泣）  
じゃあ、力タつけるか。

「幻狼斬！」

最近『見て』覚えた技だから、足運びに注意しつつ前方に辻に面をくらわせて瞬時に背後にまわり、後ろから切り払いをくらわせる。結構な力で竹刀を叩き付けたから、辻の姿勢が崩れた。  
もちろんあたしはそれを見逃さない！だってさだもん！！  
あと、テイルズいいじゃないテイルズ！！

「つじお ッ！！」

胴に一閃！うーん我ながら綺麗に入ったわ～  
お、師範雇い主さんが来た。

「辻、今日はもうこれでいいだろ？いつも通り練習に励むといい  
「うう・・・・はー」

「一条もだ、お前はもともとこの門下ではないし、あまり大暴れされても困る」「はーー」

とりあえず一礼して返事をしておく。

そりゃまあ、雇い主なんだしね、何よつこいのは武芸の場だからね、礼儀を大切にしないこと。

さ  
今日の稽古が本格的に始まつたよ二だし  
あたしも働きますか

わいふ、たゞ一冊みるはで懸念中……なんだナゾ。

「飛鳥！そこのそれを・・・・・」

「わ、こ、て、る！あ、ち、の、棚、だ、し、よ？」

あじかど!

「五二五一一一」解一

「一条！この鎧動かすの手伝ってくれ！」

「うるさい！ まかせろ！」

稽古が終わつた後はこんなかんじで毎日大騒ぎ。

あたしがバイトに行くようになつてからはいくらかましになつたら

しいけど、今でも十分ドタバタだと思つなう。つと、帰る時間だ。

「すみません！そろそろ上がりります！」

「分かつた、帰り道には気をつけろ」

「はーい！」

「あー飛鳥待つた待つた！ほいこれ！妹ちゃんによろしく…」

「おお！翠屋のケー・キ！ありがとー！また明日…！」

とまあ、最後が最後だけに毎日ドタバタのまま帰宅しているわけで。実は始めたばかりのころ事故にあいかけて、ちょっと大変だったのよね～。

今？もちろん大丈夫よ！だいぶ慣れてきたしね。

そんなへマせんわ！とか、某猫先生風にいってみたり（笑）  
ああ、ちなみにあたしの両親はあたしがちっさい頃に他界したので、親戚に引き取られたわけだけども、うん、ちょっと、いやかなり、引き取られた先について驚いたな～。

お、そろそろ家につく。

玄関を開けて、『妹』の名前を叫ぶ。

「たつだいまー！』はーやー』ー！」

「おかえりー！」

そう、あの『八神はやて』の両親だつたのよ！

苗字は一条のままだけど、戸籍上八神家の子供。

だからあたしのあとに生まれたはやはては自然と妹になるわけで・・・

しかし皆さんご存知の通り、はやはての両親もはやはてに顔を覚えられる前に他界。

その所為か、はやはてはあたしにかなり懐いている。

うん、ぶつちやけるよ？

可愛いなこの野郎！－テレビで見たときも十分可愛かつたけど、生で見るとまた違った魅力があるぞ！」の子！－  
車椅子での突進もなんのその…－こんなのが慣れっこだい！横によけて抱きとめれば完璧ぞ…－

「そーりや！」

「さやー！くすぐったーい！」

「あ、今日の晩御飯はー？」

ちゅうと暴走しちゃったかな？

たっぷりはやてを満喫したあと、さりげなく今日の晩御飯を聞く。  
あたしがバイトをやり始めてから、はやてが料理当番になることが  
多くなった。

今じやその辺の主婦に負けないくらいの腕前だよ～。

「今日はカレーで…はよつけと冷めてまつ

「おっしゃーお腹すいたし、早く食べよづかーケーキもむらつたし

！」

「おーー！」

はやてにやう言つて、一緒にばたばたとリビングに駆け込んだ。  
とりあえず、今の現状をまとめると。

- ・現在原作の一年前。
- ・あたしははやてとともに休学中。
- ・遺産の管理をしてくれているのは原作通りグレアムちゃん。
- ・『闇の書』もとい『夜天の書』ははやての部屋に健在。
- ・後一人の転生者はまだ来ていらない模様。
- ・記憶図書館、その他一いつの能力使用可。
- ・图书馆、そころかな？

ん？勉強？大丈夫大丈夫、テレビで『見て』るからだいたいの学力はついてるわよ？

にしてもこの世界にもあったのね ZX、おかげで大助かりだわ w わて、あたしもはやてもどりとどり飯を食べ終えて、風呂入って、寝ようかしているとこ。

そこでよく田に留まるのが・・・・。

「・・・・闇の書・・・・じゃなくて夜天の書か」

そう、『夜天の書』。

あと一年したら、シグナムたちが「いつ・・・ばーん」と出してくれるあれよ。

そしたらひまでもはやかになるわな、それ悪いつと今から楽しみだわ。

「おねーちゃんどうしたん？何かにやにやしてみるよ~」

「ん？ああ、「めん」「めん」はやての足が治つたらどうしようつかな

うつて妄想してた」

「もうか~、なんや嬉しいな」

そうやつてにこひと笑うはやて。

あ~もう、可愛いなあ丶

・・・・・・今之内からこんな顔見せられたら、わりゃ譲つてあげたくなるよ。

いつの間にかはやはてはあたしの腕の中で眠つていて、規則正しい呼吸を繰り返している。

あたしは黙つて抱きしめて、そつと囁いた。

「おねーちゃんはこいつでもはやはての味方だよ」

## 第一話口常（後書き）

長い上にまとまつていない！（  
自分の未熟さが悲しいです；  
一応戦闘シーンもありましたが、  
だいじょうぶかな～？； 長く続かないといつ・・・。

## 第三話まわかの・・・・（前書き）

お待たせしました、三話です。  
今回はあの入達が・・・・。

## 第三回 ギリシャの・・・

わたしは今、おねえちゃんと一緒に図書館に行っています。  
これはもう病院に行つた後とかの日課になつていたりして……。  
わたしもおねえちゃんも本が好きなので、結構楽しんでいます。

「はやべ、今田さんな本読む?」

お姉ちゃんが車椅子を押しながら聞こえてくる。

「うそ、ギリシャ神話あたりをよみたいなー思ひしたこと

笑いながら答えておいた。

物心ついたときにはもうひとつおねえちゃんで、代わりにおねえちゃんがいた。

おねえちゃんはよくわたしのことをかけてくれて、何かあったら一生懸命になつてまもつてくれる。

後で知つたことなんやけど、おねえちゃんは本当にじやないらしき。

なんでも、わたしが生まれる前にいつかのむかあいに引き取られたらしくんよ。

だから苗字も『八神』やなくて『一糸』なんやけど、わたしのおとうさんとおねえちゃんのおかあさんは姉弟らしく、親戚なんだから、おねえちゃんでもこと無ひとる。

「ギリシャ神話か~、あの辺の話を読んだ」とあるナビ、ナビ いつ画面

由こよ~

「ナビなん?」

「ナビそーとへくへラクレスの冒険は必見だね、あんなにわくわ

くしたのは初めてかも

「ほんま！？わあ～はよつ読みたいわ～！」

両親がいないのは、寂しくないっていつたら嘘になる。  
でもおねえちゃんがいるし、心配かけたくないから、弱音は吐かな  
いようにしているんよ。

大好きなおねえちゃんやもん、最近バイトも始めたし、忙しいやう  
うから・・・困らせたあかん。  
つて、ああ、もうひの角曲がつたら図書館までもうすすぐやね。

「はやで、そろそろつづくよ？」

「は～い！」

そんなやり取りの後、わたしらは角を曲がって、

かたまつた。

S.i.d.e飛鳥

えーはい、皆さんどうも、一条飛鳥です。  
突然ですが困ったことになりました。

角を曲がった途端、あたしの田の前に、

「グルル・・・・ハグツ・・・・・・・・ハグツ・・・・・・・・

リアルに『もの』を食つてゐるバケモンがいたのさ！－

口元から手が見えてるし！－グロいよー！－

白い仮面のバケモノはあたし達に気付いていないらしく、夢中で食つてゐる。

・・・・・・ん？白い仮面？まさか・・・・・・・。

あたりを見渡してみる。

嫌な予感は当たつたらしく、『通行人の誰もがバケモノなどいないかのよう』に通り過ぎている。つまりあれは・・・・・・。

(虚<sup>ホロウ</sup>だな)  
「(よく冷静に分析できるな、暗羅・・・・・)はやて・・・・・・

相手に気付かれないように、小さくはやてに声を掛ける。

どうもはやても『あれ』がみえているらしい、震えながら頷いた。最大限の注意をはりつて、ゆっくりゆっくり、今曲がった角を戻つていく。

つてか、何でここに虚がいるのさ！？虚が出るのはB-L-E C-H-じや無かつたつけ！－？

順調に進んでいたそのときだった。

バカン！－

「つだ！－？

つしまつた！－声が！－

虚はこっちに気がついて、わざまでのあたしと回じくらこむつくりと振り向く。

「すみません！大丈夫ですか！？」

あたしの足元にはサッカーボールが転がっている。

頭の後ろの鈍痛からして、多分あたしにあたつたのだろう。ボールの持ち主と思しき高校生くらいのお兄さんが、あたしをはやって見て『大丈夫か』と聞いてきた。

この人も虚がみえていないようで、あたし達の顔色が悪いのは、自分の所為だと思っているのだろう。

「ごめんな、大丈夫？」

「は、はい！なんとか！」

「大丈夫です！」

虚が見えている所為で、あたしとはやはては声が裏返つてしまつた。お兄さんは申し訳なさそうにもう一度謝罪して頭を下げる、サッカーボールを持つて、来た道を引き返していく。この道にはあたし達と虚だけになる。

「…………はやて…………」

再びはやてに声を掛けた。

虚はこっちを凝視している。  
はやてはまた小さく頷いた。

「…………わああああああああああ

「…………！」

「…………！」

あたしとはやでが大声を上げると、虚が咆哮を上げるのはほぼ同時にだった。

はやでの車椅子に片足を引っ掛けキックボードの容量で地面を蹴り続け、加速する。

向こうも負けていないらしく、始めは一本足で追いかけていたのが、次第に両腕（この場合前足かな？）もついて四本足で追ってきた。

S-sideはやで

「…………」

どれくらいあのバケモノと追いかけっこをしていたんやうつか。またバケモノが叫び声をあげて、わたしらに追いついてきた。おねえちゃんはつかまつたらおしまい、つてことをわかつてゐるやと思つ。

気がついたら、知らん景色の中を走つとつた。  
けど今は気にしたらあかん。

・・・・・怖い・・・・・死にたくない・・・・・！

ふと田の前に意識を集中せると、分かれ道が見えてきた。  
まっすぐ行く道と、ひだりにまがる道。

まっすぐの方は道の先が見えないけど、へんなとこから看板がでてるから、たぶん坂道なんやと思つ。

予想はあたつてたみたいで、今わたしらの田の前には坂道とひだりにまがる道があつた。

おねえちゃんはどっちにいくか、ちょっと迷つてゐらしい。

「あ～もつ・・・」つて呟きながら、足をどんどんふんでるのがわかる。

でも後からはあのバケモノが近づいてきてる。

「・・・・・・いいはやで？スピードが上がってきたらゆっくりブレーキをかけるんだよ？ いきなりにしちゃうと、かえつて転びやすくなるからね？」

いきなり耳元で、おねえちゃんがそう言つて來た。  
何がなんだかわからないまま、わたしは坂道を、すべりだした。

「うやあああああああ  
ツ！？」

今日で二回目の大声をあげながら、すいにスピードで坂道を下りていぐ。

風が目にあたつて、なみだがぼろぼろ出てきた。

車椅子ゆうのは後ろが見えにくい。

やからと思う、坂道の終わりのところに人が見えた。  
このままいくと、ぶつかつてしまつ……！

「あぶなーい！……」

思いつきつ声をせりあげたら、わたしは田に浮いた。

S. I. D. E. ???

「あ”～重で～・・・・・

「だらしないの”～・・・・・商店まであと少し”じや、ほれ、頑張らん  
かい

「やうだよ、頑張りいひへ..」

わしは今、買い物の帰りじや。

生活必需品が少なくなってきたので、家主に頼まれたんじやが・・・  
・。

あやつめ・・・明らかに必要でないものも頼みおつて・・・・。  
おかげでわし”三”人とも両手に山のよつた荷物を抱える羽田になつ  
たわい。

・・・・・・・む”?

「二人とも、気付いたか?」

「・・・ああ」

「は”～・・・・虚

ホロウ

”ですね

かなり靈圧が弱い奴なんじや わいが、”こんな”近くになるとまで気が付  
かんとは・・・・。  
さて、どんな奴か・・・面を拝んでやるとあるかの”?”

つれの一人の赤髪が、坂道の下の方に向かって走つていく。  
確かにあの先に、虚の靈圧を感じる。

「あぶなーい！……」

その大声がした途端、つれに何かがぶつかっていた。

「大丈夫！？」

もう一人のつれが赤髪に駆け寄り、無事を確認する。  
赤髪にぶつかったのは、まだ十歳にも満たないと思われる女の子。  
苦しそうに唸つた後、弾かれるように起き上がり、坂の上を不安そうに見た。

「おねえちゃん…………おねえちゃん！…」

『ひつから坂の上に戻る』としておぬよつじやが……。

「おねえちゃん…………ああっ！」

立つことは叶わず、そのまま倒れこんだ。

・・・・・やつぱりか、車椅子も一緒に落ちてきたからまさかとは思うだが・・・・。

それに、あの子が見ておる先をつられて見たお陰か、虚の姿も確認できた。

多分、その『おねえちゃん』が、この子を逃がす囮になつた……  
とこうといひにじやない。

「お嬢ちゃん足が悪いんじやうつ？だつたら無茶はせんほつがいい。  
・・・あのバケモノに関してはまかせろ、わし等はその専門家じや

からな

『バケモノ』と『専門家』といつ単語に反応したのか、お嬢ちゃんははつとしてじりぢりを見てきた。まつたく、こんな可愛い妹を不安にさせるなんて……『おねえちゃん』にはちと説教が必要なよつじやな？

「ジン太、雨<sup>ウル</sup>、この子を浦原商店につれていしゃってくれ、虚に追われている子はわしが何とかする」

「おう」

「分かりました」

「あ・・・・あのーお前は・・・・?」

行こうかした時に、お嬢ちゃんが口を開いた。

別に名乗つても問題なさそうじやしち・・・・かまわんか。

「わしか?四楓院夜一じや

「つだああああもつーーしつこーー。」

「ども、再び一條でーす（キラッ  
・・・・・、」めんなさい、調子に乘りました。〇ン  
まあーそれはおいといてだーー。  
はやてを逃がしたあと、あたしは一人で虚と鬼「」をやつてたけ  
ど、うん、しつこーーしつこーすがるーー。  
なんのせいの執念深さーー何ーー？『狙つた獲物は逃がさないぜーー。  
つて奴！？』

勘弁してよーー！  
・・・・・つて！

「　　！　　」

「じはあーー？」

危なーーめつちや危なーーつてか強おーー。

右ストレートだけで地面割れるとかどんだけですかーー？

(マスター、反撃はしないのかーー？)

(出来るワケないでしょーーが！！虚がいるつてことは、大方魂の調  
整者である死神もいる可能性があるつてーー下手に攻撃して、  
撃破ーなんてやつたら何されるかーー。)

(なるほどな、しかしこのままではジリ貧いいとこだーー。  
(ですよねーーとおーー。)

暗羅と話し合ひをしながら、再び飛んできた虚の右ストレートを文  
字通り飛んでよける。

「つだーもうーーーーーなつたら開けた場所に移動するーーーー。」

結構いつぱいいつぱいだった所為か、オープンで暗羅に話しかけた。

(セヒーヒーヒービーブルスルんだ！？)

「下級の魔術つかつて、反撃する！…今更思いついたけど、よーは倒さなきやいってことよ！…」

(なるほど…)

「つーわけで！サー・チ頼んだ…！」

(アイアイイ…)

虚が今度は尻尾でなき払つてきた為、それをガードレールを伝つて、道路標識の上に飛び乗ることで回避。さつきからわざと細い路地などに入り込んで、少しでも虚との距離を開こうと努めてるけど・…・…。臭いかなんかで探つてるのかねえ？ある程度離れてもすぐに追いついてくるのよね。

(マスター見つけたぞ！先の曲がり角を右！そこから一つ田の角を左！…)

「じょーかい！…流石あたしのオーナー管理者…！」

指示どおりに右左と曲がつていくと、確かにあった。ブロック塀かた敷地の中心に降り立ち、虚を真正面から睨んで、詠唱を始める。

「揺りめく焰、猛追…！」『ファイヤーボール』…

いくつかの火の玉が虚に向かっていく。獲物が反撃してくるなんて思つてもいなかつたんだろうね。モロに喰らつてるし…・…・はつ…ざまあwww。

や、これだけじゃまだ足りないねえ？

つかのははやてにさんざん怖い思いさせた挙句、あたしにあの子が不安がるようなことをさせたんだ……。

反撃はまだ・・・・・終わらないよお――！

「聖なる槍よ、敵を貫け『ホーリーランス』――」

虚の足元から光の短槍が現れて、容赦無しに突き刺さる。

「まだまだあ――正義の意志、雷撃の剣となり咎ある者に降り落ちるー。『サンダーブレード』――」

稻妻を帯びた剣が、虚に突き刺さった。

・・・・・・んー、まだ三回しかやってないけど、これ以上は流石にまずいかなー？  
つてか、弱いなこの虚――！

「こなんなら、問答無用で最初から魔術使ったほうが良かつた気が・・・・・・」

（まあ、この世界では魔法も認知されていないし、何より妹への説明という面倒な課題が出来るだけだ、俺はこれでいいと思うが？）  
「んー・・・・まあそういう考え方もあるわね」

虚に背を向けて、暗羅と会話するあたし。

・・・・・はたから見たら、危ない子ね；

「ヴ・・・・・ヴヴヴ・・・・・・  
・・・・・・ん？」

振り返ると虚が立ち上がり、あたしに腕を振り下ろしてた。

・・・・・はー?

「やばつ・・・・・!..」

詠唱も防御も間に合わない・・・・・!—!  
こりや・・・・・流石に詰んだかなあ・・・・?

「用牙・・・・・」

・・・・・ん?

「天衝つ!—!」

ズドオオオオオオオッ!!

・・・・・・田の前に降り立つたのは、背中に『五』と書かれた  
白い羽織と、オレンジ色の頭。

嗚呼、前世のお父さんお母さん。

「大丈夫か? 怪我、ないか?」

どうやら私、とんでもないところに転生したようです。

## 第三話まわかの・・・・・（後書き）

はい、とこ「う訳でBLEACHの皆さんの登場でした。

・・・・うん、ぶっちゃけ、夜一さんの口調が分からなかつたのは  
ここだけの話（

あと一話ぐらい、飛鳥の話が続いてから、後の二人のストーリーに入りたいと思います。

感想、アドバイス、いつでもお待ちしておりますので、これからも、  
読んでいただけると嬉しいです！

それではこの辺で^ ^

## 第四話死神をさとハスと（前書き）

展開をつむじみすぎた感たつぱりです：  
といあえず、どうや！－！

## 第四話死神をさとひスと

s.i.d.e.?=?

「せんせー、ありがとー」「やれましたーー！」

「おう！お大事になー！」

医院の前で午前最後の患者を見送って、中に戻る。  
受付では妻が書類をまとめていた。

「お見送りは終わった？」

「ああ、さ、飯くつて午後だー！」

「うん」

ふつと笑いあつてから、奥にある居住スペースに行きかけた時だつた。

「・・・・・！」

「あ・・・・・・」

やれやれ、昼飯はあとになりそつだな。

「悪い、いつてくるよ織姫」

「わかった、お昼用意しておくれね？」

また、「ああ」と短く返してから、懐から取り出した板を胸に押し当てる。

そうだ、俺の素性まだ言つてなかつたな？

黒崎一護、クロサキ医院院長兼護廷十三隊五番隊隊長だ。

医院を飛び出して、屋根伝いに虚が出た場所へと急ぐ。

靈圧 자체は弱いから大したことないんだろうけど、その近くに一般人がいる。

靈力も普通と比べて高いし、何より虚の突進やらなんやらを意図的に避けてるところから、見えてるんだらう。

手遅れになる前にいかねーとな、結構おいつめられてるようだし。

・・・・・・ん？追われてる奴が急に角を曲がった？どうして？

虚の靈圧もそれを追つて曲がる。

丁度虚と追われてる奴がいると思われる空き地が見えてきたが・・・

・・もう袋小路じゃねえか！大丈夫か？

あ？そういうや空が壘つてんな？今日は快晴だつて予報で・・・

・。

「ロロロロ・・・・・ズドオオオオオツーーー！」

つ！？何だ！？今雷が剣の形になつて、虚に落ちたぞ！？

空き地の上空に立つて見下ろしてみたが・・・まだ子供ガキやねえか！？それに何でこんな真昼間に・・・今日は平日のはずだぞ？

・・・・・つてやべえ！？あの虚まだ動けるのか！？

俺は背中に納めていた『相棒』を抜き放ち、大きく振り上げて、

「月牙・・・・・」

斬撃を撃つた。

「天衝つ！――！」

同時にあの子をかばうように前に立つて、警戒する。  
さつき落ちた剣型の雷もすげーけど、それを受けてまだ動ける虚も  
とんでもねえ。

土煙が晴れると、何も居なくなっていた。

周辺の靈圧を探つてみたが、あの虚のものは感じられない。  
どうやら終わつたようだな。

「大丈夫か？ 怪我、ないか？」

子供一（多分女の子だろう）に目線を合わせて、声を掛ける。  
一方の子供はぽかんとこっちを見たまま、顔を引きつらせていた。  
見たところ結構驚いてるみたいだし・・・・・月牙はちょっと  
やりすぎだったかもな？

「あ、はい！大丈夫つす！！」

突然目の前に現れた（髪の色とかからして、絶対黒崎さん）死神から無事を確認されたので、無事だとかえしておく。

あ、でもクリイは『リリカルなのはだけ』とか言つてなかつたし、なんかの作品とクロスしてゐる可能性もあるつてことよね？とか、思考に漫つてると

「おお！一護か！？」

うん、薄々気付いてはいたよ？

**黒崎**死神さんが出でた時点で感づいてはいたさーーだけどねーー?

「夜一さん！？」

この人までいたのねえええええええ！？

いや、だって、ね!? こんなに連續して原作ギャラ、しかも別作品のものが一人も出てきたらちょっと冷静じゃいられないつーかなん

「何でここに？」

「何でもどうも、そこのお嬢ちゃんに用があるからなの?」  
「はいっ?あたしー?」

「あたし、今度はおまえの手を借りるわ。」  
「うーん、どうしたの？」

の間に夜一さんとフラグ立てたっけ！？

「ハハハ、お前さん妹を逃がしたじゃろ？」

妹…………つて！

「はやで！！」

「つむ、人違いではないじょうじやな、では…………」

言うなり夜一さんに頭を叩かれた、それもげんこつで思いつきり。  
流石格闘の達人！半端無い威力だわ～ w そこに痺れる憧れるう！！  
…………いかん、ちつと壊れてもうた。

「えと…………何故にげんこつ？」

「阿呆、坂を使って逃がす判断は誉めるが、当の妹はむしろ泣いて  
おつたぞ」

「…………あ…………」

うーむ…………やつぱりあたしも一緒に逃げたほうがよかつた?  
でも虚振り切るには、あれしか無かつたし、つか、そこまでを考え  
る暇がなかつたし。

…………いかん、言い訳だな。

「今、わしの知り合いのところにあるから、謝つておくんだぞ？」

「はい…………」

「うし、じゃあ一件落着だな！」

あたしのことを気遣ってくれたのか、一死神（黒崎）さんが手を叩いてまとめた。

「やうじゅな、この子はわしが任せた、お前は早く病院に戻れ、まだ勤務中じゃね？」

「ああ、分かったよ…………と、おこ」

戻りうとした死神さんが、あたしを見る。

黒崎

「まだ名乗ってなかつたな？黒崎一護だ、普段は町医者やつてゐる、機会があればまた会えるといいな」

「あ、はい、どうも……一條飛鳥です」

あたしはやつ返して、差し出された手を握つた。

「おねーちやん……」  
「ぐまつー?」

夜一せんこつれてこられた浦原商店。

引き戸を開ける、と同時にやが飛びついた。

・・・・・ひて、あちやー・やつぱ泣いてたか；  
慰めようとも原因作ったの自分だし・・・・・。  
ビーしめ・

「こやー、お姉サン無事でよかつたつすね」

奥の方からそんな呑気な声がしたんで顔を上げると、前世で見覚えのある人がそこにいた。

「どうも飛鳥サン、お話は妹さんから伺っています、アタシはいじの商店の店長やつてます、浦原喜助です」

「いじ一寧にひづむ・・・一条飛鳥です」

はやての頭をなでつつ、本田一度田の握手を交わす。

「といろで飛鳥サン、あなたがさつき発動させた術・・・・・あれはなんですか？」

・・・・・・・・ライロハ。

それをいじで叫つなよ（怒

「ふえ～じゅつ～おねえちゃんが～」

ああああああほりあーはやてが食いついたあー  
とりあえず。

「せつかく巻き込まないよつて黙つてたのに、何あつたづばら  
してくれやがつたんですかこのヤロー」

「え？あ？そなんですか？」

まあ、数日前に浦原商店の皆さんとの顔合わせと、はやてに魔法ばれるつていうイベントがあつて、大変だつたわ。

それでも、色々ありはしたけど一応はやても浦原さん達も理解してくれたし、結果オーライなのかな？

ちなみに今は高台で訓練中、さらに補足すると原作でなのはがよく訓練してたあの場所だつたりするw

「・・・・・武装・・・・・！」

左肩に引き寄せた右腕を横に振つた。

同時に、TOVの主人公の服を長袖にした全体的に黒い服に皮のブーツ、左手には鞘に収めた刀を、正確にはそれにくくられた紐を握つてゐる。

・・・・・前にもいつたけど、テイルズいいじゃないテイルズ、  
術技とか秘奥義とかかつこいいじゃない！

(今日は何をするんだ？)

「まあ、武器までだしうつたけどね、転移系でも練習しようかな  
ー！」

(まづ・・・・・)

「どうあれ、ここから・・・・・」

足で地面に印をつけて、ある程度歩く。

「ここまでーいきなり長距離は危ないだるーしね」

(ふうむ、まあ正論ではあるな)

「つーわけで座標とかのサポート頼んだー！」

(承知！)

暗羅のサポートを受けつつ、一箇所の座標を翻り出してこべ。

「・・・・・・固定・・・・・・・・転移ーー！」

(つー？おこマスターーー！座標が一桁違つーーーー！)

「・・・・・はあつー？ちよ、ストップ

(もう間に合わんーー！)

「ええええええええええええーーー？」

・・・・・何でいつも頻繁にイベントがおこるかなあ？

## 第四話死神さんとミスヒ（後書き）

一応BLEACHは、藍染の反乱から数年後という設定。  
だから一護はお医者さんやつてるんですね（  
さて、次回は飛鳥のプロローグ的なものの最終回。  
そして加わる新たな仲間！？  
それではこの辺でへへノシ

## 第五話 狩人の世界で（前書き）

いつのまにか2万ヒットしてて、腰抜かしたしたさばくです。  
こんな駄文を読んでくれる人がいるなんて・・・・・・！書いてる  
本人がびっくりです。

読んでくれている方々に感謝感謝！！

さ、今回は予告通り飛鳥のプロローグ最終回！だがいつも以上に長

い上にグダグダだ！！

それでもよければ見てやってくださいへへ；

## 第五話 狩人の世界で

「つだあ！！」

ちょいと高いところから落ちたみたいで、冗談抜きで痛い；つか、ここどこだ？

(少なからず異世界であることに違いないな、幸い地球の座標はあるが・・・・・どうする？)

て回らうか？何かすぐ帰るつてのもつまんないし」「それでいいのかマスターよ・・・・・・（）

暗羅の突つ込みは軽く無視して、足を動かす。

見たどこの雲とかちよこちよこ残してゐるから北の辺にある森の中・  
・・みたいだけど、人里が離れてるつてワケでもなさそうだし。  
歩いてハナないわけでもなさそうだし、まずはあつこに行くか。  
てか、こつから見えるし　ｗｗ

(つーーーマスターーーー)

暗羅のお陰で気付けたわゝ；後ろからなんか来たし；  
とりあえず容赦無しに一閃。

「これって、ギアノス？じゃあ、ここはモンハンの世界？」

(ハハニヒトヒテヒトヒテヒトヒテヒトヒテヒトヒテヒトヒテヒトヒテヒトヒテ)

「あーもーわーつてゐるわーつてゐる……セーで、いつちよ行きますか!…」

いつの間にか周囲を囲まれていた。

・・・・・・・・・・おーい、頼むからその狩る者の田舎者やめてちょ  
一よー。

地味に怖いんですけど。

内の一匹が飛び掛ってきたので、今度は首から上を斬る。

一匹も仲間を殺されたのが腹立たしいのか、それとも獲物風情が抵抗するなどでも言いたいのか。

どっちにしろ、やつ等が一斉に来たと言つて事実は変わらない。

「丁度いいや、一匹ずつじや詰まんなかつたしね!……………  
ME ON!..」

来る奴等を、両断し、刺し殺し、腸をぶちまけさせ、頭<sup>はな</sup>と脳髄を  
わばく。

おおかた片付いたころには、何体か逃げて、終わっていた。

「あひやー、ちと派手にやりすぎた?  
(ああ、正直にいって容赦ない十歳児はない)  
「ですよね~」

幸い返り血はそんなに浴びてないし、手と刀に付いた血はその辺の小川とかで流せばいいしね。  
さ、早く人里に

「披験体が逃げたぞ!…」

「あつちだ！ 追えー！」

• • • • • • • • •

「ねえ暗羅」

(何た主)

「あたし何か憑してるのはかなあ？」一度お寺で見てもうたほーか・・

(安心しろ、すべて作者の所為だ

まあ」んな山奥でしかも披験体言つてゐあたり、絶対黒だな。

「例え白だったとしても見る価値はありそうよね?」

(だな、何にしろ何があつたのかの確認はしたほうがいいだろ?)  
「うし、じゅーしゅつぱーつー!」

先日『見て』覚えた瞬歩をつかつて、声の方に行つてみる。

「しつかし・・・・木い多いな?」

（山たか）当たる前た

い  
む・・・まあそなたを三行と  
桺とか桺とか桺とか  
贋陰し

「（一）まじ枝が邪魔だと  
「そうー。」

そんな何様な会話をしたたり、顔の筋肉がこわばった。

湖の近くらしい、少し離れた場所に水面が見える。  
うーん、このままだと見つかりそうだし・・・・・お、あの木、  
葉っぱとかいい感じに茂ってるし、隠れやすそ。

文字通り木の上に飛び乗つて、有様を傍観、事と次第によつちや乱入つてことで。

湖の岸（つーよりは崖？土地と水面の境目が不自然だし）の方に、追い詰めたおっさん達（九分九厘で魔導師と思われる）と追い詰められた『披験体達』がいた。

「リオレイア亞種にリオレス希少種、ナルガクルガにティガレッ  
クスか・・・・・まだ子供とは言え、火力は一人前つてところか  
な？」

炎や轟音、動きで必死に抵抗する披験体達を見て、分析。  
・・・・あちゃー、やつぱり成熟していないのが仇になつたか；み  
んなバインドで固定されちやつた。

「つくそが！！披験体風情が調子に乗りやがつて！」

「全くだ、モンスターの分際で絶対正義の管理局に抗おうなどと、虫唾が走るわ！」

•

… 今からなんつた?

「それもこれも、この・・・・・・なんだつけ？ナルガクルガ？・・・ああもうーとにかくだーー」いつの親が施設で暴れるから「んなことに・・・・・・」

・ フザケンナ。

Freie Seite

管理局の魔導師の一人が、黒い、哺乳類の一種を思わせる龍を何度も可度も就り飛ばす。

何度も何度も愚かしく。

それが己の命を散らすこととの原因になることなど考へもせずに。

「・・・・・あ？」

最後の仕上げと、思い切り振つた片足の感覚が無くなつた。

Why?

頭に浮かんだ疑問を解消する為に下半身に田をやる。

上半身と繋がっているはずの片足は、立派な切り株となっていた。

answer!

「何だ!?」

「いつの間に！？」

魔導師達は大混乱に陥った。

片足の切り株から大量の血を流しがなら、魔導師はあえぐ。ふと別の場所に視線が移った。

その先で自分の片足が見つかった。

魔導師は絶望と恐怖でさらに喘ぎだす。

「畜生！…」

「てめえやりやがったな！…」

片足を切り株にする、なんて所業が出来る可能性があるのは、一番近くにいたもの。

故に仲間達は一斉に、さきほどまで蹴られていた龍を攻撃しようとした。

すると田の前に子供が現れる。

見た目十一～二歳の、女の子だ。

その手に持っている血のついた刀を見て理解した。

足を斬ったのはこいつだ。

「・・・・・・オーバー・・・・・・」

空気の流れが止まる。

だが魔導師達は構いなく個々のデバイスを構え攻撃を当て

「コリギツー！」

られなかつた。

突然女の子から吹き出た衝撃波に全員吹き飛ばされた。強く地面に叩きつけられ、さらに混乱は激しくなる。

「・・・・・一撃・・・・・！」

女の子はお構い無しに、拳を振り上げ地面に叩きつける。  
さきほどとは比べ物にならない衝撃波が全員を襲い、再び宙を舞う。

「一殺！！」

一人は胴体を斬られ。

「一殺！！」

一人は首と胴体を強制的にさよなら。

「三殺！！」

一人は頭から股までを両断。

「四殺！！」

一人は四肢、首、胴体という三つのパートに別けられた。

「五殺！！」

最後の仕上げに、片足を切り株にされた奴の喉を貫き、切り裂いた。

刀に付いた血を振り払つて、鞘に収めたけど・・・・・ん一、やっぱ殺りすぎた？

ああ違う違う、こんなクス共ぬり披験体扱いされてた子達だ。

治癒術も間に合わない。あ。

「『あれ』なら大丈夫かな？」

えーつと、

「あ～んう～契約つてどーするつけ？」

せ( )

あなたがいらないんだ

「着ぬ言葉として取扱ひすべし。」

「あいあい」

暗羅の指示通り手をかざした。

少女契約中・・・・・。

「'ひ、 かんりょー ウウ」

今あたしの目の前に、子供が四人、気持ちよさそうに寝そべってる。さつきまで死に掛けてたんだ、叩き起こすのも何かなー。

・・・・・・・・ああ、そういうや、あのクズどもが言つてたつけ?『ナルガクルガの親が施設を襲撃した』って。

見に行く価値・・・・・・ありすぎるよなあ・?

子供に結界はつて、あたりを見渡すけど・・・・・・やっぱり木々が邪魔して鬱陶しいので、空へ飛びます飛びます。

あー、煙はつけーん!ちょっと細くなってるけど、狼煙にしちゃ太いし、ビンゴでしょ。

つーわけで・・・・・・。

「暗羅!飛行魔法フルバースト!」

(はあ・・・・・・あいさー)

風を切つて煙の出所に急ぐ。

しばりくいくと・・・・・・あつたあつた!—!

入口とかが派手に壊された施設が、森の中にぽつんとあった!

んで、その入口に黒い生き物が結構な傷を負つて倒れているし、ジヤックポット！！

そいつのところに降りて、怪我の具合を調べる為に近づいたら。

「つ ッ！」

危ねえーっ！？急にシッポビターンはないでしょナルガっち！！え、何？敵と見てるの！？そりゃそーかあ、今まで魔導師と戦つてたんだもんねーそりゃ近づいてくる人間敵だと認識するもんねー。じゃなくて！！

ちょ、これ真面目な話！？どう敵じゃないことを証明するよ！？相手はモンスターだから人の言葉が通じるわけないし。

「えと、えと！？ボールハトモダチコワクナーラー！」

つて！？ライあたしいいい！？ボールつて何なんだボールつて！？

(・・・・・敵ではないのですか?)

「いえーすーあーいあーむ！？」

・・・・・ん？ちょっと待て、こいつ。

「しゃべれんの？」

(ええ、生まれた時から何故か)

声は平然としてつけど、やつぱりつらうんだろつな、視線が定まつてないし。

「大丈夫？」

(・・・・・正直、もう長くは無いでしょうね)

「…………そつすか」

黙つてる理由もないので、さつきの出来事を話す。

やつぱり驚いてたよ、そうだよなー自分の子供が『この世界』じゃ得体の知れないものになつたんだから。

それと、ナルガクルガさんにも色々聞いた。

何でも自分が人間と意思疎通が出来る所為で、息子さんを連れて行かれたんだそうだ。

まあそうだよね、十分に抵抗力を持つてている大人より、まだ未熟な子供を狙うのは自然なことだ。

(・・・・・お願いがあります・・・・・聞いていただけますか?)

「んーあたしの出来る範囲でなら、何でもやるけど?」

(あなた方人間は、狩りで倒した我々の体の一部を使って、武器を作ると聞きます・・・・・先ほど申し上げたように、私も長くありません・・・・・ですがあの子を置いては逝けないならばせめて・・・・・)

「わーつてるわーつてる!そのお願い、叶えちやうよ~?幸いあんたらナルガクルガからはかなり上質の武器が出来る・・・・・大丈夫、息子さんにちゃんと持たせるよ」

ナルガクルガは弱弱しく、くーうんと喉を鳴らした。

多分お礼を言つているんだろう、ゆっくり体を傾けて、そのまま動かなくなつた。

あの後、起きた使い魔たちに事情と状況を説明した。  
ナルガクルガの子はやつぱりショックだったみたいで、大泣きして  
たなあ・・・。

つか今冷静に考えたら、この子らの住居とかの問題があるな。

・・・・・・ん？あたしんち？残念ながら部屋が足りないわ。  
いや、ないこともないけど、今こいつらをいれりゃひとつ守護騎士の  
分の部屋が無くなっちゃう。  
・・・・まあ、それは後々でも考えられるが、まずはあの村  
で腹（はら）にしきるね～。

## 第五話 狩人の世界で（後書き）

はい！長い！！

もつちよつと要点をまとめようぜ自分。んな  
さて、ここで飛鳥の設定をだそつかと思います。  
ちなみに五話時点でのもの。w  
はどうぞ！

一条飛鳥（10・女）

身長：女の子にしては高いほう、下手したら小6でも通じるかも。

体重：秘密  
オーナー

管理者：暗羅

能力：記憶図書館、？？？、？？？  
ライブラリ

詳細：記憶図書館の管製人格により故意に死亡させられた転生者の  
一人。

常に飄々とした態度で「一二」と笑い、時たま周囲を驚かせる策で  
逆境を覆すある意味アイデアマン。

転生先での両親は幼少の頃に亡くなり、親戚であるハ神夫婦の養女  
となつたが、その一人もはやて誕生後に死亡。

以来「一人きりで過ごすことになり、その所為が少々シスコンに目覚  
めている。

主にテイルズ系の術技を、好んで使い、その中で特にヴェスペリア  
辺りを気に入つていて。

記憶図書館の機能を使い武装する、格好は前述のヴェスペリアの主  
人公の服を長袖にしたようなもの。  
実はS、怒るとさらに酷くなる。  
使い魔が四人、現在別居中。

こんな感じです。

次回からはお待ちかね（？）『後の一人』の内一人が登場です！  
それではこの辺で^ ^ノシ

## 第六話田覚め（前書き）

さて、今回は予告どおり後の一人のうち一人が出てきます。  
追記・タイトル入れ忘れてました・すみません；

## 第六話 目覚め

なんだか体が重い

木の葉が  
・・・・かずれる音?・・・・森の中?

るんだつけ？

いつもじおりバイトして · · · · · 今日は早く上がり  
つていよいよ店長さんに言われて · · · · · 喫茶店でご飯を  
食べて · · · · · 。

「一九四〇年五月二十一日」

Side???

え・・・・・・・なんで?」何処?

私がさつきまで喫茶店にいて……・トラックにはねられたはずなのに。

確かに死んだと思ったのに、片腕と足首と脇腹に怪我をしているく

らいだし、場所もある喫茶店じゃなくて森の中……。  
何が起こうたの？

(やつとお田覚めですか、主)

「ふえっ！？」

「どうこうことー？」頭の中で声が・・・・・・・・・・・・

(どう落ち着いてください主、私は藍桜、あなたの能力記憶図書館

の管理者を勤めさせていただく者です)

「え、あ、はい！－よろしくお願ひします！－」

思わず敬語になっちゃったけど一応味方みたいだし、多分私の部下  
・・・てことに多分なるんだろうし、要らなかつたかな？

「えと、藍桜・・・でいいのかな？今私はどうこう状況なの？なん  
でここに？」

(ええその呼び方で構いません、ついでに敬語も不要です、あとい  
つぺんに質問なされないよう)

「あ、ごめんね？」

(まあ、どうせお伝えしなければなりませんので・・・よく聞い  
て下さい)

あの後藍桜から聞いたことを纏めると。

- ・私は記憶図書館(ライブラリ)という能力の適合者に選ばれた。
- ・記憶図書館の能力は、アニメ・ゲームの術技を使用可能にするこ  
と、他にあと一つ能力がある、現在二つとも使用可能。
- ・この『魔法少女リリカルなのは』の世界で起きる悲劇と、歴史の  
改变を止めなければならぬ。
- ・適合者は後二人いる、なお内の一人はすでに転生済み。

- ・現在原作の4年前。  
と言つ感じ。

(ちなみにですが、主と他一名が中々起きないと、原作まで時間が無いというのが重なつたので、管製人格が強制的にここに転送しました、体の傷は・・・・・多分つづかり消し損ねたんでしょう)

「え」

(ですがかえつて好都合だと思いませんか?これを理由に記憶喪失・・・・・とか言えば・・・・)

確かに・・・・・嘘をつくのはちよつと気が引けるけど、まさか『転生してきました』、なんて言えるわけないし・・・・。  
といつあえず、

「まず人里に出たほうがいいのかな?あわよくば住むところも見つかるかもしないし・・・・」

(そうしたほうがいいでしうね、丁度まつすぐ行つた所に街があります・・・・・ちなみに原作の舞台です)  
「へ・・・・・へえ?」

そういえば私、原作知らないけど・・・・・大丈夫かなあ?

(そうそう・・・・・主、名前はどうします?)

「え、名前なら前のを使えば・・・・・あれ?」

前の名前を言おうとして口を開かしたけど、何故か口が文字通り固まつた。

何度も何度も名前を言おうとするけど、やっぱり黙田だ。

「どうなつてこるの……？」

（ねやく転生の影響でしょう、前世の記憶を持つてこるようですが、召前などは口には出来なくなつてこるよつですね）

そんない……………じやあ、

「亞桜桃香つて言つのはどうかな？今からの私の召前

（ええ、いに召前ですよ）

「よし、じやあ……………っ！」

っ……………痛あ～……………！

「怪我していの忘れてた……………」

（はあ…………まあ、幸い記憶図書館に治癒術も入つていますし、応急処置あたりやつたまづがいいのでは？）

「やうだね、えつと…………聖なる活力、こゝへ…………『ファーストエイド』」

私の体に魔方陣が出て、光が周りを回つて私の中に入る。一瞬体が輝いたと思つたら、血が止まつっていた。

よし、それじゃあ……………。

「アレーハのは誰だ？」

やつと空いた時間を使って山での走り込みをしていた時、草むらに向こうから人の声が聞こえた。

俺は一気にそれがおかしいことに気がつく。

ここは普通の人が入つてこないような深い場所だ、こいつののも何だが、俺や父さん、上の妹以外がこれるわけがない。だから、草むらに近づいて声を上げた。

「そこそこのは誰だ？」

草をかき分け奥に行くと、うちの末っ子よりいくらいが年上らしい女の子がいた。

怪我をしているのか、服の所々が赤くなっている。

「君、名前は？ 何でこんなところに？」

質問をぶつけるが、女の子はおどおどするだけだ。

・・・・・少し攻撃的すぎたか？

「あの・・・・・名前は亜桜桃香・・・・・です、何でここにいるのかは・・・・・分かりません」

「・・・・・何だつて？」

あんな態度で質問されたのに、きちんと答えてくれたことに感謝したが、彼女の一言田でまた疑問が生まれる。

「分からぬって・・・・・本当なのか？」

「は、はい、名前以外何も覚えてなくて・・・・・気がついたらここに倒れました・・・・・」

これは・・・・・悪いことを聞いたかも知れないな。

「えと……」「何処ですか？あなたの名前は……？」

おじおじしながら、女の子が俺に質問をぶつけてきた。

「俺は高町恭也」、「」は海鳴市にある山の中だ

あつちも答えたんだ、こちいわたりと答えるきやな。

「海鳴市…………ですか」

「ああ、桃香…………だったか？よければうちて来るか？」

こんな山奥で倒れていた拳句記憶喪失ときた、今は忙しいかも知れないが、一晩くらいなら泊められるだろう。何にしろこんな所に子供を一人に出来ない。

「えと…………じゃあ、お世話になります」

桃香は遠慮がちにお辞儀をした。

さてと、せりあが帰った恭也さんには、家に案内してもらつたのはいいけど・・・・・・・。

何だか慌しいみたいに、どうも末の娘さんが帰つてきていないらしき。日はほとんど落ちているし、一応まだ明るいけど、家族として心配するには当たり前だと思つ。

もちろん私も探すことにして。

これからお世話になるつゝ話のあるナビ、私自身がいつこいつとを放つておけない」ともある。

とこゝ訳で、今その末っ子さんよく遊ぶつてこゝ臨海公園を探しているけど・・・・・。

「広いなあ・・・・」

そう、かなり広いんです。  
あまり動くと怪我に響くし、けじ末っ子さん・・・・たしかなのは  
ちゃんだつたつけ？ その子も心配だし・・・・・・困ったなあ：

(主、前)

「へ？・・・・・あーー！」

いた！ 田の前のベンチにいた！ 黒色のツインテールに緑のリボン・  
・ 間違いない！

「なのはなちゃん？」

目線を合わせながら声を掛けると、びくっと肩を震わせて口ひげに反応した。

反応した

今まで泣いていたのかな？ほつぺたが濡れてるし、目も真っ赤だ。

「・・・・  
だあれ?  
」

「あ、」めんね、私は亞桜桃香って言ひの、お母さん達に頼まれて、

あなたを探してたんだよ」

「うん」

すのとなのはちゃんと濡れてしまつたと皿を拭つて、にじみと

ノルマニカス  
ノルマニカス

なのはちゃんと手をそつと握って、返事を待つ。

「…………おのね、ねじーさんのがうじいとついたときで、ナ  
がしちやつた」

「うん」

「それでね、おニ

「それでね、おひひのみんながかいそがしくなつて・・・・・おかさんのはじめたみどりやでおじい」として、おにーちゃんとおねーちゃんはがつこいつとおかーさんのおひひだことしあがくうでね・・・・

「 うん 」

卷之三

「… そうだね」の…えらい？」といふやうもね、じやまにならなにようひゅうといふにいたるへなかござるたら わたしたんじているの、

気付いたら、なのはちやんを抱きしめていた。

こんなちつちつちやい子がこんなことを思わなきやいけないの？恭也も  
ん達の心情も分からなくはないけど、こんなのがて・・・・・・・・  
・・・・でも、今の私に出来る」とは少なずある。  
だからなのはちやんから離れて、

「「あんね・・・・お母さん達が心配しているよ？帰らう？」「  
・・・・・・・・・・」

偽った笑顔で返事したなのはちやんの手を握つて、高町家へ向かつ。  
・・・・・・・・のくらこの子は、我まま言つてなんぼだ。  
私がなんとかしなきや・・・・・・・・・・！

最近がまつてやれないから……今入院しているあの人の為にも、この子達の為にも、私がしつかりしないと……。

「桃香ちゃんありがとう、娘がお世話をなったわ」「いえ、そんな……」

お礼を言つと、慌てた様子で謙遜する。

…………聞いた話では記憶喪失らしいし、それだと、行くところも無いでじょうに……。

よおしー！

「桃香ちゃん、話は恭也から聞いたわ…………好きだけいていいわよ」

「…………え？ええ！？いいんですかそんなあつさり！！？」「いいのよーどうせ行く所ないでじょう？それに怪我した恩人を放つておく訳にはいかないわ」

「え、あの…………ありがとう」「やれこます！」

ふふつ…………お礼は言つたもののやつぱり驚いてるわね。

「さ、こつちにこらつしゃい、怪我に包帯巻かなきゃ」

「あ、はい！」

視線で娘の美由紀になのはをここから連れ出すよう図する。血はほとんど止まっているけど、わりと酷いのに変わりはないし。ところがこの子、怪我したままなのはを探し出してくれたの？しかもあんなに広い臨海公園から…………。

「まったく…………無茶するわね…………」

「へっ？」

「ん？・・・・・ああ、ここえ、じゅうの話よ」

「は、はあ？」

side桃香

私の服をはだけさせた桃子ちゃんは、傷口に消毒液を吹き付けて、包帯を巻いていく。

消毒液が沁みたけど・・・桃子さん、手際いいなあ。

「息子に夫、せりひん娘がよく怪我するもんだから・・・おかげで応急処置はばっちりよ」

「え、なんで・・・・ー？」

「口に出ていたわよ？」

「あひう・・・・・」

なんか・・・・・恥ずかしいなあ。

「・・・・・・・・・と、よしーこれでいいわ、しばり激しい運動は控えるよ！」

「はい、ありがとうござります」

すると、治療が終わるのを待つてくれたのかな？なのさちやんが部屋に入ってきた。

心配そうに私を見ていた。「ひとこと歩いてきて、申し訳なわけに田を伏せると、

「「「みんなさこ……けがしてたの」「…………わたしをさがしてくれて…………ありがとう」」

「いいよ、みんな心配してたんだから、私はそのまま伝いをしただけ……無事でよかったです」

しゃがんでからなのはさちやんの頭を撫でたら、気持ちよさげに田を開じた。

何だか…………可愛いな…………うん、癒されるよ。

「とつあえず、今日は居間で寝てもらえるかしり～部屋はあるけど、ひょっと散らかっているから…………」

「わかりました」

指示された場所にいくと、もう布団がじこてあつた。

得体の知れない私をおいてくれるところに、お布団まで…………

・・・

思わず布団にむけて一礼です。

ちなみに今着ているのは美由紀さんから借りたパジャマ…………の上着。

・・・・・・・・・・特定の人たちが見たら暴走しそうだなあ。

なんて、じょっとアホなことを考えながら田を開じた。

## 第六話田覚え（後書き）

はい、という訳で桃桜様より設定を提供してもらつたキャラ、桃香の登場でした！

そして美由紀さん台詞なくてごめんなさい；

次回、桃香の能力（の一部）が明らかに・・・・！？

それではこの辺でWW^ノシ

## 第七話少しの恐れと遡れ上がった黒いモノ（前書き）

ヒット記念の小説を書くべきか、本編を進めるべきか考えてこらねば  
べくです。

今回は桃香の力（第一部）が登場！  
それでほづりや。

## 第七話少しの疲れと遅き上がりた黒いモノ

「むう・・・・・・うん?」

何だか眩しいのと圧迫感を感じたのとで目が覚めました。

・・・・・はい? 圧迫感?

体を起しちゃうとしたけど起きられなくて。

ほら、朝って起きたばっかりだから頭がまだ十分に動いていないわけじゃないですか。

だから、ちょっと混乱しちゃって。。。。。

首だけは動いたから、乗つてるものを確認したら、

「・・・・・なのですか?」

す)く気持ちよくなつて寝てて。。。。じつも起しづら氣になれないなあ;

とこつか、何で乗つてるのなのですか?」

「桃香ちやん起きる~?」

ああ、桃子さん!~

「起きてますけど。。。。その。。。。。助けてください

「ん?。。。。あー。。。。」

苦笑いしてないで助けてください桃子さん~

「にしても、さつきは災難だったわね？  
「もう…いつまでひっぱるんですか！」

あれから何日かたつて、こっちの生活にもだいぶなれてくれました。  
現在桃子さんと朝ごはんの片づけ中ですが・・・・。  
さつきから寝起きのことについてからかわれつ放し。これ  
ストレス溜まっているのかなあ 桃子さん。

ちなみになのはちゃんが乗っていた理由なんだけど、本人曰く「なんとなく！」だって。

- ・・・・・・・うーん・上に乗られるのは困るけど、あんな純粋な目で見られたらどうも注意する気が失せるなあ；
- とりあえず、食器を片付けながらこれからのことを考える。  
現時点ではやらなきゃいけないのは、
- ・すでに来ている一人を探しだして協力要請をすること。
- ・原作の介入をどうするか考えること。
- ・改变や悲劇を防ぐためにも、町の地理を把握すること。  
まだまだあるけど、一番優先しなきゃいけないのはこの三つだね。  
で、今すぐに出来ることは三番目の地理の把握なわけで・・・・。  
・。

幸い今日は休日、なのはちゃんも幼稚園は休みだから、一緒に遊ぶ

がてらで出来ると思つから一応解決かな？

「…………か…………ん…………」

ここに来ている人とこれからくる人は…………味方になつてくれるといいな。

「…………ヒ…………か…………ちや…………」

最終目的は同じなんだから、出来れば争いたくないけど、いつも言つてられないことが起きるかもしれないしどうでも。だつたら戦わなきやいけないのかな？…………下手したら…………

…………少し…………怖いな。

「とうかちゃん！」

「うえ！？ふあい！」

「さへせひかひ」

卷之三十一

れやうせんじかんやねやすみなのど、いのねこだねうなれたと

だからせつめからなんかいもんでいるんだナゾ・・・・・。

• • • • •

「どうかちゃんせんせんきいていいの…！」  
せつからぬむしゃことじいわとか、おしゃべりあざめいみねむりしるの  
にー！  
もうーこれでどうかちゃんがなにもいわなかつたひつどうやび  
にこくもん！

「ヒツカちゃん！」

かうとがござへられたの！

「 もうー。しらんぶりしないでよー！」

元あ!? ここのめんね!?

あたふたしながらどうかちゃんがあやまつてきた。  
んー、ほんとうにわるいってかんがえてるみたいだし、

「ヨー・ジやあなたのせよあれー。」

一  
元  
で  
も  
手  
伝  
い  
か  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「大丈夫よ？ 桃香ちゃんのお陰でほとんど片付いたし、なのはの相手はむしろこっちからお願ひしたいくらい」

おかあさんが、とうかちゃんにそうこうしてわらった。  
とうかちゃんはちょっとかんがえてから、

「うふ、じゃあ、お外行こいつか？」

「わあい！」

side桃香

何だかあつたり『地理の把握』を遂行している桃香です：  
ちなみに今、なのはちゃんを見つけた臨海公園で、かくれんぼをしています。

わたしが探す側になつたから、あちこち探し回つているんだけど・・・

「やつぱつ」と・・・そしてなのはちゃんとビ〜？

広さとなのはちやんの隠れ方の上手さに惨敗中です。」  
そりゃそりだよね、よくここで遊んでるなのはちやんと違つてわた  
しは海鳴市にきたばかりのペーペーだし、経験の差がありますがる。  
でもこじはせり、年上のプライドでこじか・・・・・まあ、そう  
いうもんがあるわけで！

だから、諦めずに延々と探し回っているけど・・・・・あ、何  
かが折れやつ。

「や～れ！」

「わひやあつ！？」

え、あ、なになになになに！？後ろから衝撃があ！？

「わづーーとつかちやんがすのへたー！」

「あ、なーんだーもづー・・・・・なのはちやんかあ！」

・・・・・今日こじはせりに驚かれたばなしな氣がするなあ・・・  
・・・・・

「えへへ～、じゅあつせはまたとつかちやんがかくれるばんねー！」

「うふ、分かった」

でもすぐに見つかるのがオチなんだけどね・・・・・。

「じゃあ、かぞえるよ～？」

「は～い」

あんまり離れるとなのはちやんを一人にてらす、ださびあん  
まつ近ずざると簡単に見つかるし。

つかず離れず、つてこじのことを言つのかな？でも難しきねえ；

あ、あのすぐり台隠れるのに一度よそれ。

下の方にでもぐりこで……あ、これなのはちやんがよく見えるし、けど向いから見えにくそうだし、こざとなつたら飛び出しそうやう……。

もしかして当たりくじひいた？

なのはちやんが数え終わるのを待ちながら、頭の中トレーニングを始める。

確かマルチタスクつだつけ？同時に一つのことを考えるついで。何が起こるか分からないし、訓練を怠りやだめだもんね。

ちなみに相手は藍桜で武器は槍。

・・・・・え？剣じゃないのかつて？あれはちょっと重くて……それに一回一回振り上げて振り下ろすつて言つ動作がどいつも隙を作つているように思つんだ。

その点槍は引いて突き出すだけ、戦国時代の農民だって戦の時に愛用していたつて実話があるぐらいなんだから。

「は～ち・・・・・きゅ～う・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・あれ？なのはちやんの声が止んだ……？

嫌な予感がして、まつと顔を上げる。

「っしゃ、ターゲット確保だ！」

「やつたなー早く戻るぞー！」

・・・・・・・・・・・・・・?

「藍桜ーー！」

(補足でしょ、もつやつてこますー)

「あつがとうー！」

どういふこと！？何でなのはちゃんが誘拐されなきやいけないの！？

それがあの人たちの服！『RPGに出てきそつた見たことが無い』

感じのものだつた！！

(十中八九魔導師ですね、なのはさんは元々高い魔力の持ち主でしたし・・・・)

「そういうのは後で！…今はとにかく追うよーー！」

(承知しました主)

なのはちゃんと抱えた二人組は、空のかなり高いところを飛んでいる。

肉眼じや確認しづらいけど、わたしは違つし、何より追つてているのは一人だけじゃない。

(・・・・・！主！一人が高度を下げ始めま・・・・・・続けて転移？まさか・・・・・・この程度で振り切れたとでも？)

「転移先は！？」

(ここから数百メートル先の倉庫が集中しています、そのうちの一つに反応があります)

「分かつた！」

進んでいくと、確かに倉庫がたくさん並んでいるのが見えてきた。ここまで近くなればわたしでも魔力を辿つていける。

魔導師達がいる倉庫を見つけると、壁伝いに屋根に上った。

(主、何故屋根に？)

「いきなり突入して玉砕、つて笑えないでしょ？ちょっと様子を見る」

(分かりました)

ちょうど天窓があったので、そこから覗き込んでみた。  
覗き込んで、やつらの会話を聞いて、

どす黒い感情が湧き上がった。

Free side

魔導師一人は、タバコをふかしながらいやらしい目で、ついせつき  
捕まえてきた幼女を見ていた。

「しつかし管理外第97号は宝の山かあ？某提督といい、このガキ  
といい、高魔力の魔導師が一人も出るなんてな」

「ああ、それに・・・・・・」

内の一人の目が怪しく光る、それを見たもう一人はげんなりとした表情で呟いた。

「こ」の口リコンが

「いいだろ、好きなんだから」

「つか、担当の人遅いな？」

「そういえばそうだな・・・・・まあ、こいつをとつと渡したら、俺達は報酬をもらえて、こいつは管理局の『正義』の象徴である人造魔導師研究の礎になれて、幸せ幸せ万々歳！つてな！」

「ぎやははは！全くだ！！」

そういうつてにやりと笑った時だ。

上方から派手に割れる音がして、ガラス片とともに何かが落ちてきた。

それは起きた土煙を『一振り』でかき消し、獲物を構える。

二人は、呆然とした。

目の前に現れたのは、自分達が確保した少女より年上と思われるが、それでもまだ幼い少女だった。

・・・・姿形だけは、だが。

槍を構えている上、纏っている魔力とオーラが子供のそれではない。何より、大の大人である自分達を怯ませるほど怒りと殺意を放っていた。

さきほどの音で目を覚ましたのだろうか、確保した幼女が自力で猿轡を解き、叫んだ。

「どうかちゃん！」

少女は幼女に向けて、黙つて笑う。

「は、ははっ！ずいぶんと派手な登場だなお嬢ちゃん？だけどおじさんたち今仕事中なんだよね～、いい子だからお家に帰りな」「そうだったんですねか？わたしにはいい年してコスプレしてる痛いおじさん一人がちっちゃい女の子にこれまた痛いことしようとしているように見えたんですが・・・」

少女は底からの笑顔でそう返し、一人の男は額に青筋を浮かべた。

「自分たちの身の潔白を証明したかつたらその子を返してもらえませんか？恩人のお子さんというのもありますが、あなた方のB級映画並にくだらない正義の為に犠牲を出すわけにもいかないので」

少女は笑顔のまま早口ではつきりと言い、男達の青筋がさらに濃くなる。

「ちなみにですが、これより30秒後に返してくれなかつたら強制排除いたしますので、決断はお早めに」

突然男達はだまつて獲物を構え、魔力弾と斬撃を撃ち出す。少女は槍を振り斬撃と魔力弾をいなすと歩法を使つて接近、大きく薙ぎ払い、男一人を飛ばした。

槍を構えたままいくらか後ろに下がり、幼女の側に駆け寄つた。両手足を拘束していた縄を切り、自分の後ろに下がらせる。

「つちーやるなお嬢ちゃん」

「まったくだ、それに魔力は後ろにいる娘以上、今日は大収穫だな」

「それはよかつたですね、でも『大収穫』の三文字はわたしを倒してから言つてください」

笑顔を変えないまま、少女は槍の切つ先を男達に向けた。男のうち一人が剣を構え、少女の後ろ側に回りこむ。

「二方向からの同時攻撃なら、流石によけきれないよなあ？」

「それにそつちは一人だが、まともに魔法を使えるのはお嬢ちゃん一人だけ、実質2対1つてところだ！！」

少女は急に無表情になりしばらく黙っていたが、また急に笑顔になつた。

「ええ確かに『今は』一人ですね」

そう言うと、槍の柄尻で地面を突き、未完成の魔方陣を開させた。男二人はかまわず剣を振り上げ少女に切りかかるが、見えない壁に邪魔をされ、叶わない。

そうこうしている内に魔方陣は組みあがり、少女は詠唱を始める。  
「其は同胞に慈悲深く、仇に容赦なし、来よ、大海に眠りし水統べる姫君『ウンディーネ』」

魔方陣が、清流を思わせる色に輝き、周囲の者の目を眩ませる。光が收まるごと、少女と幼女を護るようにして脇にたたずんでいる女性がいた。

さらに、耳の形や肌の色が人間のそれではない。女性が静かに目を開き、少女に視線を移した。

初めてまして桃香、あなたが今後のわたしの主になるのです

ね？

「うん、よろしくねウンティーネ、早速だけど…………い  
くよ」

御意。

女性がそう返して槍に触れると、水となつて槍の中に入つていく。槍に、変化が起き始めた。

柄尻に水晶玉が、刃に凍土が、そして槍全体が蒼天の色に変わる。

「・・・・・はあつ……」

次の瞬間、素早く、大きく弧を描き、二つの地点を絶対零度の一閃が通過した。

一人の男は両足を固定されただけだが、痛みは足だけではなく全身に走つたため、二人仲良く倒れて夢の中へ入る。

少女は、流石に殺すことをしなかつたらしい。

残されたのは、目の前で起こったことに呆然とする幼女と、冷たい目で倒れた二人を見つめる少女だけだった。

## 第七話少しの恐れと湧き上がった黒いモノ（後書き）

さて、今回出た桃香の能力。

名称および詳細は待て次回ということです！

べつ、別にこの回で書ききれなかつたんじや ないんだからねつ！？

こんな小説ですが、見てくださる方の為に頑張りうつと思います。

それではまた次回お会いしましょう！

## 第八話不安（前書き）

今回ちよつと短いです；

第八話不安

Side なのは

とかちやんがふしぎなひかりをつかって、へんなおじさんたちをやっつけたの！

「お疲れ様、もう戻つていよい？」

わからぬといふが、おどろいた！

「どうかちゃん！ いまのふしぎなちからなあに？ まほひー。」  
「んー・・・・・ とりあえず説明はあとでね？」  
「え、なんで？」

そしたら、パトカーのおどがきこえたの。

遠くの方からサイレンが聞こえてきたんだけど……。  
『氣のせいか』に近づいて来てくれる『氣』が。

(あのパートナーの無線を盗聴しました、びっくり感は的中してこ  
るやつですね)

「うふ、報告あつがとう藍桜あーーー」(泣)

「とつかちやん! いまのふしきなみかうなこっそりとくへー。」

そうとは知らないなのむちゅこは田をキラキラさせ、それとの由  
來事についての質問をしてくる。

あつう・・・・・ひこののが一番厄介なんだよね・何の悪戯も疑念  
もなくただ好奇心で聞いてくれるひこのの・・

「んー・・・・とつあえず説明はあとでね?」

「え? なんで?」

「警察がきているから、早くこいからでないと」

「おまわりさんがくるんでしょ、なんでにこなきゃいけないの?」

「魔法なんて言つても誰も信じないでしょ? ね?だから早く帰ろ?」

あああああサイレンが近づいてきたああああああ；  
なのはちゃん早く決めてええええええええ；

「うん分かつた！帰ろ！」

۹۷

「『』みんなで二つ！でも逃げろお一つ！…」

なのはちゃんと抱えて脱出です！

「はあーつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

卷之三

「正直…………もーへとへと…………」

身体強化してもきついものはきついんだね；

体のあちこちが痛い・・・・・・明日は絶対筋肉痛だ、うん。

家を出る時美由紀さんに貸してもらつた時計で時間をチェックする。

現在1-2時前・・・・そろそろ帰らなきやだね。

高町家からはそんなに離れてないのが不幸中の幸いかなあ。

「『めんねとうかちゃん、なのはがほんやりしてたせいで、あのおじさんたちとたたかうことになつちやて・・・・』

「いいんだよ、なのはちゃんも無事でよかつた・・・・せ、今度こそ帰るつか？桃子さんがまつてるよ」

「うん！」

なのはちゃんの手をとつて歩き出す。

帰りながら、自分は魔法を使えること、無闇やたらに人に話してはいけないとをなのはちゃんに言い聞かせた。

「ねえねえ！じゃあさつき出てきた人も魔法？」

「さつきの・・・・・ああ、ウンディーネ？」

「うん！」

「そうだよ、でもあの子は人間じゃなくて『精霊』、いつもは見えないけど、ずっと側にいて見守ってくれる存在なんだよ」

そう、それがわたしの能力の一つ『精霊召喚』。

今のところ召喚可能なのは、ウンディーネを含めた4体だけ。

でも『これが有るか無いかで、わたしの戦略の幅は大いに広がる』とは藍桜談。

これから頑張りたいです。

ああ、そろそろ高町家につくね。

「ただいまー！」

「すみません！今帰りました！」

「なのはー桃香ちゃんー！」

美由紀さんが血相を変えてわたしに駆け寄ってきた。

・・・・・なんでだろう、さつきの出来事が脳内で再生されているんだけど。

「二人とも大丈夫だつた？ セリフテレビの速報で港の倉庫で謎の光と爆発音がしたって・・・・・・」

「だ、だいじょうぶだつたー！」

「え、ええ、臨海公園ですっとかくれんぼしましたから」

それを聞いて、ほつとした顔になる美由紀さん。

・・・・・本当はもう当事者なんだけれどね：

「セリフなの？」

「うんー…とかちやんかくれるのもさがすのもへたなんだよー。」

「うぐつ・・・・」

魔法のこととか隠さなきやいけなことはいえそこまではいつわわると傷つくなあ・・・・・・。

あれ？ 目から水が・・・・。

「とにかく一人とも無事でよかつた、お風呂はなんできてるよ」

「わーいー！」

「あつがとつぱりこまわー」

とつあえずお腹もすいたし、まづはぱい飯だね。

お昼を食べ終わった後、縁側でなのはちゃんと和んでいる。  
午前中、騒いでの二人に連れ去られるっていう事件があつたせい  
かな？

わたしの膝を枕にして寝ている。

・・・・・・・・・・あ、また戦いが脳内に・・・・・・。

さつきからずつとこう。

あの魔導師一人組みと戦ったときの映像が、繰り替えし再生されて  
いる。

思えば結構容赦なくやつたよねわたし。

・・・・・・・戦つことを怖がってた今朝のわたしはどうにいつ  
たのや。ひ。

「そういえば、一人がなのはちゃんと近寄つてズボンに手をかけたのを見たときに思つたんだっけ？」

『殺してやる』って・・・・・・・。

前世ではそういうの無かつたはずなんだけどなあ；  
…………あとの一人に会つたときも、似たようなことが  
あつたら…………。  
わたし、自分をコントロールできるのかな？  
もし本当に殺しちゃつたら…………ビリしよう。  
…………高町の人たちに嫌われるのは必須だらう  
なー…………。

「桃香ちゃん？」

「あ・・・・・桃子ちゃん」

「大丈夫？顔色が悪いみたいだけど…」「…」「…」

あーあ・・・・桃子さん心配させちゃった。  
今度から気をつけなきゃ。

「ええ、大丈夫です……」めんなさい、ちょっとと考え事して  
て……」

「アーティスト、アーティスト」

桃子さんが隣に座ったのを確認してから、お茶を飲む。その後はわりと他愛の無い話をした。

夕方、わたしはあの臨海公園にいる。

槍を実際に構えて振り回して、どうしてもできてしまつ隙を埋める  
為の、動作確認をしていた。

• • • • •

「...」  
「...」

思わず槍を地面に叩きつける。

また頭の中で、戦いが描かれたからだ。  
もう・・・・・いい加減にして！！

## 第九話潜入と治療（前書き）

今回ちょっととぐだぐだしています；

## 第九話 潜入と治療

side 桃香

「じゃあ桃香ちゃん、いつてくるね」

「はい、いつてらっしゃい」

どつも、桃香です。

今日は桃子さんが入院している田那さんのお見舞いに行くといひ」とで、留守を任せられました。

なのはちゃんも行くといひ」とで、家には私一人です。

「…………ん、じゃあ藍桜」

(はい、術の訓練…………ですね)

「うん」

あれから、槍はちょっとお休みして、魔術に専念している。自分の頭の中に意識を集中させて、詠唱や魔方陣の展開のシミュレーションを重ねる。

・・・・・戦うのが怖いって言うのかな?なんだか不安要素が多くて、藍桜にドクターストップならぬオーナーストップをかけられちゃって・・・・・。

それにわたしのもつ一つの能力もあるから、慣れておいたほうが多いだろうつてことで・・・・・。

次々現れるターゲットに、使える術を片っ端から打ち込んでいく。風、水、火、土、光、闇、それぞれの属性を帯びた術が、ターゲットを面白いぐらいにつぶしていく。

いつから始めて、いくら時間がたつたのか、分からなくなってきた頃に玄関の扉が開いた。

桃子さんが帰ってきたのだ。

思考をマルチタスクに切り替えて、出迎えにいっただけど……なんかみんな……出かける前より暗くなってる気が。

田那さんの怪我、そんなに酷いのかな？

「おかえりなさい皆さん」

「ええ……ただいま、お留守番ありがとうね」

「はー」

気になりつつもあえて聞かないのは、わたしなりの気配り。あまり人に触れてほしくないことがあるのは、わたしも同じだからね。

いぐらか桃子さん達と話した後、自分の部屋に戻つて考える。

「…………やつぱり田那さんの怪我が原因なのかな？」

(でしううね、初めてあつたときのこともそうでしたが……

あれは周りのことを考えすぎて、逆に自分の殻に閉じこもってしまう、というパターンです）

「…………ふう…………どうしたもんかなあ」

話しているのは、なのはちやんの」と。

初めて会つてから、今までずっと、わたしや桃子さん達に「我ままらしい」我ままを言つていらない。

本当に…………五歳児でこれはちょっと危険だと想つ。

「士郎ちゃんの怪我…………治せないかな？」

（程度によるとどうね、何にしろ見てみないとこには…………）

「んー…………そつかあ」

…………あ。

「病院に潜入…………とかは？いきなり完治したら怪しまれるから、完治寸前とか容態の改善とか、治癒術使つてなんとかならないかな？」

（潜入つて…………忍者じゃないんですから…………でも、現時点ではそれが最善でしきうね）

「でしょ？」

（しかし士郎氏の病室は？潜入に成功したとしても場所が分からなければ…………）

「問題があるとすればそこかあ…………んー…………」

「…………」

（…………いつぞ病院のシステムにハッキングします？）

「それは最終手段にすることを提案するよ藍桜」

やむを得ない場合もあるんだろうけど、犯罪はよくないしね；最終手段以外で土郎さんの病室を知る方法は・・・・・。

「桃子さんに聞くとか」

（目的を聞かれるという面倒が生まれますね）

「あう・・・・・じゃあ恭也さんが美由紀さんに聞く？」

（前述と同じ面倒が生まれます）

「あああ・・・・・」

ほ、他に方法は・・・・・。

「病院の人聞く！」

（潜入するという観念から大幅にずれていませんか？）

「うう・・・・・」

やつぱり最終手段を使うしかないかなあ・・・・・。

（考えてみてください、なのは嬢以外に魔法の存在を教えていない状態で正当な方法を使うのはほぼ不可能と思われます）

「・・・・・・・・・」

うん、止めありがとう藍桜あー！－！ｏｚ

同田PM23:00

カタシッ・・・・。

「・・・・・!？」

(物音には十分ご注意を、主)  
(わ、分かつてゐるよお・・・)

お察しの通りただいま病院に潜入しています。

病室の場所?ええ、ハッキングで探しめてましたが、何か?  
つといけないいけない、通り過ぎるとこひだつた;

(ここが土郎さんの?)

(ええ、間違いありません。主、九時の方より反応、  
巡回の看護婦と思われます)  
(つー分かった!)

なるべく音をたてないように扉を開けて、中に入る。

続けてそのままの状態を保つてベッドの下にもぐりこんだ。

思つたとおり看護婦さんが病室の扉を開けて、懐中電灯で一通り部屋を照らす。

わたしは限界まで息を殺して、看護婦さんが去るのをじっと待つ。

「…………氣のせいかしら？」

看護婦さんの独り言が聞こえた後、扉が閉まる音がした。

足音が、遠くに消えていく。

「…………ふうーっ」

ベッドから出ると、自然に大きなため息が出た。

（去りましたね、当分は巡回もないでしょ）……主、今の内に

「うん」

槍と魔方陣を出現させて、構える。

「思つたより軽いけど……ひどい事に変わりは無い……か……

・・・・・うん」

柄尻を床につけて、唱える。

「彼の者を死の淵より呼び戻せ『レイズデッド』」

一瞬の光、それが士郎さんの体の中に入り込んで、傷を消していく。

・・・・よし、これなら大丈夫かな？

「さてと、用事も済んだし、帰ろうか？」

（ええ、今の光に気付いた者がここにきたら、面倒なことになりますからね）

巡回の看護婦さんに注意しながら、高町家へ帰還です。

Free side

翌朝。

桃香は騒がしさを耳で感じ取り、まだ眠気の残る脳を無理矢理覚醒させてリビングに下りると、突然美由紀に抱きつかれた。

何となく予想はしていたが、病院の連絡網と高町家の喜びように圧

倒されてしまつ。

本当は知つてゐるが、そ知らぬふりをして騒ぎの原因を聞いてみた。

「おとうさんがあめをやまましたの！」

桃香の質問に答えたのはなほだつた。

「やうなの？ よかつたね！」

ちなみにこの言葉は、~~お~~居半分本心半分である。術を使用したとはいへ、本当に治つたのか正直不安だつた。それに、意識を取り戻すといつ予想以上の結果を生み出すことができたのだ。

喜ぶなど言つほうが難しい。

「今から病院にいくけど、桃香ちゃんも来る？」

「え、いいんですか？」

「もちろんー。あなたのことを紹介するいい機会だわ」

「あ・・・・・はい！」

桃香が着替える為に部屋に戻るつとすると、なほに服を引つ張られる。

耳を貸せといフジエスチャーをしたため、身をかがめた。

「おとうさんをおしたのつて、とうかひやん？」

「・・・・・なんでそう思つたの？」

「だつてとうかひやんませうつかえるでしょ？」

純粹にそう聞かれ、桃香は苦笑いして頷く。

なほは顔を明るくすると、桃香に抱きついた。

side 桃香

あれから数日、士郎さんの退院も決まって高町家はお祝いモードに入っている。

内緒でやつたとはいいくらいか恩を返せた感じがして、凄く清潔しいです！

今は一人で散歩をしている。

臨海公園に立ち寄って、持参したお茶を飲んで一息。  
ん~・・・何ていうのかな？こういうのんびりする瞬間っていうの？すくなく落ち着くしほっとするから好きだなあ。

「ふう～・・・・・」

はたから見たらすつゝく幸せそつなんだりつなあ、今のわたし。  
さてと、田もだいぶ傾いてきたし、そろそろ帰らな

(主！後ろ！)

「え？」

フォンツ

ドスンツ

ドサツ

## 第九話潜入と治療（後書き）

さて、次回はちょっと早いですが、桃香編プロローグの最終回！

桃香はどうなつたのか？

期待してくれると嬉しいです（笑）

それでは＾＾ノシ

## 第十話異能バニ異能（前書き）

夏バテにせりれて、更新が遅くなつてしまつ申し訳あつません…さ  
ばくです。

桃香のプロローグ最終回ですが…。・  
いつも以上にグダグダで「やこまへす…！」（ヤケ  
よろしければ生暖かい田代見守つてやつてください；  
それではどうぞ！

第十話異能VS異能

side なのは

「変ねえ・・・・・・」

おかげで、ためしをついた。

הנרטיב

おにいちゃんもおねえちゃんもしんぱいしてね。

「母さん、ちょっと探しにくるわ」

「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十」

おどりやんとおここのけやんがさがしにいきました。

side 桃香

・・・・・・・・・?

(お田覚めですね、主)  
「藍ちゃん……」

何? ……廃屋? どうしてここに? ~

といふか、頭の後ろが痛い ……それに手足が拘束されてる …

「つそりだー散歩してて、そろそろ帰らうかなってときに誰かに殴  
られて ……」

思い出していたときによ、ドアが乱暴に開けられた。

「こいつが例の?」

「ええ、黒い長髪に深緑の田 ……間違いありません」

・・・・・・あれ?

「もしかしてわたし、あなた方に拉致されたんですか?」  
「ほつ、察しがいいな? その通りだ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「はあ・・・・・で、何が目的なんですか？」

「おまえが居候している高町家・・・・・正確にはその大黒柱・・・・といつたところか」

相手を睨みながら、思考と観察を始める。

一人は藍色のスーツに黒いサングラス、金色に染められた髪。もう一人は黒いジャケットに右手に鉄パイプ（鈍器を持っているから、多分この人がつれてきたんだろう）、白いシャツにジーンズを履いている。

そしてこの人たちの狙い・・・・・『高町家の大黒柱』は・・・・・。

「土郎さん・・・・ですか」

「そうだ」

まったく、退院したばかりの病み上がりを狙うなんて・・・・・。

（ですが作戦的には有効ですね、主が目覚めるまでの間、失礼とは思いましたが土郎氏を調べてみました・・・・・『裏』の世界では有名人のようですね）

（・・・・・・・・・『裏』？）

（要人の警護・・・・・俗に言う用心棒ですよ、今回の入院も警護中に傷を負つたから、だそうです）

なるほど・・・・・・・。

「それで?土郎さんが狙いなら何故わたしを?」

「人質だ」

・・・・・。

(漢字三文字ひらがな五文字で返しやがりましたねこの野郎)

「（まつたくだよ）そうですか、でもあの人なら意味が無いでしょ  
うね」

「・・・・・何？」

丁度一人の肩越しに窓が見えた。

外はもう真っ暗だ。

現時刻は分からぬけど、高町家のみんなが探しているのは間違いないだろ？

人質というかなり足手まといのポジションになってしまったわたしに出来ることは何か？

簡単だ。

「あまりお会いしたこと無いわたしでも分かります・・・・・士郎さんは強い、それこそ、人質が意味を成さないくらいに」

『現実を混ぜた虚実』<sup>うつ</sup>で行動の無意味をすり込み、すこしでも相手の戦意を奪うこと。

自力で脱出は一の次にしておこうつかな？

「そんなこと重々承知だ、だが本当にそうかな？こちらには数えるのも億劫なくらいの人手がいるんだぞ」

「・・・・・それはつまり『一人ではわたしを救出できない』・

・・・・・と？」

「そうだ」

・・・・・。

「はあ」

「…………何故ため息を？」

「考えてみてください、彼はまだ成人していないとはいえ十分に実力を持つたお子さんを一人ももつてゐるんですよ？それに・・・・・」

今の自分に込められるだけの敵意を相手に向ける。

「もしそれでも足りなければ、わたしが加勢しますよ？拘束をされ

たままでも・・・・・ね」

「・・・・・・・くつ」

あ、今笑つたな。

「くつくつく・・・・・ああ、いや・・・・・これは失礼・・・・・」

・ただ、あまりにも滑稽だつたからな・・・・・」

「・・・・・・・・・そうですか、ですがその余裕もいつまで続  
くでしょ? 今頃表の方々は全滅・・・・・」

「何・・・・! ? つちくしょ! ! !」

「おいで! ! !」

黒服のおにいさんが部屋を飛び出していった。

・・・・・こんな嘘に簡単に引っかかるなんて、馬鹿だね。

嗚呼、でもそろそろ虚実のネタが無くなつてきた・・・・・・・・・

「さて、もういいだらうへ出でてきたらどうだ?」

・・・・・はい?

「・・・・やすがに気付いていたか」

「当たり前だ・・・・ほつ、息子も一緒か」

おじさんと会話しながら部屋に入ってきたのは、士郎さんと恭也さんだった。

free side

廃屋にて、士郎と男が睨みあう。

士郎の後ろには息子の恭也が控えており、敵に隙あらばすぐに飛び出し桃香を助け出そうと、機会をうかがっていた。

「こちらの期待を裏切るなんて酷いじゃないか、邪魔者が死ぬと思って大喜びしていたのに」

「それは失礼したな？だが、運はどうも私に味方したようだ」

「残念だ、しかし不思議だな？ついこの間まで意識不明だったお前が今日になって退院と来た・・・魔法でもない限り不可能な回復力だ」

「そうだな、実際私は意識不明から一気に回復できた・・・・・・本当に誰かが魔法をかけたとしか言いようがない」

「ふん、まあ味方がいてくれてよかつたな？お陰でこっちは最悪だが」

桃香は『売り言葉に買い言葉とはこのことをいうのだろうか』と思いつながら士郎の完治を『魔法』や『最悪』、『死ぬと思って大喜び』の単語に、冷や汗をかいたり、敵意を向けたりしていた。

その時

「！」のガキヤア！－よくも騙しやがったな！－！

血相を変えた黒服の男が、恭也を押しのけ桃香の胸倉を掴んだ。

「何をそんなに怒っているんですか？相手が流した情報を疑いもせず信じ込んだあなたの自業自得でしょう？」

桃香はなるべく顔色を変えないように勤めながら、黒服の男に言い放つ。

「つくそがあ！－舐めんなあ！－！」

黒服は感情に任せて桃香を床に叩き付けると、パイプを振りかぶる。だが、パイプがおろされた先に桃香はいなかつた。

「桃香の『』ことはもつともだ、自分を正当化するために暴力を振るうなんて姿、弱く見えるぞ」

いつのまにか桃香を抱えた恭也が、黒服の後ろにいた。

黒服は悔しそうに下唇を噛み、地団太を踏む。

恭也は桃香の拘束を解くと、自分の後ろにやつた。

「…………人質も無くなつたか…………さて士郎、突然だが死んでもらおうか？」

「本当に突然だな？まあわたしにその気はないが…………つ！」

始まりは一瞬だった。

男がどこからか取り出した刀で士郎の顔に一閃を打ち出す。士郎は仰け反つて避けると恭也と桃香を下がらせ、咄嗟に拾い上げた鉄棒で刀を薙ぎ払う。

「恭也！桃香ちゃんを…………」  
「はい！」

答えるなり、恭也は桃香を脇に抱え後方に飛び退いた。

男は突然にやりと笑い、刀を空振りする。

士郎と恭也は何のことだか分からなかつたが、桃香は違つた。

「二人とも頭を下げてください……！」

音が脳に到達する前に、ほほ反射的に身をかがめた。

直後に後ろの方でバーンと何かが切れる音。

振り向くと、壁に綺麗な斜線が刻まれていた。

「よく気付いたな、だが次は無いぞ」

男が再び刀を振り上げ、縦一閃を繰り出す。

士郎は横に飛び退いてそれを回避した。

足手まといになってしまったと思ったのか、恭也は桃香を手を引き外へ出ようとする。

実際部屋はそれほど広くも無い上、敵味方合わせて5人もいるのだ。このままでは、いるだけで士郎の動きを妨げてしまうのは目に見えていた。

しかし、

「そう簡単にお家に帰らせるとでも？『あーか…させられるわけねーだろ！…』」

黒服がパイプを恭也に打ち付けた。

幸い急所には当たらなかつたが、相当のダメージを負つたようだ。

恭也は肩を押さえ、その場にうずくまる。

それを確認した黒服は、士郎を羽交い絞めにした。

「息子もしばらくは動けまい……それにわたしにはこの『断空』の能力がある、勝負ありだな？高町士郎」

笑う男や黒服とは対照的に、士郎は顔をしかめた。  
男の刀が振られる。

もし男が、口中で言葉を紡ぐ桃香を視界に入れていたなら、確実に勝つていただろう。

「ノーム！…」

断空の一閃は、突如現れた岩に阻まれた。

side 桃香

土郎さんも恭也さんも窮地に追い込まれてる。  
あのおじさんの『断空』はかなり厄介だけど、防げないわけじゃな  
い。

(だよね？藍桜)

(ええ、  
『彼』の力なら可能です)

(ん、じゃあ……)

おじやんとおにこやんに気付かれないように、言葉を紡ぐ。

「其は大地に根を張る堅き質、來たれ山吹の太子・・・・・・・・・・・・

おじさんの刀が振り切られると同時に、わたしはその子の名前を呼んだ。

「ノーマーク！」

士郎さんの田の前に、岩が突き出でてくる。

それは『断空』を上手く防いでくれた。

それと同じくして、士郎さんを抑えていたおにいさんに山吹色の何かが体当たりして、無理矢理離した。

初めてまして主！呼び声に応じてホーム参上だよっ！

「うん、ありがとう」

そんな元気な声とともに、山吹色の体毛をもつた、四速歩行の動物が、わたしの隣に浮いていた。

おじさんやおにいさんだけじゃなくて、士郎さんや恭也さんも驚いた様子でじっと見ている。

とはいって、ボク状況がよく読めてないんだ、さっきのも主が望んでたからやつたことだし・・・・・。

「大丈夫、簡単だよ」

わたしはおじさんとおにいさんを指差して。

「この人とこの人は敵、ただそれだけ」

槍を出して、構えた。

「桃香ちゃん？」

士郎さんが戸惑つているようすで、わたしを見る。

・・・・・・・・・・ちよつと、いきなりすぎたかな？

「大丈夫です」

今いえることは少ない、だからそれだけ伝えた。

そしたら、分かつてくれたのかな？土郎さんはさつき落とした鉄棒を拾い上げて、わたしの後ろに立つた。

恭也さんも鉄棒を構えて土郎さんの隣に立つ。わたしさこの場を任せてくれた一人に感謝しながら、おじさんおにいさんと向き合つた。

「君も私と同じか」

「異能を持つている点ではさうじょひがど、あえて言います、同じにしないで下さ」

「それは失礼した、だが私と戦えるかな？モノが違うとはいへ、仮にも武人だ、相手の構えに迷いがある」とぐらり、見抜けるぞ？」

おじさんはあの『断空』でたくさんの人を殺してきたんだろう。

それこそ、老若男女関係なく。

おじさんの言う『迷い』があるのは当たつてい。

これからのこととか、わたしが背負つている『やるべき』とか、正直、わたしで大丈夫なのかと不安でいっぱいだ。

だけど、

「『迷いがあるから』『怖いから』って言い逃れして、戦うべきときに戦わないで背を向けるなんて真似やるほど、臆病者でもありますせん」

ちょっと到達するのが早すぎたかもしれないけど、これがわたしの結論。

文句も何も、言わせない。

「流派なし無所属、亜櫻桃香、推して参ります」

よーし！絶対勝とうね主！

それを合図に、ノームが槍に憑依する。

槍は山吹色を主としたカラーリングへと変化し、鐔は広がり盾に変形した。

真つ先におにいさんが突っ込んできて、パイプをわたしに振り下ろす。

わたしは槍の盾で受け止めてそれを弾き返し、飛び上がって顔面に回し蹴りを叩き込んだあげた。

「少しばらうやるようだな・・・・だが、これはどうだ?」

おにいさんがやられたのを別に気にしてなさそうな感じで見ると、刀を振ってきた。

「効きませんよ」

案の定断空を撃つてきたので、盾で防ぐ。  
直後、後ろに気配。

振り向きざまに、わたしも向こうにも一閃を繰り出す。

おにいさんが、パイプで殴りかかっていたらしい。

さつきわたしが蹴ったところは、赤く腫れ上がっていた。

また後ろで動き有り。

咄嗟に頭を下げるが、おにいさんの顔に紅いラインが入り、真ん中から上を切り落とされた。

「・・・・・・・ビリしてくれる?」

おじさんのがドスの聞いた声を、口から解き放つ。

「貴重な駒が減つたではないか」

「とかいこいつ、それほど残念そうでもありますんね?」

おじさんの文句を流しつつ、撃ちあいを始めた。

窓の外にちらりと視線を移すと、わざとは見えなかつたビルの時計が見えた。

(もう九時回りこむ……ちょっと早いけど、いい加減決着つけなきゃだね)

おじさんの刀を弾き飛ばして、バインドで四肢を拘束する。

「ヒクセリオン……」

ノームの憑依を解除して投降の姿勢をとつて、構える。

「ストライク……」

おじさんの胸部田掛けて、槍を投げた。

避ける術が無かつたおじさんは、槍をもろに受けた倒れる。

もちろん非殺傷設定だから死にはしないけど、しばらく起きないだろつ。

・・・・・なんだか呆氣なかつたかな……なんて考へながら苦笑いをした。

そうしているうちに土郎さんたちが、わたしに近づいてくる。

「……帰るつか

「……はい」

拒む理由も無いので、そつ返した。

s i d e 士郎

帰り道、桃香ちゃんは教えてくれた。

恭也に発見された時に覚えていたのは、名前と生活の知識と魔法の使い方だったこと、港の騒ぎの当事者は自分となのはだということ。そして、俺の傷を治したのも、自分だとこいつこと。

何故?と聞くと、彼女は笑つて、

「わたし、なのはちゃんの気持ちが何でかよく分かったんです、それになのはちゃんまだ5歳でしょう? 我がまま言つてなんぼの年頃で、あれはちよつと危険かなって思つて、勝手にやつたんです」

最後に「結果、皆さんに迷惑かけることになりましたけど」と云つて、苦笑いをした。

だがすぐ後にその笑顔を消して、寂しそうに俺と恭也を見て、聞いてきた。

「わたしが怖いですか？」

俺がさきほど、相手の異能の力で死に掛けだからだひつか？  
内容は違うとはいえ、同じ異能を持つ桃香ちゃんだからこの問い合わせかもしれない。

軽く恭也とアイコンタクトで相談して、決める。

「怖くなこわ」

「…………本当にですか？」

かなり意外そうな表情でこちらを見ている桃香ちゃんの目を見ながら、言葉を紡ぐ。

「ああ、君はなのはを守つて、俺を一度も助けてくれた、そんな子を怖がる理由なんて無いよ」

目先の彼女は、放心した状態で俯き、小さく呟く。

「…………ありがとござれこまわ」

俺は黙つて桃香ちゃんの頭を撫でた。

## 第十話異能VS異能（後書き）

といつわけで、桃香のプロローグ終了ですが・・・反省点多いです。士郎さんの口調と一人称が分からなかつたり、恭也さんとともに若干空気になつていて、戦闘がそんなに続いてなかつたり etc etc

ツゲフングエフン、さ、気合を入れなおして、今回は桃香も設定一（十話後時点）いきまーす！

亜桜桃香（8・女）

身長：女子の平均よりちょっと下くらい。

体重：「女性の体重を聞くとかどういう神経していらっしゃるんですか？」（黒笑）

能力：記憶図書館、精霊召喚、？？？

オーナー：藍桜

詳細：記憶図書館の管製人格により故意に死亡させられた転生者の一人。

基本おつとりとしており、常に癒しオーラを醸し出している少女。だがひ弱な見た目とは裏腹に、しつかりとした芯の持ち主でもある。中々目覚めないと、原作開始までの時間がなくなつたことを理由に、管製人格に強制転送させられた。

主に槍技や、精霊との連携、後方支援を得意としている。

ちなみに戦闘の際に武装をするかしないかは検討中のこと。

実は隠れ腹黒であり、その黒さは彼女が怒った時に合い間見えることができる。

普通「目が笑っていない笑顔で怒る」というが、彼女の場合は「田も笑っている笑顔で怒る」である。

最近居候先の高町夫妻の進めにより、聖祥小に入るため勉強中一（といつてもすでに小学校の知識はあるため復習くらいだが）。

能力の一つ『精霊召喚』は、現在ウンティーネ、ノーム含めた四体を召喚可能。

後々召喚可能数が増える予定・・・。

さて、次回は三人目の転生者の話が始まります。  
期待していただけると幸いです（苦笑）  
それではこの辺でへへノシ

## 予告？（前書き）

すみません；あれから色々考えた結果、三人目のプロローグは書かないことにしました。

いや、三人目はちゃんと出ますよ？ただ、そっちの方がキャラを生かせそうだったので・・・・・迷惑をお掛けします。

一応今回から本編ですが、タイトルの通り予告っぽくなっていますので、ちょっと短いです。  
それではどうぞ。

ナニ?

s.i.d.e ???

妙なる響き、光となれ！  
たえ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

赦される者を、封印の輪に！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ジュエルシード！封印！！

じゅえる・・・・・?どつかで聞いたよつな・・・・?

逃がし・・・・・・・・・・・・・・

何だあ・・・・?これ?

追いかけ・・・・・・・・なくちや・・・・・。

・・・・男の子?

誰か・・・・・誰かぼくの声を聞いて。

・・・・・ああ、なるほど。

力を貸して・・・・・!

原作の始まりかあ。

魔法の力を・・・・・!

s i d e ? ? ?

妙なる響き、光となれ！  
たえ

・・・・・何？これ？

赦されやる者を、封印の輪に！

・・・・・！」は、ビリ？

ジユノルシードー・封印ーー

じゅえる・・・・？しービ・・・・？

逃がし・・・・ちやつた・・・・。

・・・・・あ、怪我してる・・・・・!?

追いかけ・・・・・なくちゃ・・・・・。

その怪我じゃ無理だよー!!ここののー?!

誰か・・・・・誰かぼくの声を聞いて。

聞こえるよー!だから答へて、どうこうのー?

力を貸して・・・・・!

光・・・・?・・・・・・・・イタチ・・・・うつさ、フュレット?

魔法の力を・・・・・!

待つて!すぐに助けるから!ー!

何故俺は生きている?

確かに劇場版を見た後、喫茶店で昼食を取つていて・・・

それで、暴走したトラックが突っ込んできて、確かに絶命したはずだが・・・?

それに・・・

「なんで『男』になつてんのかな?」

ああ、言つてなかつたな?俺の元々の性別は『女』だ。  
まあそれはいいとして。

先ほど述べたように、俺はあの喫茶店で確かに死んだはずだが・・・

・・・・・ん?何で女なのに男みたいな喋り方してるかつて?別にいいじゃないか。

誰がどうこう口調で喋らうが、個人の勝手だ。

・・・・・というのは建前で、実家が武家だからというのが一番の要因だが。

さて、本題に戻つて続けるぞ?

死んだと確信した直後に真っ暗になつて、気が付いたら知らない部屋で寝ていた。

一体何がどうなつてゐるというんだ?

(お田覚めですか?)

(一生目を開けなかつたらどうしようかと思つたよ~)

・・・・・・・・・・・・

「・・・・・寝よつ」

(残念、ここ夢じゃなくて現実 )

(突然申し訳ありません、ですが現実逃避はなさらないよつ)

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

「分かつた、でだ、俺は今どういう状況になつてている?」  
(おーらい、とりあえず話すからよく聞いてね?)

脳内で響いた男女の声に思わず逃避しそうになつたが、現実であることを半ば無理矢理受け止めて、声に耳を傾ける。

曰く、確かに俺は死んだが、記憶図書館の適合者ライブラリだつため、異世界に転生させられた。

曰く、この『魔法少女リリカルなのは』の世界で起きる悲劇や歴史の改変を阻止しなければならない。

曰く、俺の死因であるトラックの事故は、記憶図書館の管製人格による人為的なものである、なお、適合者は俺を含め三人いるらしいが、それ以外の死者は出でていないとのこと。

曰く、記憶図書館の他にも、あと一つ能力がある。

曰く、自分達はデバイスの人格にあたるもので、管理者と呼称される、なお、前述の能力の影響で、普通は一人のところを一人になつていてる。

曰く、現在原作の約1ヶ月前。

・・・・・・・・・・・・

「もうすぐ始まるじゃないか」

(相棒含めた二人が事故のダメージ大きかつたみたいでさ、間に合わないつてことで、ランダムに転生させられたんだよね)

「何だそりや・・・・・

といづか、

「肝心な疑問が解決出来てないぞ、『何で俺は男になつているんだ?』

『』

(え、女だつたんですか?)

(ありや?じやあ管製人格が間違えたのかな?)

「・・・・・・・・・・・・どういうことだ?」

(その前にちょっととかくにーん、君、生前もそんなしゃべり方だつた?)

「あ・・・・・ああ

(失礼と思つけど・・・・・胸は?)

「・・・・・・・ああ、ああそうだつたさ!・・見事なまでに壁だつたさ!・!」

武の心をもつてゐるとはいへ、女としてそこだけは欠点だと感じていたんだ!!

(あーじゃあ簡単だ、男に間違えられたんだよ)

・・・・・・・・・・・・・・

(ええと・・・・・)愁傷様です)

「いや、お前達は悪くないから・・・・・大丈夫だ」

(ありがとうござります)

「そういえば、名前を聞いてなかつたな?」

(はい、私は暗サワと申します)

(俺は闇サワ、よろしくうへ、といふで相棒の名前は?)

ああ、そうだったな、先ほどの話を聞く限り、前世の記憶は口に出  
来ないようだから・・・・・。  
さてと・・・・・どんな名前にするか・・・・・。  
・・・・・・ん? ドアの開く音?

「あ・・・・・田が覚めたんですね?」

『始』まるのは、『破壊』の物語。

『続』くのは、悲しみか、喜びか。

何こしる、『終』わりに待つものは何なのか、誰にも  
分からぬ。

武器を『創造<sup>ツバメ</sup>』、『言の葉』を紡ぎ、護るために『狂い』。

現状を『見て』、仲間を『使役』して、『砕けない』刃で切り開く物語。

これから語られるのは、そんな話だ。

とある姉の原作破壊（仮

始まります。

## 予告？（後書き）

ところが、予告？終わりです（  
前書きで述べたように一応今回から本編です。  
さて・・・・・上手く書けるかどうか・・・・・。  
それではこの辺でへへノシ

もつお氣づきかも知れませんが、最後の予告のところの、囲まれた  
部分は、割と重要事項だったりします（苦笑

## 第十一 話始動（前書き）

「つまくまとぬきれす」反省・・・。

## 第十一話始動

「…………何か…………変な夢を見た気が…………」

「どうも、亜桜桃香です。」

突然ですが、言葉の通りつっこむつきまで変な夢を見ていました。  
何だか…………雜木林みたいな場所で、マントを羽織った男の子  
と、黒い…………生物って言つていいのかな……？  
とにかく、その両者が戦つて、両者とも傷を負つて、男の子が助け  
を呼んで倒れる…………っていう内容だったんだけど…………。

「夢にしちゃ妙にリアルだつたし…………だとしたらどうい  
るのかな？」

着替えながら、夢について考察です。

ちなみにだけど、あれから4年経つてます。

あの後、高町家の皆さんに魔法のことを打ち明けました。  
もちろん拒絶されたら黙つて出てこくつもりだつたんだけど、全然  
そんなこと無くて。

普通に受け入れてくれて…………あくび嬉しかったなあ…………  
…………。

それから学校にも通わせてもらつて、現在小学6年生です。  
ちなみにのはちゃんは3年生…………。  
藍桜によると、そろそろ原作が始まらしげ…………。  
ちゅうと緊張します；

(おはよ'ひ'やれこます、主)  
「え、あ、うんーおはよ、藍桜」

(思者が終わったようなので声を掛けました、あと、時間・・・・・)

「時間・・・・・？」

藍桜に促されて、時計に手をやると・・・・・。

「あ、ほんとだ、藍桜ありがとうございます」

(当然です)

ジャージの上着を着込んで階段をおり、道場へ向かつ。

「すみません、お待たせしました！」

「大丈夫だ、せ、始めよ！」

「はー！」

待っていた恭也さんと向き合つて、木の槍を構える。

「…………むう…………なんか変な夢見ちゃつた…………」

多分同じ年くらいの男の子が、助けを呼ぶ夢…………。  
何か意味があるのかなあ？後で桃香ちゃんに聞いてみよつと。  
さてと、着替えて朝ごはんだ！

「おはよー」

「あ、なのはおはよー」

「おはよー、なのは」

お父ちゃんとお母さんに朝の挨拶をして、お母さんのところへこも  
す。

「はー、これお願ひね」

「はーい」

渡されたのは、人数分のコップが載つたおぼん。  
わたしはそれをテーブルまで運んで、新聞を読んでいたお父さんに  
一つ渡します。

「今日はちゃんと起きられたな、えらいぞ」

「朝ごはん、もうすぐ出来るからね」

一人に笑って返してから、お父さんに聞きました。

「お兄ちゃん達は？」

「ああ、道場にいるんじゃないかな？」

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、桃香ちゃんおはよー朝」はんだよ~「

お庭に出て、道場の扉を開けて、中にいるみんなに声をかけます。中では、四年前から家に居候している小学六年生の桃香ちゃんと、大学一年生のお兄ちゃん、高校一年生のお姉ちゃんが、田課の組み手をしていました。

ちょうど終わったみたいで、桃香ちゃんの技が綺麗にお姉ちゃんに決まつていました。

「うあー・・・桃香、前より強くなつてない?」

「そんな!私なんてまだまだ・・・」

お姉ちゃんに誉められて、慌てる桃香ちゃん。わたしは一人にタオルを渡しました。

「ありがと」

「ありがとうのはちゃん」

二人とも嬉しそうに笑って、汗を拭きます。

「じゃあ一人とも、今朝はいじまで」

「はー」

「じゃあ続きは学校から帰つてからね」

みんな一緒に、ワーディングに行きます。

side 桃香

「んー、今朝もおこしーなあ、」のスクランブルエッグが…  
「ほんとうに…トッピングがトマトとチーズと、それからバジルが隠  
し味なの…」

土郎さんは、今田も桃子さんの料理をべた褒めしている。

「みんなあれだぞ？」んな料理上手のお母さんを持つて幸せなんだ  
から、分かってんのか？」

「分かってるよ、ね、なのは、桃香」

「うん…」

「 もちろんです」

美由紀さんが、苦笑いしながらわたしたなのはちゃんと振ってきた  
ので正直に答えた。

「あん、もうやだあなたつたら」

(・・・・・今朝もかなりの新婚っぷりですね・・・・・)」までもく  
ると尊敬の域に入ります)

(あはは・・・・・分からなくもないかも)

・・・・・・慣れつてす』』なあ。

流石に四年もいるとのこの田の前で繰り広げられる新婚オーラがなん  
ともなくなつたよ。

嗚呼、赤面してた頃が懐かしい・・・・・。

「美由紀、リボンが曲がつてゐる」

「え? ほんと?」

つと、いつひでも。

十郎さんと桃子さんほどじやありませんが、恭也さんと美由紀さん  
もかなり仲良し。

高町家三人兄弟含め、愛されてる直覚はあるにはあるのですが、わ  
たしはもしかすると微妙に浮いているかも・・・・。

「あ、なのはちゃん、ここはねてる」

「ほんとうー?」

「うん、でもこれくらいならブラシかけばいいと思ひます」

「そつかあ、よかつたあ~」

・・・・・・・訂正、わたしとなのなはちゃんも仲良しです。

「あ、そうだ、桃香ちゃん」

「うん？」

バス停へ向かう途中、なのはちゃんが何かを思い出したみたい。

「昨日、変な夢を見たの」

「どんな？」

「あのね・・・」と語りだすなのはちゃん。  
どうもわたしと同じ夢を見ていた様だった。

「わたしも同じ夢を見たよ」

「やうなのー?」

「うん、多分、誰か助けを呼んでいるんじゃないかな? そのためには送った信号が、たまたまわたしなのはちゃんに届いたんだと思つよ」

「じゃあ、速く助けなきゃ!」

確かに、夢を見る限り相当なダメージを負つていてるみたいだし、救出は早いに越したことは無い。

だけど・・・。

「焦っちゃ駄目、助けなきゃいけないのは確かだけど、今から行つたらみんなが心配して探すでしょ?」

「あ・・・・・・」

「こんな言い方なんだけど、あの様子だと一日ぐらごほつといても別に死ぬような感じじゃなかった、だから放課後でも遅くないこと思

「う

「…………うん、そうだね」

丁度バス停が見えてきたので、結論をなのはちゃんに伝える。

「さつきもいつたけど、放課後になつてからでも遅くないと思ひよ  
?だから絶対助けようね」

「…………うん!!」

やつてきたバスに乗り込み、運転手さんに挨拶。  
と、

「なのはちゃん!桃香さん!」

「一人ともいつちいち!」

バスの一番後ろのほう。

二人の女の子が手を振っていた。

「すずかちゃん、アリサちゃん!」

「おはよ」

「おはよう、なのは、桃香」

わたしたちが座ると同時に、バスが発車した。

ちょっと勝気な感じのアリサ・バニングスちゃんと、おひとりだけ  
ど芯は強い子月村すずかちゃんはなのはちゃんの友達。

一年の時から同じクラスで、今年からは同じ塾に通い始めた。

・・・・鳴呼、この三人のやりとりは見てて微笑ましいなあ。

「この前みんなに調べてもらつたように、この街にはたくさんの仕事をあつたな、この街のお店の働く人たちの様子や工夫を実際に見て聞いて、大変勉強になつたと思つ」

担任が黒板に書き込みながら、この間の三年生との合同で行われたお店調べのまとめをしている。

「このように、色々な場所で色々な仕事があるわけだが、みんなは将来どんな仕事に就きたいか？」

将来・・・・か、そういうえば考えたことなかつたなあ。

「今から考えてみるのもいいかもしないな」

そのとき一度チャイムが鳴つた。

「将来かあ・・・・・」

なのはちやんがそつぼやきながら、タコちゃんワインナーをほおばる。  
ビーフやハンバーグのほりでも似たような話がされていたみたいだ。

「アリサちゃんとすずかちゃんは、もうけつこつ決まっているんだ  
よね？」

「つむせお父さんもお母さんも会社経営だし、いっぴい勉強してち  
ゃんと後継がなきや・・・・・くらいいだけど？」

「わたしは機械系が好きだから、工学系で専門職がいいなあ、と思  
つてゐるけど・・・・・」

「確かに」

アリサちゃんとすずかちゃんの二人はほどんど決まっているみたい。

「一人ともす」「こよねえ・・・・・」

「でもなのはは喫茶翠屋の一丁目じゃないの？桃香も

「うーん・・・・・それも将来の一つのビジョンではあるんだけど・  
・・やりたい」とは何かある気がするんだけど、まだ、それがなん  
なのがはっきりしないんだ

なのはちやんは最後に「わたし、特技も取り柄も何もないし・・・  
と付け加えた。

…………って、なのはちゃん？それを言つたり…………といふか、もつ我慢の限界みたいですよ～～？

「ばかちんー！」

「つむぎやつー～！」

あーあ、アリサちゃん立腹：

投げたレモンがなのはちゃんのまへべたに命中枢す。

「自分でからぬうこう」とゆうもんじやないのー！」

「もうだよ、なのはちゃんにしか出来ないこと、わひとあるよ」

まあ、一人の意見には賛成だけどね。

自分に自身を持たなきや。

逆にあんまり持ちすぎてもいけないけどね。

「だいたい！理数の成績はこのあたしよりも上なのにそれで取り柄がないところのせどりの口よー～！」

アリサちゃんがなのはちゃんの両頬を掴んで弓を伸ばす。

・・・・おお、面目こくらっこいのがるなあ～。

「あわわわ・・・・・だつて、文型苦手だし体育も苦手だし・・・・・

なのはちゃんの言つてることは間違つてなくも無い。

・・・・・でも理数が得意な時点で凄いと思つけどなあ。

(主はすべて中の上ですものね)

(藍桜・・・・・今言わなくともこいでしょ？『』にしてるんだから・・・

・・・・・)

言葉の通り、気にしている」とを指されたのでビーンと落ち込むわ  
たし。

「ふ、二人ともやめようよ！見つとも無いよお、ねえ？ねえったら  
！・・・・・って桃香さんも何落ち込んでいるんですかー？戻つ  
てきてくださいあーい！」

side なのは

自分に出来る」と・・・・・自分にしか出来ない」と・・・・・かあ。

「ねえ、今日のすずかドッジボールす”かつたよね？」

「うん、かつこよかつたよねー」

「そんなことないよ・・・・・」

塾に行く道。

今アリサちゃんすずかちゃんと話しているのは今日の体育の」と。  
ドッジボールですすかちゃんが大活躍だつたの！

桃香ちゃんは塾にいってないから途中で分かれました。

話している途中にすれ違った犬が、わたし達にむかって吠えてきた

からなのか？

アリサちゃんが振り返つて、

「黙つてなさい。」  
「<sup>Be quiet</sup>」

それからちゅうと歩くと、また急にアリサちゃんが走り出して、

「じゅうじゅうちーじーを通ると塾に近道なんだ！」

たくさんの木に囲まれた道を指差して、嬉しそうに言った。

「やうなの？」

「ちゅうと道悪いけどね。」

聞いてきたすずかちゃん、「アリサちゃんは苦笑いしながら答えた。  
した。

三人でその道に入つて、そんなにたつてない頃。

あの夢がわたしの頭の中で再生された。

(じーじー……夢でみた場所……)

「どうしたの？」

「なのは？」

急に立ち止まつちゅうた所為か、一人が心配そつこいつを見てい  
る。

「あ・・・、ううう、なんでもないー。」めぐめぐん・・・

「大丈夫?」

「うんー。」

すずかちやんが心配そうな顔のまま聞いてきたので、首を縦に振る。

「じゅあ、行ーい！」

やつぱりアリサちやんに向こうとひつて、一回振り返って、

「まあかね・・・・・」

「なのはちやんー。」

「あ、うんー。」

すずかちやんにせかされた時でした。

助けてー！

そんな声が聞こえて、思わず立ち止まつてしまふ。

「なのは?」

アリサちやんが気付いたのか、声を掛けてくる。

「今、何か聞こえなかつた？」

「何かつて・・・・・何が？」

「何か・・・・・・声・・・・・みたいな」

「何か聞こえた？」と聞くアリサちゃんに、すずかちゃんは「何も・・・と答える。

助けて！

また声が聞こえた。

しかもさつきよりはつきりしている。

わたしは、一人の制止も聞かないで走り出していた。

## 第十一話始動（後書き）

桃香の担任は男性、故にそれっぽく書いてみたのはいいですが・・・。

どうも教師らしくねえ；

・・・・まあ、いつか！

さて、次回はついになのはちゃんと覚醒！ 桃香は？ あいつは？ 最後の一人は？ 一体どうするのか！？

「うー」期待！！ ノシ

## 第十一話のはぢやん、初の魔法使用（前書き）

原作しつてるから楽勝だつて？とんでもねえー！  
見返さなきや分からぬいような部分がいくつもあって、逆に大変だ  
ったよ！

ツゲフンゲフン、さて、今回はタイトルどおりなのはぢやん覚醒で  
す。  
それではどうぞ。

## 第十一話なのはちゃん、初の魔法使用

side 桃香

「あの・・・・みんな、ちょっとといい?」

夕飯のちょっと前、なのはちゃんが切り出した。  
なんでも大事な話があるらしい。  
わたし含め、みんなその話に耳を傾けた。

少女説明中・・・

なのはちゃんの話が終わった。  
まとめるとこうだ。

- ・アリサちゃんが勧めた塾への近道を通っていた時、助けを求める声が聞こえた。
- ・その声は昨夜夢で聞いた声だった故、音源に向かうと傷ついたフェレットが倒れていた。
- ・もちろんすぐに獣医さんへ連れて行ったが、そのフェレットを誰が面倒を見るかという課題が発生しているらしい。

・食べ物商売ゆえ、家に動物を入れるのは気が引けるが、アリサは犬を、すずかは猫を家にたくさん飼っている為、うちしか引き取るといひが無いといつ・・・。

「ふうむ・・・・・」

腕を組み考へ込む士郎さん。  
口からだた言葉は、

「といひでなんだ? フュレットって?」

ずつこける一同。

士郎さん・・・・・フュレットくらい知つておきましょいよ〜・

「イタチの仲間だよ、父さん」

「だいぶ前からペットとして人気の動物なんだよ」

すかさず恭也さんと美由紀さんがフュレットについての情報を、士郎さんに教えた。

「フュレットって、ちっちゃいのよね?」

「えーと・・・・・」れぐらー

桃子さんが料理をテーブルに置きながら問い合わせに、なのはりちゃんは両手でサイズをあらわした。

「じょりく預かるだけなら、かこにいれておいて、なのはがきちんとお世話できるならいいかも、恭也、美由紀、桃香ちゃん、どう?」「俺は特に依存は無いけど

「わたしも」

「わたしもありません、ただ、なのはちゃんが聞いた声と関係がありそうな気がして……杞憂だといいですけど」

まあ、話を聞く限り害はなれそうだけど……ね?

「ふうむ……だ、そうだよ?」

「よかったですわね」

なのはちゃんは嬉しそうに、頷いて「ありがとう」と呟つた。

free side

なのはは、アリサとすずかに、フェレットを家で引き取れるようになつたことを、メールで報告していた。  
文章を打ち終え、送信のボタンを押した時。

聞こえますか？ぼくの声が聞こえますかー？

「…………つー」

一瞬で、なのはは気付いた。

「タベの夢と眞間の声と、同じ声…………！」

すぐになのはは『声』に聞き入る。

聞いて下さい、ぼくの声が聞こえるあなたー！お願いですー！ぼくに少しだけ、力を貸してください！

「…………あの子が…………しゃべっているの？」

力を貸して！時間が…………危険が…………もう…………！

バリン、とガラスが碎けるような音がして、声は途絶え、なのはは現実に戻った。

そのままふらつき、ベッドへ倒れこむ。

一方、例のフェレットが預けられている動物病院では、黒い影が近づいていた。

お風呂もすんで、部屋に戻っている時だった。

さつきパジャマに着替えたはずのなのはちやんが、普段着に着がえて、廊下を走ってきたのだ。

しかも血相を変えて。

ちょうど隣にいた恭也さん、不思議そうに聞いた。

なのはちやんがどこかに行こうとしているのは確かなようだ。

「なのは? どうしたんだ?」

「さつだよ、エリコこへの?」

よつぽど慌てていたのか、なのはちやんは單口で言った。

「あの子が……あのフーレットさんが呼んでいるの……」

「……本当?」

思わず確認をとってしまったわたし。なのはちやんは力強くうなづいた。

「さつこの訳で恭也さん、ちょっと行ってしまいます」

「……正直気が引けるが、任せるしかないよつだな、父さん達には俺から言つておくよ」

「あつがとつれこまお」

小さく頭を下げて、わたしはなのはちやんと外に飛び出した。  
・・・・・風呂に入った後なんだからパジャマ姿で出たのかって?

大丈夫、今着てこるのはジャージですか。

なのはちゃんの案内で、フーレットが預けられているところの病院に  
来た。

一見何も起じていないように見えたけど……。

なのはちゃんが突然頭を抱えた。

「ひじうしたの？なのはちゃん……」

「へうへ……また……この音……」

苦し紛れになのはちゃんの口から出たのは『音』と二つの単語。  
気がつくと、金属音のような音が確かに聞こえた。

直後に、空気が変わった。

全体的に赤っぽくなる周囲。

「結界……でも誰が……」  
(い、主……)

藍桜の声が響いて、獣の唸り声と、何かが崩れる音が聞こえた。

「桃香ちゃん！あれ……」

なのはちやんが指差した先にそいつらはいた。

一つは、なのはちやんが言つてたであつたフュレット。もう一つは以上だった。

全体的に黒く、触手のようなものが一本生えている。体の表面は、毛なのかスライムのようにするべつなのか、見当が付かない感じのおそらく生き物だ。

黒いモノが触手でフュレットを薙ぎ払う。

フュレットは間一髪で避けて、飛ばされて、一度なのはちやんの腕の中に納まつた。

なのはちやんは小さく悲鳴を上げて、尻餅をついてしまつ。わたしさ槍を出して一步前に出て、黒いモノを睨んだ。

「な・・・・なになに！？一体なに！？」

『魔法』の存在を知つてゐるなのはちやんでも、『アレ』は初体験らしい。

まあ、当たり前といえば当たり前なんだかど・・・・・。

「来て・・・・・くれたの？」

そのとおり、フュレットが恐る恐るしゃべ・・・・・・・つて……？

「しゃべった……」

なのはちやんも考へは同じだったみたいで、声が重なつた。

(主は魔法を知っているんだから、別に驚くことは無ことと思こます  
が……)

「……仕方ないでしょー? 魔法を知つても驚くことは驚  
くの……」

(さいですか……)

背後でグオオオッと黒いモノが吠えた。  
無視するなどでも言いたいの?

だけど残念、そんなひ弱な触手程度で……。  
わたしに傷つけられると思わないで!!

槍を横一閃、向かってきていった触手を両断する。

「なのはちゃん、逃げるよ……。」

「あ、うん!」

魔力を圧縮して、黒いモノの目の前に発射した。  
着弾を確認しなくてもいいので、なのはちゃんの手を引いて、病院  
から脱出する。

背後から、強烈な光が溢れた。

「えっと、一応魔法は知ってるけど、一体なんなの…？何が起つていいの…？」

桃香ちゃんに手を引かれて、町の中を逃げ回るわたし達。

その間わたしはフュレットさんにお話を聞いてみることにした。

「あなた達には資質がある、お願ひぼくに少しだけ、力を貸して…」「し、資質？」

「説明を要求します」

「そういえば、桃香ちゃん言つてたつけ？『なのはちゃんは魔力が高い方だ』って。

「ぼくはある探し物のために、こことは違う世界から来ました、でもぼく一人の力では思いを遂げられないかもしない」

だから、とフュレットさんが続けます。

「迷惑だとは分かっているのですが、資質を持った人に協力をしても欲しいくて…」

フュレットさんがもがいて、わたしから降りると

「お礼はします！必ずします！ぼくの持っている力を、あなたに使って欲しいんです！ぼくの…・・・・魔法の力を！」

「お礼とか、そういう問題ではないと思つのですが…・・・・」

そういうお辞儀するフュレットさんと、苦笑いをする桃香ちゃんでも・・・・

「わたし、魔法使つことないし、あんなのと戦つてこいつのなり、桃香ちゃんにお願いした方が……」

「なのはちゃん、フュレットさん、下がつてーー。」

桃香ちゃんの声で上を見ると、やつらの黒いお化けが上にいた。わたしは夢中でフロレットちゃんを抱き上げて電柱の裏に隠れた。

「お礼は必ずしますからー。」

だから、お礼とかそういう問題じゃ……」

あの黒いお化けを見る、あの落ちたといろで苦しそうに動いている。すると桃香ちゃんが立ち上がり、

「・・・・・フェレットさん、デバイスは持っていますか?」

「え、あ、はい！」

「それをなのはちせん！」

「わかりました」

デバイス・・・・桃香ちゃんから、聞いたことがある。

魔法使いさん達の相棒みたいなもので、1+1を2だけじゃなくて、二二も二二も出来ら丁度性三必の二倍動く。

『言つことを聞かない杖』になつたり、

『杖に使われている術者』になっちゃつたりするつて。

フヒレジアちゃんはわたしに紅いビー玉みたいな宝石を渡してくれた。

これがデバイス・・・・・・。

「わたしが時間を稼ぎます、なのむちゅんはフーレットさんにお伝え

てもらつてその子を起動させて」

「え、でも！」

「大丈夫、あれくらいなら負けない」

言ひなり桃香ちゃんはお化けと戦い始めちやつた。

・・・・・・よし！

「フューレットわん！」この子の起動の仕方、教えて！」

「は、は、は、田を開じて、心を済ませて、ぼくの言ひとおりに繰り返して」

「うん！」

フューレットわんの言ひとおり、田を開じて、集中。

「我、使命を受けし者！」

「わ、我、使命を受けし者！」

「契約のもと、その力を解き放て！」

「契約のもと、その力を解き放て！」

「風は空に、星は天に、そして、不屈の心はこの胸に！」

いつのまにか、フューレットわんと声が重なつてこる。

「！」の手に魔法を！－レイジングハート－セットアップ－！－

途端にデバイスから光が溢れて、わたしは桃香ちゃんに言われたことを思い出す。  
確か・・・・・。

「落ち着いて考えて！君を護る服と、杖を……」「分かつてる！」

頭の中に杖とわたしを護る服……バリアジャケット……だけ？

をれを浮かべる。

「とりあえず！これで！」

『Standby ready - setup』

デバイス……レイジングハートが光って、わたしを包み込んだ。

(しかし……以外としぶといですね、この思念体……たしかロストロギア『ジュエルシード』でしたっけ？もしさうであれば封印の必要がありますね)

「ちょっと話さないで藍桜！集中できない……」

わたしが藍桜に怒鳴った時、

side 桃香

「IJの手に魔法を…レイジングバー…セシトアップ…」

なのはちゃんが「バイクスを起動させた！

あと少しあたしが耐えれば、なのはちゃんが封印出来るはず。

相手も十分弱ってきたしね！

…………え？お前も封印できないのかつて？残念、出来ません！！

そもそも封印の術式自体組んでいないから、今のわたしさ戦いつくら  
いしか出来ないの！

（術式組んでおけばよかったです、封印面では思いっきり役立た  
ずです…）

「だからじやべらないでよ…」

触手が突っ込んできたので、体を仰け反らせて避けた。

そのとき、いくつかの桜色のスフィアが黒いモノに当たった。

「桃香ちゃん…」

「なのはちゃん…」

なのはちゃんは、学校の制服を元にした白いバリアジャケットと、  
先端部分に紅い宝珠が付いた杖を持っている。

…………といつか。

「なのはちゃんシーター出来たの？」

「全然！桃香ちゃんの見よう見まねでやつたんだ、上手くじつてよ  
かつた」

…………つまり、ほとんど勘でやつたんだねなのはちゃん；

つと、黒いモノがまた触手を伸ばしてきたので、槍で斬り飛ばす。続けて繰り出された体当たりも障壁で弾き飛ばした。壁に叩きつけられて、再びもがく相手。

「フュレットさんー早くなのはちゃんに封印のやり方を教えてあげてください！」

「分かりましたーえと、なのはさん？」

「はい！」

フェレットさんがなのはちゃんに封印術をレクチャーし始めた。よし・・・・あと少し！

「墜牙！爆炎槍！」

槍を振るつて黒いモノを打ち上げ、火を纏つた刃で突く。

「リリカルマジカル！」

つと、なのはちゃんの準備が終わったね？

じゃあわたしはここで退散。

あとは任せよつと。

「封印すべきは忌まわしき器ージュエルシードシリアルナンバー 2  
1、封印！」

なのはちゃんが持っている杖から光の帯が伸びて、黒いモノの中に進入。

核になつてていると思われる青い宝石のようなものを捕まえた。黒いモノはもがくだけもがくと、青い宝石を中心に消え去った。

「『れがジユエルシードです、レイジングハートで触れて』  
「うそ」

青い宝石……ジユエルシードはなのはちやんの杖の宝石部分に吸い込まれていった。

同時に結界が解除されたので、わたしも槍を納めた。

「ふう、一応一件落着……なのかな?」

「はこ、ありがとう…………『れこ…………』…………」

「あら、フュレットさん倒れちゃつた。」

…………なのはちやんが見つけたときは相当地つていたらしくから、そのダメージが来たのかもね。

それで、とつあえず家に……。

(主) 警察が『あら』に向かってきています)

「…………」

遠くからはサイレンの音。

嗚呼、この展開どこかであつたよくな…………。  
でも結界を張つていてたとはいえ派手にやつたからね~。  
証拠に所々半壊したり、全壊したり…………。

「と、桃香ちゃん…………」

「うわ、じめんなぞ……」

「でも逃げろ~~~~~」

フレットさんを抱えて、一人でその場を離脱です。

## 第十一話なのはぢゃん、初の魔法使用（後書き）

今回桃香が使つ技は某深淵物語の某陰険眼鏡大佐の技です。  
だって、わたしの中で槍といつたら彼ですもん！！  
それではこの辺で、次回もお楽しみにへへノシ

## 第十二話 ノーノ（前書き）

高町家はみんな魔法のことをしつているんですが・・・。  
自分未熟なもんで、皆さんに伝わっているかどうかが心配です。  
さらに今回は短い上に内容が薄い・・・すみません；  
そんな十三話、どうぞ。

3／19・修正

## 第十三話「一ノ

「はあーつ・・・・・ふうーつ・・・・・」

現場から逃げ出して、とある公園に逃げ込みました。  
4年前を思い出して思わず苦笑い。  
なのはちやんも相当わかつた。

「はあー・・・・・はあー・・・・・」おでくれば・・・・・

「うん、とりあえずちゅうと休憩しよ~」

「分かった」

所々ぼかしてもだいたい内容が通じるのは、やっぱと一緒にいるからかな?

あ、フェレットさんが起きた。

「う・・・・・・あ、お一人とも・・・・・あの、先ほどはありがとうございました、お陰で残りも魔力を全部治療にまわせました」

そういうお辞儀をするフェレットさん。

でも、自分で包帯を解くなんて、器用だなあ。

「いいよ、元はといえば君が呼んだから駆けつけたことが出来たんだよ?」

「やうだよ、無事でよかったです」

「・・・・・はい、本当にありがとうございました」

あの念話を届いてなかつたら、フェレットさんも終わつてただろうね。

ああ、そうだ。

「フューレットさんのお名前は？」

「あ、まだ名乗っていませんでしたね、ユーノ・スクライアです、スクライアが部族名なので、ユーノがお名前ですね」

ユーノ…………か…………うん。

「いい名前だね」

「どうも……」

さてと、そろそろ疲れも取れてきたし…………。  
これ以上外にいたら恭也さん達に心配をせいやう。

「なのはちゃん、そろそろ…………」

「そだね、ユーノくんもいっしょに帰ろう?」「はい」

あ、そうだ。

「敬語はいらないよ?ユーノくん」

「え、でも…………」

「それわたしも思つてた、多分これから一緒に暮らすんだから、いらないと思うなあ」

わたしどのちやんの言葉が予想外だったのか、困惑しているフレット改め、ユーノくん。

…………小動物つて見てるだけで癒されるよね。

(お言葉ですが主、彼は『人間』ですよ?)

(わかつてゐよ・・・もう・・・)

そなんだよね。

魔力が枯渇しかけているところから見て、人間よりサイズが小さい  
フュレットになることにより、魔力の消費を抑えているんだうね。

「・・・・・うん、わかつた、よろしく・・・・えつと・・・・・

「あ、まだ自己紹介してなかつたね？わたしは高町なのは、小学3  
年生」

「亜桜桃香、小学6年生」

「なのは、どうか、よろしく」

s i d e    ? ? ?

「おろ？結界消えた？ついでにジユエルシードも」  
(消えたな、ついでに中にいた連中は移動したようだ……追う  
か？マスター）

「うんやー、追わんでいいやろ、『介入』はまだ早いと思つ

しつかし、本当に春頃なんだねー原作始まるの。

「介入するにしても、巨木騒動が一番きりがいいと思うんだ、接触  
は・・・・・あのでかいにゃん」(あたりでいいでそ  
(ふうむ・・・・ではそれまでどうする気だ？)  
「遠くから見守る？？」

(・・・・・そうか)

あ、いため息つきやがつたなこの野郎。

「まあ、ピンチになつたら手助けへらこはするよ？」  
(・・・・・手助けだけか？）

「『困難はそれを乗り越えられる人だけにやつてくる』！あたしが  
前世で呼んだ本にでてた一文だよ～～～」  
(なるほど・・・・一理あるな)

「けど、流石に死にそだつたら助けるよ～」  
(わかった)

そつわい、ついでに忙つと今まで会話しながら素振りやつたのよ

ね

ちゅうじゅう飯も出来たみたいだし、家にはいつかな?

「おねーちゃん?」飯出来たよ~

「おーらい、今行く~」

s.i.d.e ???

む・・・・・。

(あらり、結界消えたね?)

(やうですね、同時に中にいた者たちも移動したようです)

「そうか……」

あれから数ヶ月。

なんとかこの体にも慣れてきた。

今は住んでいるマンションの一室で、マルチタスクを駆使し剣技の練習をしている。

(それでも、さすが武家出身つて奴？一般人から見てもいい太刀筋してんじやん)

「前世でもこちらでも鍛錬は欠かさなかつたからな、自分で言つのもなんだが、それ相応の実力がついたのだろう」

(あとは実践あるのみですね、お嬢様たちが合流するのは再来週辺りでしよう？)

「ああそうだ、だから……………」この世界にも探索者がいるなら、邪魔させるわけにはいかない

(まあ、もしも敵わなくとも俺等には最高にして最凶の『切り札』があるからね)

(それに私もいます)

「分かっている」

つと・・・・電話か。

「もしもし?・・・・・ああ、お前か・・・・元気だよ

free side

あれから無事家に帰つたのはと桃香、そしてユーノ。  
現在ユーノの事情を説明しあえた後である。

「でも驚いたわ、魔法なんて本当にあるのね」

桃子は興味心身でユーノを見つめている。

「しかし・・・いいのかいなのは？危ない目にあつたんだり？」

士郎と桃子は不安そうにはを見つめる。

特に士郎は、自分と同じ目にあつて欲しくないのだろう。

「…………うん、でもユーノくん困つてるんだよ、せめておけない」

「桃香ちやんばっかり戦つわけにもいけないし……」となのはは続けた。

「すみません、ぼくがもつとじつかりしてたら……」

ユーノが申し訳なさそうにうな垂れた。

「でも、『近所にそんな危険な代物が落ちてこるとこつかないだよね』

「桃香は封印できないのか？」

恭也は素朴な疑問を桃香にぶつけたが、当の本人は遠い田であわてての方向を見ながら。

「ついかり術式組むのを忘れてたんですけど、少なくとも『近所とかで魔法関係の争い』がないだろ？ からこらねーだろ？ なーって思つてたんですが……」

俯き、自嘲的な笑みを浮かべてうふふふと笑つ桃香を見て、一回は苦笑いをするしかなかつた。

「とつあえず、今夜はもう遅いし、詳しい事情は明日……でいいかな？ ユーノくん」

士郎の言つとおり、時計は遅い時間を指していた。確認をとられたユーノは「はい」と答えた承する。

「じゃあ、みんな、おやすみなさい」

s.i.d.e ???

「でも21個だつけ? ジュエルシード、全部をたつた数ヶ月で集めるのって大変そうじゃない?」

(だが彼女達は実際にやってのけている、更に、幾度もぶつかりながら・・・・だ)

「うひえー···怖いね、女の子って」

(マスターも女だろう)

「だーめーーーいだじょー、同じ女でも怖こいつと思つ」あるのよ

「そだねー・・・・・何がいいか・・・・・・・あ・・・・・・・」

(思いついたのか?)

「ヌルヌル-ヌゼル・・・・・・・」

## 第十二話 ゴー（後書き）

『困難はそれを乗り越えられる人だけにやがてくる』 実際にわたし  
が持つている本にのつていた一文です。  
すごく励ましたので、これに使ってみました^ ^ ;

祝！8万8千ヒューティーあの日、あの時、あの飛鳥（前書き）

数字が中途半端だつて？

いいんだよ！細かいことは！！

追記：この話は、飛鳥が使い魔たちと契約した直後のお話です。  
あと、使い魔のうち一人を喋らせることが出来なかつた・・・・。

rez

祝！8万8千ヒューティーあの日、あの時、あの飛鳥

「さてと、突然だけあたしがしゃべるのが久しぶりなのは気のせいかにや～？」

（マスター、何の話を？）

「ん～？ 気にしちゃダメよ～」

（つとに分からん女だ……）

ど一も、うつかりでモンハンの世界に飛んできちやった一条飛鳥D E A S H  
さて、使い魔達の空腹を満たすために、たつき見つけた村についた。  
・・・・はいいけど。

「な～んか皆さんお疲れ～って感じ？」

「えっと・・・・人間のことは正直よく分からないんですけど、たしかにみんなちょっと元気が無いです」

おどおどした感じであたしに話しかけてきたのは契約した使い魔の一人、リオレイア亞種一（つ一より、桜レイアつていつたら分かる？）の、ヒノコが返事をしてくれた。

「所々壊れているし・・・・俺たちと同じモンスターか何かに襲われた・・・・？」

考察するようにそいつたのは、リオレウス希少種一（まあこいつちも銀レウスつていえばいいか）のホムラ。

ちなみにホムラとヒノコは双子の兄弟、ホムラがお兄さんでヒノコが妹（らしい）。

「・・・・・」

「ん? どうしたよ?」

「・・・・・あつち、人」

あたしの服のすそを黙つて引っ張り、人の存在を教えてくれたのは、ナルガクルガの暁。促された方向を見ると、たしかに人がいた。鉱石と見受けられるでかい岩の隣に猫と一緒におばあちゃんが腰掛けている。

「えと?」んにちは~」

とりあえず、そのおばあちゃんとコンタクトをとつてみると。

「おんや? めずらしいねえ、客人かい?」「まあそんなもんです・・・・・ 単刀直入みたいで悪いんですけど・・・何があつたんすか?なんかみんな元気がないですし」「ヨイヨイ、主等の田にもそつ映るかい・・・・・」

おばあちゃんは一息ついて、

「実はね、盗賊たちに襲われているんだよ」「・・・・・ 現在進行形ってことは、なんか食料とか、金品とか要求されているんですか?」「察しがいいお嬢さんだ、その通りだニヤ」

突然おばあちゃんの隣にいる猫が喋つたのでちょっと驚いた。まあそうだよな、ここはモンハンの世界なんだから、猫が喋つて当然だし。

「二の村ハンターはいないんすか？まさか盗賊に……」

「ニヤツフツフ……それはニヤいぞ、ハンター殿は大都市の遠征に向かつておる、しつておるじやろう、シエングガオレンだニヤ」

「ああ、そういうこと……つまりハンターがいない隙を狙つて、襲われたと」

おばあちゃんと猫が一緒にうなづく。

こつや・・・・・ちょっと大変そうねえ。

「ちなみにわたしの考えは、奴等の最終目的は二のポッケ村のシンボル、大マカライトではニヤいかと思つておるニヤ」

「大マカライトって・・・二のでつかいそれ？」

「そうニヤ」

(自然の產物といつやつか・・・・・立派だな)

なーる、おおかた食料やら金品やらを根にしそぎ持つていって、村のほうの『貢物』が無くなつてから二のでかいマカライトを要求するつて魂胆ね。

つたく・・・・・二れだから外道は・・・・・さて、どうあの世に送つてやるか・・・・・?

「それで、主はいつたい何のよつで二に？」

「ん？ああ、ちよつとこいつらの住居探し？」

「こいつら・・・・？ああその四人か」

「ん~、そうで・・・・・」

おりょ？遠くから村民？が来たにや。てか、かなりあわてて・・・・。

「オババ！大変だ、奴等が来た！！」

「！客、はやく隠れるニヤ！」

え、隠れるつて・・・・。

『理學』

「ハンターどのの家を使うといい！奴等には無人と伝えてあるから、  
気付かないはずニヤ！」

— १ —

四人をせかして、教えられた家に飛び込んだ。

村人達を前に威張り散らしてるのが見えた。

! !

「えと……ある……じ……わが？」

〔 二 〕

( . . . . いわれたな )

ウルウル目＆上目遣いで小刻みに震えながら、あたしに訴えてくるヒノ「。

「ははは、わるいにやー、ちよつと考えいとつてたから……」「そうですか……」

ふとみると、他の子も若干震えながらじつじつを見ている。

「つーむ・・・今後患者に漫るときは『氣』をつけなれやね：

「つかーといひでおめーり、そろそろ眞物がなくなつてきたんじや  
ないの～？」

「だつたら、ほひ、あのでナエマカライト鉱石をいひみにしな  
な！」

・・・・・鳥呼、呼ばばりむかづく。

「な、なめるなー！」つにはまだまだ食料があるぞー。」

「金田のものとられた上に、村の誇りまで盗つてこへつもつか！？」

「ふざけんなー。」

「そーだそーだ！もつと言つてやれー！。」

にしてむこの村の人たくましいなあ、普通なら何もかも諦めそうだ  
けど。

「じやあ明日の午後まで、これの倍の食料と金田のモン用意しな  
「でなきや、あの大マカライト、もつていくからなあ？げひやひや  
ひやひや……」

滅茶苦茶下品な笑いをして、ガラの悪いあんちゃん達は去つていつ  
た。

・・・・・「つーじやあはーつ。

「おねーさんが一肌脱がれますかね」

「ふむう・・・・・異世界に魔法ねえ・・・・・」

「この子ら、本当にあのモンスターなんだね」

「ねえねえ遊ぼーー！」

現在、集会場で村民の皆様と会議中です。

ええ、お察しの通り、魔法のこととかお話しましたが、何か？  
いつとくけど、あたしゃはやてと最善の結果の為ならプライドでも、

名譽でも、なんでも捨てられるよ～w

それを言つたら、暗羅がすごい呆れてたけどwww

ちなみに会議の過程で聞いた話だが、運よく村を出ていた人々には  
鳩を飛ばして、事が落ち着くまで戻つてこないよう伝えたらしい。

もちろんハンターさんにも飛ばしたけど、盗賊たちに田の前で撃ち  
落とされたとか。

何とか奴等を欺いて、ハンターさん宛の手紙を届けた。

・・・・・・はいいけど、そのハンターさんからの返事も例のごとく目の前で撃ち落され、ハンターさんがいつ帰つてくるか分からずじまいになつてしまつたそうだ。

ハンターに頼れないと分かれれば、自分達で歯向かうしかない。

そういうことで、村人総出で戦つたそつだが・・・・数で押されてしまい、老若男女問わない幾人かの人々が囚われたそうだ。

「さて、本題の盗賊討伐じゃが・・・・本当にぬし一人で大丈夫か？」

「そのことなら」心配なく

(むしろ盗賊たちのほうを心配したがいいがな)

今のおたしはへラへラと笑つてゐるんだろうな。

困つたのと、本気で心配しているのとが混ざつた顔であたしを見てくる村民の皆さん。

その顔が喜びに変わるのが、今から楽しみだわwww

さて、時間は飛んで約束の日の午後。

村の入口で待っているんだけど・・・・遅いなあ？

自分で呼びつけといいていい度胸だ。

社長出勤ってやつ？・・・・まあ、その社長ぶつも今田で終わらせてやるけど。

「ああん？なんだあ？食料や金品がないどこりかガキ一人かよ」

「あいつら、まだ抵抗できると思つてんのかあ？だとしたら人選ミスだなあ！－」

昨日とまつたく変わらない下品な声で笑うガラの悪いあんちゃん達。とりあえず、

「おっさん等」も、まだ威張り散らせると思つてんの？」

「当たり前だろ、弱者は強者に服従するのが当たり前だからな！」

嗚呼、こつやもう『口』通り越してカスだな。

つか今日だけで何回『嗚呼』を使つた？

・・・・・まあそれだけこつらに呆れたつてことかな？

「器の小さい奴等・・・・」

「ああ？いまなんつったガキ！」

「おう？聞こえてたの？わあーすっげーいたぶるしか能が無いあんたらでも耳はいいんだね！－」

わざと無邪氣にあんちゃん一人を貶す。

あんちやん一人はぶち切れ寸前らしい、一方なんて、必死にこめかみを押さえている。

「つぐ…………ガキ、結局お前は何がしたい？話合いなら受けないからな」

「馬鹿だなあ、お話するわけないじゃん！」

にかにか笑いながら、あんちやん等を更に挑発する。よし、そろそろ…………制裁を下すか。

「『和平の使者なら槍は持たない』」

「どういう意味だ？」と相手が言い切る前に、二人とも片腕ずつ斬り落とした。

「や、小話のオチなんだけどさ～～～」

再び一閃、今度は片足をそれぞれ斬り落とす。

「かなーつしつくづくるだじょ？」

刀を、一方のあんちやんの喉に向けた。

「これは質問じゃない、拷問だ、貴様等に拒否権も無ければ人権も無いと思え」

あんちゅやん等に拷問ゲーフン……失礼、O H A N A S I して得た情報を元に、盗賊達のアジトに行くけど……。

うん、デザイン的にもいかにもって感じで典型的すぎて、どうかアホくさい。

つといかんいかん……気を取り直して……。

「トレスオノ具象開始、ソードパラダイス剣の祭典」

どこのFATEと呪文が一緒だつて？

いいじゃない！！ぶっちゃけよく知らないけど、傭兵とか剣士とか、かつこいいじゃない！！

あたしの周りに、具象化した剣たちを回転させて、先へ進む。

「な、なんだてごめんやああああああ

「お前何なつあああああああ

「死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくな

い

「俺は最強だがああああああああああああ

面白いくらいに刃に倒れていく盗賊たち。

一部ふざけた事抜かしてる奴がいたけど、瞬殺。

・・・・・ぐふふwww

「ぞまーみーろ！」

・・・・・・・あ？お前歪んでいるよつて？

歪み上等！－歪まなきや護れないものだつてあるんだ－！

「円閃牙あ－」

「ぞやぐつ

「瞬迅剣－」

「ぐつはあ－」

「死ねやあ－！」

「そつちがね！襲爪雷斬－！」

「がはあ－」

何時間奴等と戦っていたんだろうか。

なんか、どさくさにまぎれて盗賊の頭も殺つちゃったみたいで。

何人かが命乞いをしながら逃げていった。

・・・・・・・・・あ。

「人質の監禁場所、聞いてねーや

あのあと、何とか人質を解放して、ポツケ村に戻った時だった。  
村のほうが何やら騒がしかつたんだ。

何かなつと思って見てみると、人ごみが出来ている。  
その中にいる人物をみた人質の皆さんが、顔を明るくした。

「シグナムーー！」

・・・・・・・・・はい？

今なんつったこの人ら？

・・・・・・・・・『シグナム』ウーー？

「あーみんなーー無事だつたんだねーー？よかつたあーーー！」

そういうて人ごみの中心から飛び出してきたのは、見た目20代前半の女人。

人質達に飛びついて、駆けつけるのが遅れてしまつたことの謝罪や、無事でよかつたという喜びを思いつきり表現している。

つか、この人の容姿、まさに『リリカルなのは』のシグナムなんだ  
けど；

違うのはタレ目な所と、性格が厳しくなくて、なんというか・・・・・・  
・ ほわわんとした雰囲気をかもし出している所。

人々の反応を見る限り、どうもこの人がこの机のノック音をしたのだ。

この人見た目的はハンターらしくないが

モンハンの主人公でみんなたくまし過ぎる体格してるので、このシグナムさんの場合、そんなこと無くて。

もしアーノルドとしてカストランがいて思ふくらいいふ。そりでる

「あの、あなたがこの人たちを・・・？」

するヒシグナムさんは顔を思いつきり明るくして、

「ありがとう…お陰でみんな助かったよ…。」

あわわわわわわわ・！・！

「あ、『ごめんね？嬉しくてつい……』」

ショーグンのハンターさんと、それを見て笑う村民の皆さん。  
…………いつこのうのを『絆』つていののかねえ？

見てるこつちも暖かくなるよ。

ちなみに元の日日夜はドンチャン騒ぎで、さうやつても帰れそうに  
ありませんでした。

「それじゃあ、この子等お願ひしますね  
「うん！任せー！」

結局一泊しちゃいました。

帰つたら、せめてに事情説明しなきゃだなあ……。

・・・・・ん？上の会話で誰に何をお願いしたんだって？

決まってるじゃん、シグナムさんに使い魔達のお世話を頼んだんだ  
よ。

月一で使い魔達の様子を見に来るなどを条件に、承諾してもらいました。

使い魔四人もそれで納得してくれて、今じゃすっかりシグナムさん  
とこの料理ネコと仲良し。

・・・・・・・ネコと戯れるちっちゃい子・・・・うん、  
萌え。

よし、

「じゃあわたしひそろそろ……」

「あ、そうだね、妹さんが待つてあるんだっけ？」

はい 一派いかで かし しいが派心配してると思ひゆうて

一札して、お詫び申す。

しばらく行って、振り返ると、村の人たちが手を振ってくれていたので、振り返した。

それから、転移してきたボイン。

西に酸味を感じさせながら、「魚からあふれ出す

今更かよ・・・・・・・人殺しに対する拒絶反感

胃の中から、ほこなるまで、吐き続けた。

今思えば、  
使い魔達を助けた瞬間から  
あたしは『業』を背負った  
んだ。

・・・・・上等の新を亡くし無事にを無くす奴と

•  
!  
!  
!

(マ・・・・・マスター・・・・・?)

暗羅があたしに戸惑つていようが、かまうもんか・・・・。

「！」

妹に拒絶されようつと・・・・・」の血一つ・・・・・。

護るためだけに生きてやる……。

祝！8万8千ヒューティーあの口、あの時、あの飛鳥（後書き）

・・・・書きあがつたのはいいですけど。

歪んでるなあ

あるえー？途中まではまともだつたはずなのにこやー（（  
まあこんなですが、今まで『』愛読してくださった皆さんに感謝です！  
これからも『』とある姉の原作破壊（仮）をよろしくお願ひします。  
それでは^ ^ノシ

## 第十四話遠回つな遭遇（前書き）

いつもよつグダグダになってしまつた気が・・・。  
やれしければざひつい。

## 第十四話遠回りな遭遇

s.i.d.e 桃香

「お、おはよー・・・」

翌朝、なのはちゃんの部屋から出てきたユーノくんが、道場に入ってきた。

わたしは素振りを中断させて、返事をする。

昨日私含めた高町家のみんなから「敬語は不要!」と言われたので、何とか私語（俗にいうタメ口）で話そつとしているみたいだけど・・・

しかたないのかな？敬語はいらないって言われても、知り合ったのはつい前日だからね。

「おはようゴーーくん、なのはちゃんは？」

「まだ寝てる」

「そっか」と返して、素振りを再会させる。

「見てていい？」

「いいよ」

今日は体の回転を重視して、槍を振る。

切つ先を下げては急に上へ突き上げ、柄尻で後ろをついては素早く切つ先を突き出す。

「・・・慣れてるんだね？」

「うん、前々からちよこちよこせつてるから」

ユーノくんと会話を交わしてから、一回手を止める。

ここからが早朝訓練の山場！

目を閉じて、ただひたすら集中……。

ちなみにどれくらい集中しているかつて言ひつと、

「・・・・・桃香？」

「・・・・・」

周りの音が聞こえなくなるくらい。

前にそれで遅刻しかけたことがあつたんだよねえ……。

あの時は大変だった。

「・・・・・桃・・・・」

「集中している今は話しかけても反応しないぞ？」

「あ、恭也さん・・・・・」

別にわたしの能力に（全然じゃないけど）集中が必要なわけじゃない。

ただ、これから戦う機会が増えるといつのなら、少なからず集中とそれにより生み出される『無心』が必要になつてくる。  
だから、少しでもその集中に慣れさせるために、毎朝いつもやって訓練しているんだ。

「・・・・・いいですか？」

「・・・・なんだ？」

「桃香から出てくれるフレッシュヤーが、さつきより半端無くなつているんですが」

「大丈夫、いつもいつもだ」

よし、ここでいいかな？

思いつきり息を吸い込んで、吐き出す。  
集中を切る時は、いつも「いややめ……」って。

「恭也さんいつからそこまで？」

「お前が集中してる時」

集中を終わらせたあとで本当に周りが見えないから、こんな風に  
集中前にいなかつた人が突然あわられるとかなり驚いたやうなんだよ  
ね；

前からよくあることだからそろそろ慣れてほしこよわたし……。

「ところで桃香」

「はい？」

「ユーノがお前のフレッシュヤード死にそうなんだが」「え？あ！？ちよっと…？ユーノくーん！…！」

side なのは

「そんなことが・・・」

「うん、ゴーノくんに悪いことしきやつた」

登校中に、今朝ゴーノくんが倒れていた理由を聞いてみて、自虐的に笑いながらあさつての方向を見る桃香ちゃん。

実はわたしも一度、桃香ちゃんが集中してる時に話しかけたことがあつたなんだけど・・・。

「・・・・・」

お、思い出しちゃつた・・・。

「あ、そろそろバス停だよーー。」

「ほんとだ、行こう?」

「うーうんー。」

桃香ちゃんと一緒に走って、バスに乗り込む。

そのままアリサちゃんと合流して、学校へ向かいました。

「『えっと、二人ともちょっとといいかな?』」

授業を受けていたら、突然ユーノくんから念話が来た。びっくりして声を出しかけたけど、何とか飲み込む。

「『わたしは大丈夫だけど・・・桃香ちゃんは?』」

「『平気、それで? 何か用でも?』」

桃香ちゃんにもちゃんと確認してから、ユーノくんが話し出すのを待つ。

「『うん、昨日の・・・ジュエルシードのことで、こっちの世界にきてしまった経緯を一人に話そうかなって・・・』」

「『そういえば、昨日バタバタして結局聞いてないもんね』」

「『そうだつたねえ・・・』」

思わず苦笑いしてしまうわたし。

それは桃香ちゃんも同じみたいで……。

顔が見えなくても、苦笑いしているのが手に取るよつに分かるの。

「《とりあえず、説明に入るよ》」

「《うん》」

「《分かりました》」

ユーノくんは一呼吸おいてから。

「《始まりは、ぼくがとある遺跡でジュエルシードを発掘したことからなんだ、ぼくの一族……スクライアは遺跡発掘を生業にしているからね……それで、護送艦を手配して、ジュエルシードを運んでもらってたんだけど、その船が渡航中に何らかの事故にあって撃沈、21あつたジュエルシードが全部ちらばってしまったんだ》」

「《その先はだいたいわかった、その21個全てがこの世界に来てしまった、責任を感じたユーノくんも独自にジュエルシードを回収するためにここに来た……と》」

「《……うん》」

あれ？でもその話だと……。

「《ユーノくんは発掘しただけで、責任はないと思つんだけど……？》」

「《でもつ、あれは願いを歪んだ形で叶えてしまつし、それ自体に魔力を秘めているから、エネルギーを流し込まれたらどうなるか……それになのはが言つたよつこ、発掘したのはぼくだ、ぼくがやらなきや……》」

「コーノくんの必死な感じが伝わってきて、思わずすすと笑つてしまつ。

あ、もちろん馬鹿にしてるとか、そんなんじゃないからねー？  
ただ、素直にまじめなんだなっと思つたからなんだよー？

「『まじめなんだね、コーノくん』」

「『ほんとに、だけど何でも一人でやろうとした悪いひめダメだよ？』」

そのことを伝えると、桃香ひめんも賛成してくれた。  
ついでに一人でやろうとしたコーノくんを躊躇める。

「『だけど・・・・・』」

「『じゃあまた一人でジューエルシードと戦つて、なのはちちゃんに捨てられたときみたいに倒れる？』」「

「『つ、それは・・・・』」

「だまり」などしゃつたコーノくん。  
でも・・・・

「『桃香ちゃん、いくらなんでもその言い方は・・・』」

「『・・・・・そうだね、『めん』』」

「『しうがないよ、ぼくの自業自得なんだから』」

むむっ、急に暗くなつちゃつたの・・・・・。

「『まあ、具体的な対策は帰つてからにしょー今は授業に集中ー』」「

「『そ、そうだね』」

「『わかつたよ、授業中に『めんね、話聞いてくれてありがと』』」「

「『こつこつモーお話してくれてありがと』」「

「『それじゃあ』」

やつやつて念話は切れました。

帰り道、桃香ひやんと歩いていたら、ジュエルシードの反応がでた！  
すぐコーコーくんと連絡を取り合って現場に向かったの。

「あやあああああああああああつーーー。」

！？

神社についたんだけど、長い階段の頂上から悲鳴が！

「桃香ちゃん！」

「わかつてる！」

途中で合流したユーノくんと、必死に階段を駆け上がる。頂上にいたのは、悲鳴を上げてたと思う、気絶した女の人と、

「…………グルル…………ガフウ…………」

犬…………だと思つんだけど、普通の犬より大きくて、黒くて、とても怖い…………。

「なのはちゃん！」

「あ、うん！」

桃香ちゃんは早速槍を出して大きい犬と戦い始めました。よし、わたしも…………。

「なのは！レイジングハートの起動を！」

「…………え？起動？」

「うん！『我、使命を』から始まる起動パスワード！」

・・・・・・・・・・・・・・?

「えええええええ！？あんな長いの覚えてないよお！…」

「ええ！？じゃあ、またぼくが言うから繰り返して……

「いけない！一人とも逃げて！…」

見ると、あの犬がわたしたちの方に来て・・・・・・。

つて、ええー？

「つえい！」

何とか飛び退いて避けたけど、倒れちゃって次の行動が取れない。桃香ちゃんも離れているし、バリアも間に合わない・・・！その時、ヒュッと何かが犬に直撃しました。

よく見ると剣みたいな矢が、犬の肩に刺さっています。

「・・・・・壊れた幻想」  
ブローケン・ファンタズム

いきなり、矢が爆発しました！

何がなんだか分からぬけど今之内に起動を・・・！

『Standby ready, setup』

突然レイジングハートが光って、わたしの体にバリアジャケットが、手には杖が出てきた。

起動したんだろうけど・・・パスワードは要らなかつたのかな？

「すごい、起動パスなしで・・・」

ユーノくんが驚いているみたいだけど、今は気にしちゃだめ！早く封印しなきや！

「リリカルマジカル！」

「汝は我が仇、怨霊の体にて束縛せん！『バインドゴースト』！」

桃香ちゃんが犬をバインドで固定してくれました。  
よし！

「封印すべきは恥まわしき器！ジュエルシード、封印！！」

昨日と同じ光の帯が犬を包んで、ジュエルシードを取り出します。それをレイジングハートの中に入れると、犬は元に戻りました。それにしても、こんなちっちゃい犬がジュエルシードに触れただけであんなになるなんて……。

早く全部集めなきや！

・・・・・ それでも。

「さっきの爆発した矢って、桃香ちゃん？」

「違うよ、多分誰かが手伝ってくれたんだと思うけど……」

一緒に周りを見渡すけど、そんな人は誰もいなかった。  
何だったんだろうなあ ・・・？

(うん、もう一人……だね)

藍桜に答えてから、空を見る。

目に魔力を込めてもだいたいの特徴しかつかめないくらいの長距離に、その人はいた。

かなり背が高いから、多分中学生……？

手には矢を放つたと思われる弓が握られている。

「桃香ちゃん？」

「どうしたの？」

「ん？ ああ、『めん、帰ろつか？』

「うん…」

なのはちゃんと助けてくれたから、一応協力してくれるのかな？

二人に気付かれないように、その人にお辞儀した。

・・・・見えてるといいけど：

s.i.d.e ???

どーも、お辞儀がちゃんと見えてたあたしですっ (キラコン)  
にしても・・・・。

「へえ、こんな離れてるのに見えてるんだ……おどりの桃の木山椒の木つてね」

(口ではそういうているが、内心なんとも思っていないだろ(?)

「さすが暗羅！せいかーい！」

記憶図書館を持つているんなら、鷹の田を持つてもおかしくないしね~。

にしても、

「奴さん、面白いモノ持つてるね~」

(一々振り上げて振り下ろす剣と違つて槍は突き出すだけだからな、おおかた、武術に自身がなかつたから選んだんだろ(?)

「まあ、戦国時代の農民も、刀じやなくて槍を使ってたらしいからね~」

時代劇でよくある『雑魚同士のチャンバラ』ってのは、間違いで実際は『雑魚同士の突き合い』なんだよね。

まあ、あたしは剣道場で『見てた』からだいたいの剣術は身につけてるんだけど。

「さてと、じゃあそろそろ帰らうかね

(だな、そうだマスター、今日はスーパーの特売だぞ？)

「まじで！？やつべ余計はやく帰ないと……」

## 第十四話遠回つな遭遇（後書き）

ところ訳で、『あこいつ』と桃香を遠まわし（～）に遭遇させてみましたが、いつもより漫談ありがとひげやれこまく。次回もお楽しみに。

## 第十五話 本格的な遭遇、あと田木（前書き）

さて、今回ばかりはと早口ですが『あいつ』と桃香の遭遇です。  
どうぞ！

## 第十五話 本格的な遭遇、あと田木

s i d e ? ? ?

やほ、あたしだよッ

今日は妹はやでの病院もないから図書館でのんびりしてゐるぜwww  
はー、それにして最高だわ図書館。

神話とかの文献もあるから、あたしの武器とか戦術のバリエーションがかなり増えるしwww

「にしても・・・平和だにやー」

(ジューエルシードが出てもあいつらがすぐに封印しているしな)

「そうだねえ・・・それにしても、この間あたしにお辞儀してきました奴さんって・・・」

(ああ、記憶図書館の適合者ライブリーだな)

「やつぱし? ああ、でもなのはちゃんとこじこじたから味方つて見ていいのかもね?」

(いまはそう考えるのが妥当トドカだろ?)

「あ、あのー」

ん?

「おじょいりやんだれよ?」

「あ、ごめんなさい、わたし月村すずかつていいます」

「おーらい、すずかちゃんね、すずちゃんつて呼んでヨロシ?」

「はいー!」

まあ知つてゐるけどwww

ここはあえて知らぬ存ぜぬを決め込みまそwww

「えと、よくここにいらっしゃりますよね？確か……妹さんといつしょに…」

「うん、おじゆよ～。今日は残念ながら妹はいないけど」

「せつ・・・・・みたいですね」

「すずちゃんはいくつよ～。見たところ十六歳の年っぽいけど？」

「9歳です！」

「ああ、やっぱ同じ年かあ～。はやくどう？」

それからすずちゃんと話しこんでたら、もう帰る時間になつてた。  
うーん、思つたより武器とか能力とかはとれなかつたけどいいかに  
や？

「あ、せつだ！明日、友達のお父さんが監督をやつているサッカー  
チームの試合があるんですけど、よかつたらどうですか？」

・・・・・お父さんがサッカー（の監督）やつてるこの子の友達  
つづいたら・・・・・。

おおー！巨木騒動すか！

上手くいけばあの子ともエンカウントできるね。

「うん、いいんじゃないの？都合がよかつたら、妹も呼んでくれるよ」

「ありがとうございます！それじゃあまた明日・・・・・」

「あ、待つた待つた！まだ自己紹介してなかつたね？」

畠田あの子等とHンカウントするから・・・・・偽名使ひぢゃね。

「おねーさんの名前はコーリ・ローウェル、よろしく～。」

s-i-e 桃香

今日せ十郎さんガ監督をしてるサッカーチームの試合。  
ちゅうじここので、いじ最近田課になつていたジユノルシード探し  
もお休み。

特になのせやんは思いつきつ羽を伸ばしてもうわなあやね！

「ういや……ねまつへ、桃香ひやこ」

「おなまつねまつへ、朝じはんじでかいつかいつかいつと食べ  
べぬじひきせ」

「うん……」

寝ぼけ眼でおひてきたなのはやんこ、朝じはんこを出す。

ちなみに十郎さんはチームの最終調整と試合相手への挨拶で、桃子  
さんや恭也さんはその打ち上げで翠屋が午前中貸切になるため、そ  
の準備に行って、もう家にほいない。

(しかし、十郎氏のチームはそれなりに強このでしょ。)

(うん、ここの辺じゃ結構有名みたい)

藍桜と会話を交わして、手早く食器を洗つ。  
なのはちゃんも食べ終わつたみたいだ。  
寝ぼけ眼もいくらか起きていて、食器を流し台に置いた後、「着替  
えてくるね」と告げて、ぱたぱたと上に上がりつていった。  
ほどなくして、今度はコーンくんがおりてくる。

「おはようコーンくん、なのはちゃんは？」  
「まだ着替えてる……」

若干顔が赤いような……ああ、なるほど。

「人間だつて言つてないから、本人が気にせず着替えだと」  
「せ、正解、つていうか、ふたりに見せてなかつたつけ？人間の姿・  
・」  
「全然」  
「え、でもじやあどうやって……」

コーンくんが言い切る前に続ける。

「分かる人には分かるの、ただこの世界にはそう言つ人は少なくて、  
わたしがたまたまそんな人間の一人だつてだけ」  
「…………うーん…………」

コーンくんは頭を抱え込んでる。  
…………ちょっと難しかったかな？  
「な、なんとなく分かつた……気がする」  
「例えが難しかったね、ごめん」

二人で苦笑いをしていると、着替えを済ませたなのはちゃんがおりてきた。

ちょうどお皿洗いも終わつたし、

「わたしも準備するから、一人は先に玄関にいってて」

「うん！」

「わかつたよ」

アリサちゃんたちと待ち合わせている、河川敷に来た。  
もうアリサちゃんとすずかちゃんは来ているみたいで、こっちを気付いてから大きく手を振っている。

「待たせてごめんね、アリサちゃん、すずかちゃん」

真っ先になのはちゃんが一人のところに駆け寄る。  
わたしはすこし遅れてから、なのはちゃんたちの輪に入つた。  
ちなみにユーノくんはわたしの肩に乗ついている。

「大丈夫よ」

「わたし達も、今来たんだ」

「そうなんだ」

するとすずかちゃんは思い出したように手を叩いて。

「そうそう！ 今日あと一人来るんだ」

「あと一人？ 誰よ？」

「昨日図書館で話した人と、その妹さん！」

・・・・何でだろう、今一瞬何かを感じた・・・・。

「昨日会つたばかりなの？ 大丈夫？」

「うん、前からその人たちを見かけていて、昨日やつとお話をきた  
のー！」

「そつかあ、楽しみだね！」

すると、少し離れたところから誰かが来るのが見えた。

一人は車椅子に座っている、なのはちゃんと同じ年くらいの女の子。  
もう一人は・・・・・つ！？

(「の間の・・・・！？」)

あの時はほんやりとしか見えなかつたけど、あのダークグレーのシートヘアは間違いない。  
でもなんであの人がここに！？

「すーずちゃん…来たお～」  
「あ、コーリさん…こっちです！」

何も知らないすずかちやんは、無邪気に手を振つて、その人を『コーリ』と呼ぶ。

コーリちゃんはにかつと笑つて、

「どうも～あたしはコーリ・ローウェル、年は12歳」  
「コーリの妹の八神はやていーめす」  
「アリサ・バニングスよ、よろしく」  
「こんにちは！コーリさん！」

アリサちやんやすずかちやんと握手をかわすコーリさん。

「ひらがなではやて、変な名前やう？」  
「そんなことないよ～」  
「ええ、十分可愛いわ～」  
「ほんま…？ありがとう～」

きやつきやとはしゃぐなのはちやん達。

それを少し離れたところから見ていたわたしとコーリさん。  
なんとなく・・・『気まずい』です。

「モーいや、そちらさんも初めてましてだね？コーリ・ローウェルだ  
よ～んヨ」  
「あ、どうも・・・亜櫻桃香です」

わたしもヨーリさんと握手を交わした。

その時、

「この間は大変だつたね?」

『……！？……その説はどうも、助けてくれてあ

「かとい」

卷之三

「ちょうど手を離した時に、試合が始まった。それでもわたし達の念話は続く。

「《とにかくあなたは・・・・》

「《せだよ、あんたと同じ適合者、管理者は暗羅つつの、よひにし  
オーナー

「『わたしの管理者は藍桜つじです』とあります、これがどうもおかしいのです」

翠屋のFJのフォードが、ショートを決めた。

なのはひやん達はめやーめやー騒いで喜んでい。

い！ ニーリさんも「はは？」としゃべだけた。だけど、感心にしてたみたい。

『……えと、助けてくれたって事は味方って見ていいです

卷之三

「『お好きにどうぞ、でもあたしは近所から『爆弾』が消えれば何でもいいから、もしあんたらに敵対する奴等が現れたらそっちにも味方するんで』」

『・・・・・母立の立場』で「」とですか』

『ウルフの世界』

なのめあやさんが、はやてあやんと語ること。  
ねらいく今のゴールについてだらべ。

「『やあ、あたしらもあらわの試合観戦するへ。』」

「『そりですね、今はじゅうが有利ですけど・・・どうなれ』」

やい』」

「『だね~』」

s.i.d.e なのは

今日はすずかあやさんが仲良くなつた、コーセさんと、その妹さんの  
はやてあやんに出来ました！

コーリーさんは氣をよく明るい人で、はやてあやんは関西弁をしゃべ  
るちょっとおつとつした子。

一人ともとてもいい人なの！

「アハ、いえばはやてあやん、学校はどうにこつてるの？」

ちなみに今はみんなで翠屋にきています。

試合結果は翠屋FCの勝ち！

だからみんな翠屋で打ち上げをしてくるの！

「あせせ、つち学校こいつといひとんのよ、せひ、疋がこんなやかひ  
「あ・・・・・」

もじかじて、まことにと聞こひやつた・?」

「「」、「めん・・・・」

「?何謝つとるん?」

「え、でも・・・・」

「ゆうとくねど、寂しくなによ?」

「やうなの?」

「「」、おねーちやんがいのから寂しくない」

そうやつて、笑はねやつちやん。

何と言つつか・・・・・。

「強こんだね」

「おねーちやんよりは弱いけどな~」

その時、今話題にしてたコーセさんと桃香ちやんと一緒に、飲み物  
が乗つたトレーをもつて來た。

「はーいお待たせ~」

「ありがとう!」<sup>アリトウ</sup>「ます~!」

「すみません、わざわざ持つてきてしまつて・・・・・」

「桃香もありがと」

「全然だこじょづこよ~」

「そつそつ、わたし達年長者なんだから」

「それにしても」とアリサちやんが続けます。

「おっしゃいですよね、ユーリさん」

「でしょ？わたしも最初は中学生だと思つてたの」

「すずちゃん？それって遠回りに老け顔だつていってない？」

「そ、そんな！」

「じょーだんよじょーだん　まあ気が付いたらこの身長だから、どうにも出来んわ～」

・・・・・口ひごこちるのは弱音のさばなのに、口調と顔は笑つているユーリさん・・・・・不思議な人だなあ。

・・・・・?

「へ・ビうしたのなのはちゃん？」

「え？あ、うん何でもない！」

今一瞬ジユノルシードの反応を感じたけど・・・・・気のせいだよね？

「《あ、せや！おねーちゃん》」

「《ん～？何よほやて》」

「《何で偽の名前使つとん？おねーちゃんは『一條飛鳥』やひ～・

》」

「《ああ、それ？簡単だよ～ほら、あんたの部屋にあるあの本、あれを狙われるわけにも行かないから》」

「《ああ～・・・・何となく分かつた、つまりおねーちゃんは『あ

の子』のためにわざと嘘ついたんやな？》」

「《そゆこと～～～あとほづつかり住所とかを言つちやわなければ

カンペキSA》」

s i d e 飛鳥

さて、あの後なのはちやんたちと別れて、いつに帰つたといひ。  
今ははやてと一緒にのんびりしている。

「おねーちゃん、お茶いれるな」  
「んー、わかつた」

やつがつて、はやてが台所に向かつた時だ。

ズッ・・・・・・ドオオオン・・・・・・

轟音が轟いて、地震みたいに家がゆれる。

危うく車椅子から落ちかけたはやてを抱きとめて、窓に駆け寄ると、

遠くのほう、ビル街の中心辺りに、でかい木が聳え立っていた。

「どうしたがるかねー……」

「何が？」

はやてが隣で口を押さえている。

幸い根っこはまだ口にまで来てないけど、時間の問題でしょうね。

「ほやで、そういうわけだからちよいといつてくるな  
・・・・・うん、気をつけたてな？」

返事しながら、腕を引き寄せて振り払うつ！

「武装っ！」

二階に上がり、

「あーい・・・・・」

自分に認識阻害をかけて、

「ハラフーん・・・・・・」

窓から飛び出した。

「ふりあああ

いッ！」

## 第十五話 本格的な遭遇、あと田木（後書き）

「うちのはやてせんはもう念話を使えます  
もちろん飛鳥が教えました（今までやつこいつ描写しましていませんで  
したが。

さて、次回は／＼田木！  
お楽しみに！」

第十六話彼女はひとつひとつ（前書き）

大変お待たせしました、十六話です。

今回ちょっと重いかも・・・？

追記・9月30日一部修正

## 第十六話彼女といつての・・・

s.i.d.e なのは

わたしは今、桃香ちゃんビルの屋上に立っている。  
目の前には、木の根っこに埋もれている街。

・・・わたしの所為だ。

わたしがあの時もつと注意してたら、氣のせいだつて思わなかつたら、こんなことにならなかつたんだ。

「なのはちやん」

「あ・・・・・・桃香ちゃん?」

「後悔はあと回し、今はあれを何とかしよう!」

・・・・・・うん。

「せうだね、急いでー!」

桃香ちゃんの言つとおりだ。

今はあの木を何とかしないと!

「ユーノくんー!この場合どうすればいいの?」

「えと、多分人の願いが原因になつていてと思つから、核になつて  
いる部分を探し出せばいいと思つんだけど・・・」

「なるほど、ジュノルシーードは願いを叶える宝石だからね  
「だけビ・・・・・・」

こんな広い中からビリヤード・・・・。

あ、そうだ!

side 飛ナリ鳥

あちやー思つた以上だね、街中の被害。

「ハツヤーロースに取り上げられるwww?  
(呑氣なことを言つてる場合か?早くあこひりと合流しなければ...)」  
「わーつてるよw」

えーて、あの子等はつと。  
お、はつけーん!

「やーつほー!」  
「あ、ユーリさん」  
「へへー、なーんか大変なことになつてんじゃー?」  
「すみません、わたしがもつと早く戻づいていたら・・・」  
「あん、いいつていいつてw・・・・でだ、なのはちゃんはなに  
してるのかな~?」

なんかレイジングハート構えたままぴくりとも動かないし・・・。  
試しに、顔の目の前で手をひらひらさせてみる。

「…………何の反応もない」

「はこ、今探ししますから」

「うへへ…ひひやつ…………、ああ、なんとなくわかったよ

サーチャー飛ばして、探索しているね。

で、その制御のためにあそこまで集中してくると。  
やねりともなれやうなのぐ、その場で待機しておぐ。

「……………見つけた……」

「ねねうー?」

「ふえー…いやあつー…ゴーコロ…」

びっびっびっびっくつしたああ……  
急に顔を上げないでよなのはちやん…心臓に轟ごじやな~い……

「ふいー…………で?何見つけたのよ?」

「あ、はこ…騒ぎの元になつてこる、ジユーハルシードすー…」

「おお…やつたじやん…」

「ヒー!あつたの?」

あらとなのはちやんは、迷に無く一時の方向を指差して、

「あつちー。」

「なるほど?」

「でも距離が…………んお?」

何か、向ひの方から茶色っぽこいつねじた何かがつて。

「ヒー見ても根ひー?」

「だにや～ww」

「笑ってる場合じゃないでしょ！」と突っ込む桃香ちゃん。でも状況はきちんと分かってるみたいね。槍で足元を叩いて、魔方陣を展開、詠唱を始めた。

「其は燃え盛る炎、灼熱の君、業火は仇を焼くために、来よ！『イフリート』！」

すると桃香ちゃんの背後に・・・何と言うかめちゃめちゃマッシュになつた全体的に蝙蝠っぽいのが現れた。  
多分あらがイフリートなんだろーね。  
さて、あたしも・・・。

「トレース・オン  
具象、開始」

弓を出現させて、矢をつがえて引き絞る。

「ファイヤーボール！！」  
フルンティング・ボルケーノ

「赤原獵犬、炎属性付与」

火球と火矢がちょうどピンポイントに当たつて炎上。  
連鎖して着弾地点周辺の周囲も萌えて・・・ゲフン失礼『燃えて』  
いく。

でもまだ生き残つてゐるのがあるわね。

「あ、あの・・・一人とも大丈夫ですか？」

「ん～？べつに～？」

「大丈夫、障害物はわたし達に任せて、なのはちゃんは封印の方法を考えて」

あーもー、空氣読まない根っこだなあ！

また来たよ；

!

「そりだよー! といつわけでイフリート!」

承知した  
主！

イフリートが桃香ちゃんの槍に入つていく。

刀を思わせるものに変更される。

なのはせんも勝を決めたみたいね。レイシングバーに命じて標準のデバイスモードから、音叉型のシュー・ティングモードに変形

しつかし、

急接近してきた根っこをとつさに取り出した刀で斬る。直後に今までのようぶつとい根っこが一本接近してきた。むー、弓とか刀とかじや、ちと骨があれるサイズね。

まあどうせいいからこの場合の技もちゃんと身につけておこう。

「紅蓮」

「炎霸」

「どうやらお隣も同じ考えだつたみたいね。

あたしは足に、あつちは槍に炎をまとわせて、

「蹴撃ツ！！」

「瞬迅槍おツ！…！」

叩き付けと鋭い突きが、根っこを灰燼に変化させた。

直後、

「レイジングハート！行つて捕まえてきて！」

『A11 リモート』

あたしらの脇を、桜色の砲撃が通り過ぎていいく。  
それはまっすぐジュエルシードへと伸びていって、遠くの方で閃光

を放つた。

ほどなくして、桜色に包まれたジュエルシードがなのはちゃんの手元に来た。

や、間近で見ると…・・・・・膨大な魔力と邪悪っぽいオーラをひしひしと感じるね。

こんなで世界をいくつも滅ぼせるつてんのも頷けるにゃ。

「うし、万事解決だね」

「そうだね、なのはちゃんお疲れ様」

「そんな！一人もすごかつたよ！」

「ほくから見れば、みんなす」こと

ん？ああ、そういえばいたね、ユーノくん。

（でもなんで今まで話さなかつたの？）

答え：作者の実力不足が原因なの。  
「ゲフンゲフン・・・・・・・・・・・・

「おねーさんやるやう帰つていいにゅ？」

「あ、はい！ユーノくん、今日はありがとうございました」

「うんや～別にいいお～っ、それじゃ、三人も帰り道気をつけで～」

お辞儀するなのがやんて手を振つてから、あたしはその場をあとにした。

その夜、やはりあの巨木がニコースに取り上げられていた。テレビの中のスタジオでは、専門家や解説者たちが熱い議論を繰り広げている。

(わたしの・・・・・せいだ)

ニコースを虚ろな目で見ながら、なのははそつ思考する。すると、隣に誰かが座った。

視線を横にずらすと、兄の恭也がいた。

「・・・・・これも、魔法とやらが原因か?」  
「・・・・・うん」

拒絶されるのは怖かつたが、それ以上に嘘をつくのが嫌だった。だからなのはは静かに肯定する。

「・・・・・お父さんのサッカーチームの子が持つてたの・・・・・それなのにわたし、気のせいだつて思い込んでじやつて・・・・・もし氣づいてたら、こんなことにならなかつたよね」  
「・・・・そうかもしけんが、なのははちゃんと解決しただろう?桃香も、お前を責めるどころか逆に褒めていた、『探索魔法だけでなく、砲撃魔法も覚えた』って、まるで子供みたいにはしゃいでたぞ

?」

恭也の慰めに、少し氣が楽になるなのは。  
だが、

『なお、この騒動で負傷者は　人、死亡者は・・・・・』

「・・・・・え?」

なのはは思わず立ち上がつてしまつ。

死亡者

一番見たくない三文字が、画面の下の方にはつゝきつと表示してあつた。

はつきりと目を開き、顔に絶望を浮かべるなのはの肩を、恭也はしつかりつかんで、鎮めようとする。

いつのまにか、体が大きく震えていた。

恭也は、なのはの田を覆い隠しテレビを消したが、時すでに遅し。すっかり自責の念に駆られたなのはは、呪語のよひに『「」あんなやい』を繰り返している。

「なのは！しつかりしろー！」

騒ぎに気づいた土郎、桃子、美由紀、ユーノ、桃香が、リビングに集まる。

「まさか・・・・・なのはちゃん?大丈夫?なのはちゃん?」

事態を理解した桃香は、なのはに駆け寄り、恭也に代わって肩をゆする。

が  
なのには涙をほんほんとこぼすだけ  
拭おうともしない

「え、わあつ！？」

突然だつた。

なのはは思いつきり桃香を突き飛はし、走り去る。  
その方向は 玄関だ。

「つまつてーなのはちやん..」「なのはー..」

桃香含む高町家総出で、なのはの後を追つ。だが一行が玄関についたころには、もつなのはが出て行つた後だつた。

side なのは

「わたし……だ……わた……」  
「わたくし……」

「わたし……だ……わた……」  
「わたくし……」

殺した殺した殺した殺した殺した殺した  
殺した殺した殺した殺した殺した殺した  
殺した殺した殺した殺した殺した殺した  
殺した殺した殺した殺した殺した殺しつ  
……

「わああああああああああああああああつーーー！」

s i d e   ? ? ?

今日、僕は全部『亡くした』。

お父さんとお母さんが、僕を木の根っこから守つて死んだ。  
今、僕は家にいる。

テレビでは『あの木』を人為的なもの・・・・・・・つまり、誰かが  
わざとやつたといってた。

他にも、僕と同じ思いをした人がたくさんいるみたいだった。

・・・・・許さない。

許さない許さない許さないゆるさないゆるさないゆるさ  
ないユルサナイユルサナイユルサナイ！－

どうして『あれ』を発生させた！？どうして街中でやる必要があつ  
た！？

僕は・・・・いや、『俺』は絶対、ユルサナイ。

『アレ』を発生させた奴を・・・・殺す。

そして護るんだ、誰も俺と同じ思いをしないよ！－

その時、家の庭で何かが光りだした。

庭に出てみると、どうやら代々受け継がれているひのきの祠が光つて  
いるようだ。

格子戸を開けて中を見ると、

『む…………いや？ 我は起きている？ では使い手が現れたのか。  
…………ん？ もしかして、その君が使い手か？ いや、そうでなくとも自己紹介は必要だな』

・・・・・ 剣が、しゃべってる。

『我は 家の宝剣『五郎入道正宗』、よろしく頼む』

## 第十六話彼女といつての・・・・（後書き）

『あれだけの大きさと範囲で、（命に関する）被害を描写しないつてどうよ？』

と、個人的に疑問に思つて、ちょっと『自分が』納得いく展開にしてみました。

一番最後のは・・・・・ついでのフラグです（笑

次回、なのははどうなるのか？

それではへへノシ

## 第十七話遭遇、いくつかの場所で（前書き）

今回そんなに進展ありませんが、『今後のフラグのようなもの』なら  
多数出てきていますwww

追記：10月1日ちょっと加筆。

## 第十七話遭遇、いくつかの場所で

side 桃香

あれから数日。

なのはちゃんは部屋に籠りつきだ。

あのあと、あの臨海公園でなのはちゃんを見つけたけど……。  
正直、あの事実は9歳に重すぎた。

今朝もテレビでやっているのは、この前の騒動のこと。  
そしてお決まりのように出てくる、被害者の数。  
・・・・・何か、自分の無力さが分かつた気がするよ。  
被害者だけじゃなくて、なのはちゃんも助けられないなんて……。  
・・。

「いじなんで……変えられるのかな？」

思わず、口から不安が出た。

side なのは

何も頭に浮かばない、何も感じない、何も聞こえない、何も見えない。  
ベッドの中で、ぼんやりとするだけ。

唐突に何かを思い出した。

だけどそれは、この前の「コース」だった。

画面の下の方にまづきりと書いてあつた、『死亡者』・・・・・。

ほんとう、何で見逃しちゃつたんだろう。

わざわざ気付けば、ジュエルカードを封印できていれば、あんなことにならなかつたのに。

・・・・・もう、考えるだけ無駄だね。

直接じゃないにしり、わたしは・・・・・わたしは・・・・・

「なのはちやん？」

今は誰とも話したくない。

だけど、それを云える気が出なかつた。

「今日も学校にいかなくていいって、わたしも出かけたんだ

・・・・・無茶しちゃダメだよ？」

声はもう聞こえなくなつて、また部屋に音が無くなつた。

・・・・・これから、何をすればいいのかな？

しゃまひぐ、ほんやりしてたがど、いい加減体を動かさなきや。

着替えてから部屋を出る。

下に下りると、誰もいなかつた。

・・・・・・あたり前だね、今頃みんな翠屋じやないのかな。

テーブルの上においてあつた朝ご飯（時間的にはお昼ご飯かな？）

を食べてから、外に出た。

とはいへ、今の時間帯は普通、小学生は出回っていないから、ちよつと注目浴びぢやうのが玉に瑕かな・・・・・・?

いくところが無いので、いつもの臨海公園に来て います。

ベンチに座つて、ほんやりする。

動く気も起きないので、窓を見るひとした。

side はやて

今日は隣町の浦原商店まで、お買い物しつつている。  
いや～それについても、あそこ商品は安いし品揃えが豊富だし。

ちょっと距離があるのはつむじことつて難点やけど、まさに世の奥様の味方や！

それに、何年か前にちょっととしたことで、お店の人とも仲良くなつたんやけど、みんな面白くてええ人なんやで！  
せやから、毎回行くのが楽しみ

ガツツ

あ、あかん、車輪が溝にはまつてしまつた。

どう動かしてもばずれんし、かと言つて助け呼ぼうにも、周りに人がおらん。

どないしよう・・・・・。

その時やつた。

「あんた、大丈夫？手伝おうか？」

「へ？」

見ると、気の強そうな女の子が目の前におつた。

後ろの方に、その女の子とそっくりの子と、オレンジ色の髪に茶色の目をした、どうみても外見が日本人離れしとる男の子がいる。

「えと、いいんですか？」

「いひつていひつて！困つてる人を助けるのはとーぜんでしょ？」

「そういうわけだから、ちよいと動かすぜ？」

女の子がゆうた後に、そのオレンジ色の髪の子がうちの車椅子の取っ手を握つた。

続いて女の子が右に、女の子にそっくりな子が左にいつて、車椅子を抱える。

「二十九・三十」の二・三

あれよあれよと黙りて聞ひ入るが、こゝでさせぬね。車輪はすぐには止めた。

「あ、あっがとうござむす」

「いいの！ ここでたかひ送りたげるよ」

「もちろん、またはまつたら大変でしょ？」

「うーん・・・・・じゃあ、お願いします」

「歩けたーーー！」女の声がさうの後ろに響いて、車椅子を押し始めた。

めた  
あ、せや！

「まだ、お名前聞いてませんでしたね？うち、八神はやでいいます」「あ、そだね、あたしは石田散竜いしだりゅう、みんなは『チル』って呼んでるから、あんたもそう呼んでね、それと、敬語もいらないよ」「俺は石田阿竜いしだありゅう、チルとは双子の兄弟だ、俺は『アル』って呼ばれてる」「最後か・・・俺は黒崎刀護くろさきとうご、あだなも何も無いから、普通に刀護つて呼んでくれ」

チルちゃんにアルくん、刀護くんかあ・・・・うん。

「モニターリング」

俺とチルとアルは、途中で出合つたはやてつとと一緒に浦原商店へ向かつてゐる。

「へえ？お姉さんいるんだ？」

「うん、ちょっと変わり者やけど、頼りになるよ」

「そななんだ」

「兄弟かあ」

「ああ、刀護は一人っ子だつたな」

「おうよ、家に帰つても暇だからなあ」

「（）両親お医者さんだからね」

「ああ、たまに手伝いとかやるけど、遊び相手がいなーのはちよつと……」

まあ、お陰で保健体育は成績いいんだけど。

「そつかあ、ええなあ……」

はやてが、寂しそうにぽつつり。

「はやて、どうした？」

「あ、うん……うちな、お父さんもお母さんももういらんから……」

「え、そつの……？」

「うん……」

「これは……ちょっとまずこ」と聞いたかもな：

「えと、何か、（）めん……」

「こや、別に刀護くんの所為やなこよ、そりゃ寂しくないやつたら嘘になるけど、別にそれほど寂しこもつわけでもないから」

「うわあ、はやてって見た田口よりはず差しにわね？」

「そんなー。うちおねーちゃんがおひんやつたら向も大概よー?」

「あひゅうて謙遜（ひこひとだつけ）（ひこひの）してあたふたするはやで。

「ど、あひゅうてひひひに商店にひこたみたいだな。

「ほんじゅうせ」とあこせつして、弓削口を開ける。

「こひゅしゃーこみなれ……おや、はやてサンも一緒でしたか  
「せこー。ほんじゅうせ、浦原さん」

普通に会話をすやすやしてと浦原さん………って。

「二人、知り合二なの?」

俺の代わりに、チルが疑問をいった。  
浦原さんは扇子で口元を隠してから、

「ええ、やうやくでよ?」

「何年か前に、ちゅうとした縁で、知り合つたんよ」

けりりと答える一人。

呆気に取られる俺達を他所に、

「といひではやてサン、今日もお買い物ですかね?」

「はい、こつもどおり500円分!」

「かしきまつました、少々お待ちください」

とスマーズにやつ取つた。

「…………せめてお母さん」

「くつ?」

「いや、今の浦原さんとの会話を聞いてたらこそんな言葉が……」

「

なんだか氣まずくなつたのだが、視線をそらした。  
とりあえず、後ろで意味無べーヤーヤしてたチルには後で拳骨な。

「お待たせしました~」

「あ、はーーありがとうござんなー。」

「刀護サンたち奥でお話ですか?」

「はーー!」

「宿題がてら、元気聞話しだして……

「はやてもどり?..」

「ふえ?ええの?..」

「わらわんー」と答えるチル。

はやては少し考えたる素振りを見せてから、

「じゅあ、いー緒させてもうむかなかな?」

はやては笑つて答えた。

side なのは

どれくらい空を見てたのかな？

気が付いたらもう周りが暗くなり始めていて、特に西のほうが赤くなっていた。

「…………」

不意に昨日のニュースを思い出しちゃって、頭を抱え込んだ。

それに加えて、空が血で塗られてるみたいに思えた。

わたし一人のミスで、たくさんの人人が…………死んだんだよね。

直接じゃなくても、人殺しは人殺し…………。

・・・・・あははっ。

「どうすればいいのかな？」

帰らなきやいけないけど、体が動かない。

・・・・・まだ明るいから、もうちょっとといっていいよね？

「！」の辺でいいか？・・・・・ 分かつた、それじゃあ・・・

向こうの方に、男の子が見えた。  
多分誰かと一緒にいるんだろうけど、その人がどこにいるのか分からぬ。

・・・・・わたしと同じ魔導師っていう可能性もあるけど・・・まさか、ね。

「…あん？」

偶然男の子と目があう。

そしてそのまま逸らせずに、時間が過ぎていく。  
いくらか時間がたつて、男の子がこっちに近づいてきた。  
暗くてみえなかつた格好とか、顔とかが、よく見えるようになる。  
真っ黒な髪に、海みたいな青い目。

シャーリングを着ていて、左手には黒い靴と白い持ち手の刀を持っていた。

そして何より目が行つたのは、色帶で巻かれて、まるで骨折したみたいになつた右腕。

わたしを見たまま男の子は口をあけて、

「どうしたんだ?」こんなところで

「…………うん、ちよつと…………ひりこ」とがあって……

また黙つてみる男の子。

あると少なづため息をついて、

「もう夜になるから帰つたほうがいい、心配してくれる親御さんがいるんだから」

「…………そうかもしないけど、お父さんとかお母さんとかいるのは、あなたも同じだと思うな」

そしたら、男の子はまた黙つて。

「…………この間の、大きい木の時に、死んだ」  
「…………つー?」

鳥肌が立つのが分かつた。

「…………」「…………めんな…………」  
「…………」

田の前がぼやけて、男の子がよく見えなくなる。

多分今ので、わたしが原因だつてことを気付かれたかもしない。  
もしかしたら、あの剣で殺されるかもしない。

・・・・・でも、当たり前かもしれないな・・・・・。  
だけど返ってきた言葉は以外だつた。

「…………お前が謝る必要はない」と思つ  
「…………え?」

「お前は多分、俺に同情してくれているんだろうけど、必要はない  
から」

「…………でも…………」

「幸い俺には支えてくれる『家族』がいるし、田標もある、だから  
お前が泣く必要はない」

まっすぐにわたしを見て、男の子はそう言つた。

・・・・・　だけビ、

「やつぱり、家族が死ぬのは・・・・・・・・」  
「ああ、寂しさ、だけどそれを言訳に立ち止まるわけにもいかない」

同じ年とは思えないくらい・・・・・・・・何でいうのかな?

田と、表情と、言葉、全部に強い決意がこもっていた。

・・・・・・何でか知らないけど、体がいくらか軽くなつた気がした。

わたしはゆっくり立ち上がり、

「・・・・・・・・強いんだね、あなた」

思つたことを口にしたとたん、男の子の表情がガラリと変わる。

「違つたな、『目標』に逃げたんだ」

また、二人とも黙り込む。

それを終わらせたのはわたしだった。

「・・・・・・・・それでも、うじうじ悩んでるわたしよつ、ずっと

強いよ」

「・・・・・・・・そうか」

わたしは男の子に背中を向けながら、手を振る。

「・・・・・・・・ありがと」

気がついたら、そんな言葉が出てきていた。

side 刀護

「うわ、そろそろ帰らなきゃ」

「あ、ほんまや！」

「けつこう時間たつてるね～」

「もうだな」

すっかりはやでやチル、アルと話し込んでいて、気がついたら時計の針が5と1-1を指していた。

それを確認した俺たちは、そろって苦笑いをする。

「じゃあ、今日ほの辺でお開き?」

「だな」

「みんなそろそろ帰らんと、いつの人心配するやうへ」

「それははやてもだろ」

「あ、せやね」

俺たちを心配するせいで、同じだつてことを教えたひ、せやは柔らかく笑つた。

…………やべ、かわいい…………

「おんやー？顔が赤いよ？ヒーヒー？」

「確かに、テレテレするなんて珍しいね」

「つば、ばか！一人とも何言つてやがるんだ！」

「きやーー怒つたーー！」

「だれの所為だーー！」

はやしがやんわりとその漫才を止めた。

あと、舌打ちとか聞いてしまつたら戦慄するのは俺だけか？

「チルサンとアルサンのお家には連絡しましたよ、お母様がお迎えに来るやうです」

「おおーっすが浦原さん、準備いいー！」

「すみません、ありがとひざります」

テンションに任せて喜ぶチルと、丁寧にお礼を言つアル。

性格の違つてこないといつてもわかるんだな。

「さて、刀護サンはいつも通りにして、はやしがサンは今からお帰り

ですね？」

「はい、道も覚えていますし、真っ暗になる前には帰れます」

俺はランドセルを、はやては買った物が入った袋を持って帰る準備をし始める。

「はやてん家、あたしらのところより離れてないもんね、ちょっとうらやましいかも」

「あはは、まあチルちゃんとアルくんに關しては、また明日へゆうことだ」

「おうよー。またいっぽい話そうねー！」

「うそー。」

「うやつて、はやてとチルは指きりをしていた。

そして、俺は商店の土間におりたわけだが、ここで問題が発生。

「やうだ、はやて、一人で車椅子に乗れるか？」

「うん、大丈夫やよ、刀護くん悪いけど、ちょっと車椅子押させてくれへん？」

「ああ、いいよ」

はやては返すと、俺に車椅子を押さえるよう指示。俺は言われたとおり車椅子の後ろにまわり、支える。するとはやては慣れた様子で、車椅子に座った。そして俺はすかさずはやてに買い物袋を渡す。受け取りながらはやては、

「ありがとう」

と、嬉しそうに笑った。

「はやては明日も病院？」  
「うん、この足の治療…………ゆうても原因 자체がわからへんから、ちょっとした検査だけなんやけど」  
「そつかあ、大変だな」  
「だけどおねーちゃんがあるから、怖くはないよ」

帰り道、そんな会話をしながら俺とはやては歩く。空はもう端っこのはうが赤いこと以外、本当に真っ黒だった。こういう時つて、街灯のありがたさを感じるんだよね。しばらく歩いていると、田の前に分かれ道が見えてくる。

「はやてはどっちだ？」  
「右」「左」  
「あ、じゃあ同じ方向なんだな」

そうついて、右を指差すはやて。  
それを見て俺はほつと・・・・・つて、なんでほつとする必要あるんだ？

・・・・・ 考えてもしたかないか。

「よし、行こうか」

「せやね、はよう帰らんと」

俺は脚を、はやては車椅子を動かして、右に曲がる。そしてまたしばらく行くと、向こうのほうに人影が見えてきた。こっちに近づいてきているので思わずはやての少し前のほうに出る。その人と俺たちが街灯の明かりに入つたときに、はやての顔が明るくなるのがわかつた。

「おねーちゃん!」

「はやて!」

はやてのお姉さんと思われる人に、はやてが飛びつく。お姉さんははやての頭をなでてから俺を見て。

「君、送つてくれたの?」

「え、あ、はい!」

「そつかあ、ありがとう」

「い、いえ! どういたしまして!」

そうやつて頭を下げるお姉さん。

俺はなんだか照れくさくなつて、頭の後ろをかいた。

「そーいや君、家は近く? よければ送ろつか?」

「あ、大丈夫です! もうすぐそこなので!」

「じゃあ一人でも大丈夫かあ、せつかく送つてくれたのに、ちよいと残念かもwww」

「すみません・・・・・・」

「こーよおー君の所為じゃないんだからー! ただ、近いとほいえ、油断しちゃダメよ~?」

「はー、えと・・・・・・・・ねめづかこありがヒツジロコモす?」

慣れない敬語を使つたら、お姉さんほにひつ笑つて。

「へえー今ビキのトツで難しい言葉も聞えるんだー! 関心関心ー...  
「ど、どうも」

「うん、それじゃああたしはひまじでこいかな?」

「あ、はーー! お氣をつかへー!」

「そつちもね~!」

「送つてくれて、ありがとうな~!」

車椅子を押されながら、はやてが手を振つてくれたので、振り返す。  
そのまま俺は、家に帰つた。

「ん~・・・・・・・・そーいやあの子の顔、どつかで見た気がする  
けど・・・・・・まあ、その内窓に出すかにゃ~」

第十七話遭遇、いくつかの場所で（後書き）

はい、先に謝ります。

すみませんでした！！（ガバッ 綺麗な土下座

言い訳はしませんがあえていうなら、出来心ってやつです！ハイ！

次回も期待してくれると嬉しいな・・・？

それではへへノシ

## 第十八話便利屋さん、はじめました（前書き）

タイトルは本編に関係してるだけで、意味はありません。  
今回もフラグ的なものと日常です。  
そしてついに・・・・。  
それではどうぞ。

## 第十八話便利屋さん、はじめました

side ユー

あれから一週間。  
なのはは少し元気になつた。

いつも通りまた学校に通い始めている。

・・・・・あの頃のなのは、見てられなかつたもんなあ。

ちょっとだけでも立ち直れてよかつた。

「ユーノくん、今日もお願ひね  
「あ、はい！」

そつそつ、じつに来てから、僕にもちよつとした仕事ができた。  
桃子さんが僕をバッグの中に入れて、家を後にする。  
ついた先は、

「あ、桃子さん！おはようござります！」  
「おはよう、さて、今日もがんばりましょ  
「はい！」  
「さー喫茶翠屋、今日もいくわよー！」

そう、なのはの家がやつている人気のお店、翠屋。

少し前から、僕はこの看板フェレットとして働かせてもらつていいんだ。

といつても、業務内容はちょこちよこ動きまわつたり、お客さんに撫でさせたりつてくらいだけど、皆喜んでくれるからやりがいがあるよ。

あ、早速本日最初のお客様だね。

桃子ちゃんたちは黙る間に声で「こりゃ しゃこねせー」とこわい声くもお姫さんにかけよつて、

「 わね いりー 」

s.i.d.e 桃香

「 じゃー、そのタレントが……………」

「あー、そりや 大変だつたよね～」

「 今日どうじく～？」

「 おーいー・サッカーしようぜーーーー！」

今は昼休み。

今日もつかのクラスは賑やかで、仲良しなグループ」とに集まっている。

それぞれ、昨日のテレビや、今日の授業のことをしゃべったり、連れ立つて外に出て行つたりしている。

ちなみにわたしは一人で読書中。

(「これといった友達がいませんもんね、主）  
(もうなんだよねえ・・・・まあ浮いてるわけでもないから、  
このままでもいいかな？）

(・・・・行き遅れになつても知りませんよ？）

(「ちょっと！？何言つてるの藍桜！わたしの年齢じやまだ早いつてー...」  
(おや、主は実年齢三十路近くなのですよ？立派な行き遅れだと思うのですが？）

(・・・・もつこいよ、藍のバカアア・・・・）

あれ？田から塩水が・・・・。

「ねえ・・・・・・ちゅうと」

「うん・・・・」

「亜桜さん、また一人で落ち込んでる」

「何かあつたのかな？」

クラスの子達が何か言つてるけど、聞こえないもん・・・・！

「桃香ちゃん！」

「ん？・・・・・・ああ、なのはちゃん」

読んでいた本を本棚に戻してから、なのはちゃんのところへいく。  
・・・・なのはちゃんはあれからいくらか立ち直つて、いつか

つてまた学校に通つている。

まだ悩むところはあるみたいだけど、かなり回復してゐみたい。

「どうしたの？」

「ちよつと教科書で分からないところがあつて・・・・教えてく

れる?」

「うん、わかった、じゃあちよつと準備するかい、待ってる」

「うん。」

side 飛鳥ナリ

「それじゃあ石田センセイ、ありがとうございました」

「ありがとうございました!」

「はー、お大事に」

はやての主治医である石田先生に挨拶してから病院を出る。

・・・・・今更だけど、はやてがこの間知り合った『石田』姉弟  
と苗字が一緒なのよね。

しかもどっちも病院関係者だし・・・・・・こんがらなこよう  
に気をつけなきゃ。

「さて、と

病院を出てからケータイのスイッチを入れる。

「ん？じやあ今まで切つてたのかつて？」

当たり前じやにゅいか！ケータイの電波は病院の電子機器にとつて毒なんだぞ！！

つげふんげふん・・・・・・・メールの項目を開いて、受信箱をチェックする。

「えつと・・・・・・・お、来てる来てる」

「おねーちゃん、何見とるん？」

「お仕事来てないか見とるん♪早速だけビームんね、はやて、今日は午後いなくなるから」

ちょこつとだけ寂しそうに笑つたはやての頭を撫でながら、受信されたメールの一つを選んで、返信する。

今年に入つてから、剣道場のバイト以外に、もう一つ仕事をはじめた。

それは便利屋で、名前は『偽純白の明星』グレー・ホースペリヤ。

飼い猫を探しから、気になるあの子の好みに、話し相手、おつかい、合言葉を言えばちょっと危険な『裏』の用事まで、なんでもやる。ただ、それなりの報酬はいたぐけど、受け持つた依頼は一つ一つ、確実にこなしてつてるから、評判は上々www

- ・・・・・・何？『労働基準法』？それ前にも聞いたよぉ！大丈夫、名義上は『ただの』小遣い稼ぎだから、でもちょっとギリギリかも？

まあ、さすがに裏の方をやるときには、変身魔法で年齢じまかしてるんだけどねつ

さて今回の依頼主は合言葉あり、内容は・・・・・・・つと。

「換金時の証明書、その他もろもろの信用書類偽装の助つ人・・・・・

クリエイティブ

・・・ねえ？」

### s.i.d.e なのは

「なのはちゃん、じゃあ次はこれやつみよつか?」

「うん、わかった!」

「桃香、ここの?」

「あ、そこの」「うやるの」

「えっと・・・・・・うん出来た、ありがと」

「桃香さん、これはこの公式を使つても・・・・・・」

「うん、普通はこれでやるけど、問題なこと」

わたしとアリサちゃんとすずかちゃんは、ただいま桃香ちゃんに勉強を教えてもらっている。

はじめは国語だけだつたはずが、いつの間にかアリサちゃんは理科を、すずかちゃんは算数をやつていたの。

ちなみにわたしは国語をやつているんだ。

わたし、文系は苦手だけど、桃香ちゃんの説明は分かりやすくて、

かなり頭に入ります！

キーンゴーン…………。

「あ、昼休み終わっちゃった！」

「教室に戻らないと…………」

「そうだね、桃香ちゃん！教えてくれてありがとう。」

「うん、転ばないようにね？」

「はーい！」

桃香ちゃんに手を振つてから、勉強道具をもつて教室に帰りました。

「それじゃあ、また明日ー！」

「うんー！」

「ばいばーい！」

放課後、今日は塾はお休みなので、アリサたちと一緒に「お別れ。

桃香ちゃんは先生のお手伝いでないので、ここからは一人で帰ることになる。

……………そういえば、一人になるのって久しぶりだなあ。  
最近まで部屋に引きこもっていたとはいえ、桃香ちゃんが来てから、  
一人の時間が少なくなつた気がする。

たら嘘になるけど、いまでもひじらじしてらんないもんね。

視線の先には臨海公園

「…………いるかな？」

ちょっと寄り道です。

でもその時、

「おーい！なーちゃん！」

S i d e 飛鳥

**クライアント**  
依頼主に会って正式に依頼を受諾、完遂してから、帰っている時だ

つた。

臨海公園に入つていくなのはなーちゃんが見えた。

・・・・・・・・本日一度田の今更だけじ、『なのはなーちゃん』つて  
よつ『なーちゃん』が言いやすい氣がする。  
よし、

「おーーーなーちゃんーーー！」

すると向ひうは驚いた顔でこいつを見た。

あたしは「コーコー」笑いながらなーちゃんに近寄る。

「いんなところで何してんのやー？」

「ユーリさん・・・・・・・・・・こや、ちょっと・・・・・・・・・・寄  
り道しよつかなつて・・・・・・・・・・とこつかなんですか？『なー  
ちゃん』ついて？」

「あ、り、り、寄り道は良くなじよーwww『なーちゃん』に関しては・・  
・・・・・・・・・・氣分的にそつ呼びたかった？」

「なんで疑問系なんですか・・・」

そうこいつ苦笑とするなーちゃん。

・・・・・・・・・・うん、桃齋ちゃんから、この間の畠木騒動の一件  
で落ち込んでるつて聞いたけど、けつこいつ立ち直つてるみたいね。

「まあ、ここの子の場合心配は必要ない・・・・・・・・・・か

「?あの、何かいいました?」

「ん~?氣のせいじやにやーいの一www?」

危ねえ危ねえ、心の声が漏れてたな：

「は、はあ・・・・・・・・・・あ、そうだ、何かじ用ですか?」

「うんや、『J』弔つてほゞのもんじやないよ、偶然見かけて、声かけただけだから」

「やうなんですか」

「おつよwwとこつわけでおねーわんはもつ帰るこやー」

「あ、はい！氣をつけて！」

「なーちゃんもね～ww」

手を振つてくるなーちゃんに手を振り替えながら、その場を後にしてた。

s.i.d.e なのは

ゴーリさんと分かれてから、公園に入つてみた。

そして、あの子と初めて会つた場所に行つてみる。

「・・・・・・・・あ」

いた。

この間と同じ格好で、鞘に収めたままの刀を振つていた。

右腕の包帯はまだ取れてないみたいだけど、それでもかなり上手だと思えた。

一通り振り終えたのかな？

一旦動きを止めて、大きく息をしながらベンチにおいてあるタオル

を取りにいく。

「…………？」  
「…………つ」

目が、あつた。

男の子は一瞬ピタッと止まってからこいつを見た後、わたしの「」とを思い出したみたい。

「この間の…………」

「うそ、久しぶり」

何でだらり？ちよつと話しただけなのに、すぐ嬉しい……。

「その様子だと、いくらか吹っ切れたみたいだな」

「えへへ、この間あなたと話してたら、いくらか楽になつたんだ」

「ああ、だから『ありがと』つていつてたのか」

「うん」と頷いて、右腕に手を移す。

「右腕…………まだ治つていらないんだね？」

「…………ああ、複雑骨折ってやつらしい、治るまで、まだ時間がかかるな」

「あの…………だったら、ここで訓練とかしないで……。  
・その、家で安静にしてるとかは？ほら、家でもダンベルとか、持ち上げていれば…………」

別に強くなりたいって思いを否定する気は無い。

けど、やっぱり怪我人なんだからちよつとくらい休んでも……。

・・・。

「気遣いは感謝するけど、やつぱり強くなりたいから」

その子は、そう言って笑った。

「にやはは、でも腕は大事にしたほうがいいよ」

「ああ、やせてもらうよ、時間的にもそろそろ帰らねば

あ、そうだ。

「まだ、名前を聞いてなかつたね？わたし、高町なのは！」

「なのはか・・・・・かわいい名前だ、俺は牙崎闘夜おほさきとうや、よひしへ！」

「つと、闘夜くんだね！ うん、よひしへ！」

闘夜くんと握手をしてから、家に帰った。

もう春先だっていうのに、夕方になるとひょつと寒くなる。

だけど、それより・・・・・・。

「かわいいって・・・・・・・・こうしてくれた」

寒さに負けないくらい、顔が熱かった。

side 飛鳥トリ

「はいよ、『れぐら』でどうだい？」

「えつと？・・・・・ええ、十分です、『』利用いただきありがとうございました」

数日後、書類偽装の手伝いの報酬を貰っていた。

ちなみにあたしは変身魔法を使い、白髪でいくらか成長した姿でそれを受け取る。

いや、実質そんなに危険な仕事じゃないんだけじね？一応うちでは偽装を『裏』の項目にいれてるし、例えどんな内容でも『裏』の依頼ではこの姿つて決めてるから。

「いや、じつちも大助かりさね！手伝ってくれてありがとう」

「どういたしまして、またのご利用お待ちしております」

「ああ！」

かなり満足した様子で去つていいく依頼主クライアント。

その姿は、黒髪で小柄な日本人女性・・・・なんだけど  
る。

勘のいい人はもう気づいたかな？

(あれってアルフさんだよね？暗羅)

(ああ、マスターの記憶にある言動、変身後の容姿がすべて一致する、それに現在の時間軸は原作では第3話後・・・・更に偽装書類の使用目的はマンションの一室を借りるためと来た)

(ま、それだけそろえれば本人と断定していいだろーね、さしづめ、こっちに滞在するための下準備つてやつ？)

(どううな、仮に予想が外れても、彼女らが来るのは間違いないだろ？)

(くすくすっ、予想通り、面白くなってきたじゃないかwww)

(？予想通りなら、面白みが減つてしまつ気がするが？)

・・・・・・・くすくすくす。

(あーも一分かってないなー暗羅は、展開が読めても、そこに至るまでの経緯が面白いのよ！)

(そんなもんか？)

(そんなもんなのよ～www・・・・でも、ね)

今あたしの顔に浮かんでるのは、おそらく『妖艶な笑み』というやつだろ。

ただ自分で確認できるのは、口の端がつりあがった事だけ。

(外れたら外れたで、結局はさうに面白くなるだけ、なんだよね)

s i d e   ? ? ?

その日の夜。

インターホンが鳴つたので、チェーンがかかっていることを確認しつつ、扉を開ける。

まあ、この時間帯だ、おおかた大家くらいだろう。  
扉の向こうを除くと、

「ユキ！」

「久しぶり」

「お前達…………どうし…………」

言い切る前に、思い出した。

そういえば、彼女らがくるのは今日だったな。

「まさか・・・・・忘れてたのかい？」

「す、すまん、来る」とは覚えていたが、今日だつたとは・・・・・

・・・」

ドアの向こうにいる、二人のうちの一人が、俺をジト目で見てくる。一応弁解はしたが、どうも見苦しいな・・・・・・・。

「とりあえず中に入れ、立ち話もなんだし、しばらくなにしておいてからな

「む・・・・・まあ、そうだね」

「そうとくれば」と、俺はチーンをはずし、一人を中に入れ。もう一人の、俺より年下の少女の荷物を預かり、リビングの一角においた。

「疲れただろう？軽いものでよければ今から作るが・・・・・・・・

「うーん・・・・・・・・・・じゃあお願ひね

「ああ、頼んだよ」

「よし、じゃあちょっと待つてくれ

今日はもう8時を回ってしまったし、一人の疲れ具合を考えたら・・・・・・・・

「おかゆが妥当だな、色々具もいれるか

早速魚を焼き、野菜を刻んでいく。

そして水を沸騰させてから、今日の晩御飯に炊いた、少し冷えたご飯と焼き魚、きざんだ野菜を入れた。

あとはふたをして煮込むだけだと。

「しかし、俺の時もそうだが、よく書類を偽装できたな」

「…………コキとわたし達の身分証明書を作つてくれたのは彼女だよ？」

「そうさーまあ、あたしとこの子の分は人の手を借りたよ、それにしてもこっちの世界にも便利屋はあるんだね、お陰で助かった」

「そつか・・・・・ほら、緑茶だ、あつたまるぞ」

「ありがと」

少女と女性にお茶を渡してから、俺も一服する。

といつても、おかゆが焦げないよう見えてなきやいけないから、すぐには席を立つたけどな。

「今回の仕事はロストロギアの搜索だったか？」

「うん、対象はジュエルシード、全部で21個あって、力は願いを叶えるつてやつ」

「だけど、ゆがんだ形で叶えるのが欠点だね、それに魔力を注げば次元震だつておきちまう・・・・・・・・・・まったく、あの鬼婆は！・・・・・娘になんてものを集めさせるんだ・・・・・・・・・！」

女性の最後の方のぼやきは、少女には聞こえなかつたみたいだが、俺にはしっかりと聞こえた。

俺と少女と女性にジュエルシードの搜索を命じた人は、確かにあってまだ一月しかたつていない俺でさえ『異常だ』と思つてしまつ。少女が言づのを聞く限り、昔はとても優しかつたみたいだが・・・・・・・・なら何が『彼女』をそつさせたのやら。

つと、危ない危ない、おかゆが焦げるところだつた：

「ほり、できたぞ」

「おおー。さすがユキー。おいしそうだねえ」

「男の子なのに料理が上手…………」

おかゆを茶碗に注ぎ、一人の前に持っていく。

女性はかなり目を輝かせて、少女はどうにか寂しそうに困った。

「そんなに気に病むな、俺が教えるから」

「…………うん、そうだね、それじゃあいただきます」

「ああ、召し上がり」

嬉しそうに食べる一人を見て、何となく和んだ。

## 第十八話便利屋さん、はじめました（後書き）

というわけで、ついに次回より、三人目の転生者本格参戦です。

名前とプロフィールは近日に！

それではへへノシ

第十九話死神さんが出てきた時点で、イラギュラーには気をつけましょ？（前編）

遅くなりました。十九話です。

今日はついに・・・・。

それではどうぞ！

第十九話死神さんが出てきた時点で、イラギョウヒは飯をつかましよ？

s.i.d.e 飛鳥

「ふえ？ すずちゃんおおのお茶会に誘われた？」

「うんー。この間図書館で会ったときに約束したんよ、なのはちゃん」とアリサちゃんもくるんやー！」

晩御飯を食べてる最中、はやてがそんなことをいったので、思わず過剰に反応してしまつ。

はやてはこじこじながら、『飯をほおばつた。

「へえ？ それで、いくの？」

「もちろんー。・・・・・なのはちゃん、この間の大きい木の時から元気ないって聞いてたから」

「・・・・・・・そっか」

姉妹そろって笑いあつてから、再び食事を再開した。

「お茶会をしたら……フロイトがやさんの初対面だよ」  
や  
「」

(やうだな……しかしまスター、どうやら我々が介入したこと  
で世界の流れがいくらか変わってしまったようだ、フロイト嬢  
以外の来訪も頭に入れておかねば……)

「そーだね」

まあ、だいたいの流れまでは影響してないはずだから、だいじょ  
ぶ……の、はず。

・・・・・ 考えてもしゃーないか。

「とつあえず、寝るお、明日も早いから」

(ア解した)

ふと思つたけど、誰でもしたくなるよな?ベッドへのダイビング。

side 桃香

「えっと…………うん、よし！」

服装の乱れが無いかチェックしてから、玄関に下りていく。  
ちょうど恭也さんとなのはちゃんが待っていてくれた。

「待たせてごめん」

「大丈夫だよ」

「ああ、バスまだ時間がある」

そうやって、三人で外に出た。

三人そろってバス停へ向かって歩きながら、

「今日はすずかちゃん家に行くんだよね？」

「うん！」

「それで恭也さんは忍さんに会うと」

「まあ…………な」

恭也さんは少し照れくさそうにうなじをかいだ。

「あ、バス停…………」「  
「でも…………あれって乗る目的のやつ…………だよね？」「  
「…………やばくないか？」

その後？

ええ、三人そろって無言で走りましたよ？  
もちろん全速力で。

s i d e 飛鳥

「ここの辺でいいのかこやー？」

「うん、もらつた地図の通りここくどこの辺やけど……」

はやての手にある地図を見ながら、まわりの地形と照らし合わせる。すると、向こうの方に周りの家とは大きさとか、風情とか大きさとか、あと大きさとかが明らかに違う建物が見えた。

・・・・・・しうがないじゃん、だつて本当にでかいんだもん！

「わあーほんまにおつきになあー」

はやては一人無邪氣にはしゃいでるけど・・・・・うん、おねー

そんなあのサイズのお家は後にも先にもテレビでしか見たことがないやつ

「倒されるつてこのことかうつんだねーあははー・・・・。

とつあえず、

「待たせるのもなんだし、こいつか?」

「うんー。」

再びはやての車椅子を押して、歩き出した。

side ???

「じゃあ早速探しにこいつか

「それならあたしがついて・・・・・

「いや、俺が行こう

言葉を遮られたことに腹を立てたのか、睨んできた。  
しかしいうからもむずれないので睨み返しながら、

「お前達はついこの間来たばかりだろう、どうせ一人で行くのなら、お前かこの子のどちらかに待機して貰わなければ」

「そんなんだつたらこの子じゃなくてあたしが…………」

「こいつは言っても聞かないだろ？だから自然と待機組はお前になるわけだ」

いぐりか言いくるめると、相手は悔しそうに黙り込む。

・・・・心配なのは分かるが、やはり『休み』については必然と必要になる。

遠いところから移動してきたというのなら、なおさらだ。

「ごめんね、でも母さんを待たせるにはいかないから・・・・」「けど・・・・あーもう…」

なだめられ、しばしの葛藤を見せた後、叫ぶ。  
・・・・・悩むのは構わないけど、『近所の迷惑も考えるようにな。』

「ユキ！怪我させたら承知しないからね！」

「分かっている、切り傷一つ付けさせないぞ」

にやつと笑いあつてから、刀を持って外に出た。  
もちろん刀には認識阻害をかけている。

「それじゃあ行つてくれるね・・・・行こう、ユキ」

「ああ

「気をつけて！留守は任せな！」

待機を引き受けてくれた仲間に小さく手を振つて、一人で屋上へ向かつた。

side なのは

「大変だつたんだね」

「うん、でも間に合つてよかったよ」

「あはは、本当に、ね」

わたしとアリサちゃんと桃香ちゃんで、さつきのバス停でのお話を  
している。

すずかちゃんさんは、せやじさんとコーエさんに連絡を取る為にわざ  
と抜けている。

あ、ちより帰つてきた。

「お帰りすずかちゃん！ コーリさん達、なんだつて？」

「ただいま、もうすぐ着きそうだけど、もうちょっとかかるつてセ

やつやつて、ちょっと残念そつて笑つた。

うーん、確かにちょっと残念かも。

「お待たせしました！」

「キュー・シ・キュー・シ・」

あやのゼットリンクさんがお茶とお茶菓子を持ってきた。  
その時ユーノくんを追つて走り回っていたネコが・・・・・つ  
て！

「ファリンさん危ない！」

「へ？わ！？わ！？あわわわわわっ！？」

ネコがファリンさんの足元を回つて、ファリンさんの足が縋れてしまつ。

そしてお盆をひっくり返してしまった。

桃香ちゃんが走り出した。

そしてユーノくんを掴むと、わたしの方に投げてきた。

お盆の上のお茶とお茶菓子は、いくらか乱れていたんだけど無事だ

つ  
た。

ちなみにこの間1~2秒くらい。

「アーティストのためのアート」

「あ、せーーーあつがヒーリングかーーー。」

そして何事もなくファリンさんに向かってこり笑つた。

「桃香ちゃん、お父さん達みたいになつてゐる坂がする」「あ、分かるかも」

「それ、私も思つてたよ  
「え、ええつー!？」

「ちょっとショックを受けた感じで、受け止めたお盆をテーブルに置く桃香ちゃん。

「でも、ここいたんじやまたファリンさんが転んじやうよ。外に移動したほうがいいと思つんだけど……」

ちなみにわたし達がいるのはすかちゃんの家の一室。  
たしかにこのままここにいたら、また走り回るネコに足を取られるかも知れないね。

というわけで、お庭に移動することにになりました。

「でも、よかつた」

お庭に移動してから、世間話をしていたとき、アリサちゃんがぽつりと言つた。

「だつて、最近元気なかつたんだもん」  
「そうだよ、暗かつたし・・・・・本当に心配したんだから」  
「こやはははつこめんね、もう大丈夫だよ」

そうやつて笑つた。

けど、無理してるつて思われたのかな?  
二人ともちよつと暗くなつちやつた。

「ただいま……つてあれ? どうしたの?」

桃香ちゃん—グッズтайミング—!

その時、

「…………（ジユエルシード……？）こんな時に……  
・！？」

思わず桃香ちゃんの方を見た。

桃香ちゃんも気付いたみたいで、いくらか真剣な表情でじつを覗いてきていた。

反応からして、すずかちゃんのお家の中。

だけど、アリサちゃんとすずかちゃんには魔法のこと黙つているから席を外しにいよお……。

「《と、桃香ちゃん—ゴーくん—じつじよつ…》」「

「《まづは落ち着いつなのはちやん、焦つたら何せならなこよ》」

「《あ、そうだ!》」

ゴーくんが何か思いついたみたいで、「キュウウッ」と一聲鳴いてから、走り出した。  
あ、そつかー!

「あれ? ゴー?」  
「どうしたんだろ?」  
「もしかして何か見つけたのかも、ちよつと行つてくれるね

「それじゃあ、わたしも着いていくよ、何があつてからじゅ遅いか  
らね」

始めにわたしが走り出して、次に桃香ちゃんが後から追つて来る。  
アリサちゃんとすずかちゃんに「すぐ戻る」と伝えてから、林の中  
へと入つていった。

side 飛鳥トリ

「おつよ?」

現在すずかちゃん家のまん前・・・・・なんだけビ、

「じつしたんおねーちゃん?」

「や、じつも『爆弾』が起きたみたいでやーしかも場所的にじつも  
すずかちゃん家の中なんだよね」「ええ!? それって大変やん!?!」

おうおうしだすはやで。

・・・・・うん、『めんときめいたおねーちゃんを許して。

「そういうわけだからちゅうと行つて来るわ、もつ田の前だから一人ででもいけるだしょ？」

「うん！ 気をつけてな？」

「まかせろーつーわけでいつちゅえきみやーす（いつてきまーす）！」

「！」

はやてに軽く手を振つてから、現場へと向かつた。

free side

なのはと桃香を見送つたアリサとすずか。

するとアリサはにやつといいたずらつぽに笑顔をすずかに向けた。瞬間、すずかは悪いようなそういうでもないような予感を感じる。

「さて、それじゃあ後を追うわよ

そして見事的中。

すずかは苦笑いしながら、

「えと・・・・どうして？」

「決まつてるじゃない！ コーノが来てからのなのはと桃香、どうも

怪しこから麗行してやるのよー。」

・・・・・今頭痛がしてこるのは『氣のせいだら』。

そう信じながら、

「でも、いいのかな？危険なことだから巻き込みたくないから黙つてるとか」

「だったらおさりよー！あたしらもちょっとくらになら協力できるかもでしょー！？」

今度は頭を抱え込むすずか。

だがこいつなつたアリサは止められない。

「それじゃあ行くわよーーー！」

とアリサが立ち上がった時だ。

「アリサちゃんーすずかちゃんー！」

向ひの方から、はやてがファリンの姉ノエルに車椅子を押されながら手を振っていた。

アリサとすずかの側につくと、ノエルは一礼してすばやくその場を去つていく。

「お待たせしてごめんな」

「そんなーいいよー」

「けど、ノーエルさんは？」

するとはやは苦笑いしてから、

「えつとな、何か途中でバイトの連絡が入ってしちつて、せつあ分かれたんよ」

直後にアリサの目がキラリと光る。

「わつわ・・・・・確かなのはと桃香も同じくじへらいこ・・・・・・

そして再び不適な笑みを浮かべると、

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふえ? ビ! ピ! ピ!

「決まつてゐるじゃない!」

なのは、桃香、ゴーリの秘密、暴いてやるのよ。

後にはやてとすかせひつ語る。

「あの時のアリサには何故か逆らえなかつた

と。

ユーノくんのお陰で上手く抜け出せた、たった今ジュークシードを  
発見・・・・・。  
発見・・・・・したんだけど

なああーん・・・・・。

「ユーノくん、あれって・・・・・。」

「えと・・・・・多分あの子の『大きくなりたい』って願いが正し  
く叶えられたんだと・・・・・。」

呆気に取られてるなのはちやんの質問に、同じく呆気に取られたユ  
ーノくんが答える。  
・・・・・・・ねえ。

「ジュークシードって以外と適当に願いを叶えるのかな?」この間の  
犬とかは『強くなりたい』って願つてあんなゲテモノになつたんで  
しょ?」

「ま、まあ、願いを歪んだ形で叶えるのがジュークシードだから・  
・・・・・。  
「『強んだ』?だから『適当』の間違いじゃ・・・・・。  
「ひとつにかく!」

ユーノくんと漫才っぽこじとをやつしてると、なのはちやんが声を上

げた。

「今はジュエルシードをなんとかしよう！突込みとかはその後でいいと思うのー！」

「…………それもそうだね」

「それにあんなサイズじやすかちゃんも困ると思つから…………」

「…………」

なのはちゃんはレイジングハートを起動させて。

わたしは最近作り上げた防具一（なのはちゃんのバリアジャケットを大人っぽくした感じ）をまとって、封印の準備にはい。

零閃。

フォトンランサー。

一陣の風といくらかの閃光。

直後にネコの体が大きく傾き倒れた。

…………つてええ！？

「だれ！？」

思わず攻撃が来た方向にむかって叫んで構える。

すると離れたところにある木の上に、なのはちゃんと同じくらいの女の子と、中学生くらいの男の子が立っていた。

といふか、あの男の子…………。

（主！お気づきですか！？）

（分かつてる…………三人目の記憶図書館能力者だね）  
ライブワード

槍を構えて、二人を睨む。

なのはちゃんも状況は飲み込めてなかつたみたいだけ、一応構えた。

「…………同じロストロギアの探索者、か」「そうだね…………けど一方はそんなに強そうじゃないし、あの動物の姿を取つている魔導師も敵じやない、けどあと一人は……」

「ああ、一応実力はあるようだ」

「人は何かを話しているけどよく聞き取れない。多分、男の子の方はわたしじゃなきゃ相手できない。だからなのはちゃんは自然と女の子の方を相手にすることになりそうだけど…………」

「なのはちゃん、もしかしなくても戦いになると思つけど……・大丈夫? 相手はこっちより場数を踏んでるよ」「えと……・・・・・多分大丈夫」

「…………はあ、四年前の不安が実現するなんて。ちょっと最悪かも。」

「まあいい、あちらの足止めは任せろ、お前は早く封印を」「…………うん、気をつけて」

「向こうが戦闘体制に入った!」

「《なのはちゃんは女の子の方を！ちょっとだけでもいいから足止めして！》ゴーノくんは隠れて結界の展開と封印の用意！」

「《分かった！》」

「《任せて！》」

「《任せて！》」

念話で短くそれだけ言つてから、わたしは男の子に突進。突き飛ばして、なのはちゃんと離す。

「悪いけど、あの子に手出しあせるわけには行かないつのはー。」

続けざまに大きく槍を振つて、叩き付けた。

けど男の子は鎧のない刀で受け止めてはじき返してきた。一瞬体制が崩れたけど、すぐに立て直して、突きを繰り出す。

男の子はなれた体裁きで避けた。

やつぱり、強い！

一旦距離を取つて、睨みあう。

「…………あなたも記憶図書館の？」

「ああ、そうだ」

相手は意外にあつたり肯定した。

「わたしは亜桜桃香！管理者は藍桜！」

「…………俺は沢城雪斗、管理者は闇サワと暗サワ」

名乗ると、相手も名乗り返してくれた  
雪斗くん・・・・・・・・・・か。

「ちやんと名乗ってくれるんだね？」

「前世では武家出身だったからな、名乗つたら名乗り返すが礼儀だ」「なるほど・・・・・・・できれば戦いたくないけど、そういうわけにはいかない？」

「ああ、お前とあの子を戦わせるわけにはいかん」

ちょっと厳しそうな子だけビ、『戦わせるわけにはいかない』ってことは、一応実力は認めてもらつてるってところかな？

「殺しはせんが…………多少の切り傷は勘弁願いたい！…」

雪斗くんはそう叫ぶと、居合い斬りの構えを取つて、走つて……。

……つて速つ！

なんとか槍で受け止めたけど、一撃も重い…………  
きつとそうとう鍛えていたんだろうな。

これは……きつい戦いになるかも。

「つ閃空裂波！…」

「縦牙一閃！…」

槍を持つて回転するけど、縦一閃で止められてしまつ。

「裂波拳つ！」

「しまつ…………ああつ！…」

大きく突き飛ばされて、地面を転がる。  
その時、

「桃香！…？」

「なのはちゃん！それに何でネコさんが…………！…？」

「桃香さん大丈夫なん！…？」

…………待つて！……ちよつと待つてよ！…

何でいるの！…？

「アコちゃん…・すみかわちゃん…・せやしかわさんです。」

わたしの変わりに名前を呼んだのはなのはちゃんとだつた。同時こ現象が女の子からうずつてこまつ。

どうやら、彼の隠す目的が何であれ、それを見逃すほど憂い

持つていた黒い鎌の金色の刃を飛ばした。

なのはちゃんとはどうさにシールドで防ぐけど……………って

! !

「みんな危ない！！」

刃がアリサちゃん達への直撃コースへ。

やつ。最悪やつだよ！

立ち上かゝて傍へ驅け落ハシマシす。

I am the born of my sword.

アリサちゃん達の前にヨーリさんが現れて、呪文を唱えてから手を前に突き出した。

すると七枚の花弁が出現して、刃を防ぐ。

卷之三

「アーティスト!?

「何がどうないのよ！」

慌てふためくアリサちゃんとすずかちゃんと笑いかけてから、ゴーリさんは女子のを見て、

「ちょっととちょっとお嬢さん？事故とはいえ一般人がいるときには攻撃つてどうよ？」

へらへら笑いながら、そう言った。

「まあ、お子さんだからってことで一つ、おねーさんうだけど、ちっちゃん子責め立てるほど酷でもないから」や～ｗｗｗ

そう言って、人差し指をクイクイと動かす。

明らかに挑発しているのが目に見えた。

女の子は少しむつとしてから、攻撃対象をなのはちゃんとゴーリさんに戻り。

鎌に再び刃をつけて、斬りかかる。

「うーん、速さじゃ一人前だね～…………けど、防護は三流だ」

ゴーリさんはいつの間にか女の子の腕を掴んでいた。  
そして思いつきり投げ飛ばしてから、追撃を加えるために走り出した。

雪斗くんは、女の子が危ないとと思ったのかな？  
刀を抜いてから、ゴーリさんに向かっていった。

ゴーリさんは軽く飛び上ると体を回転させて吊りつけるような蹴りを。

雪斗くんは刀身に衝撃波を纏わせて、

「崩襲脚つ！！！」  
「魔神剣つ！！！」

どんづと爆発。

ユーリさんが飛ばされてきたけど、うまく受身を取つたので無事。雪斗くんは所々怪我してたけど、大丈夫みたい。

「女、男キ・・・・・・・・・・・・

「問題ない、それより帰ろう、目的は達成した」

雪斗くんはそう言って、手を見せた。

「・・・・・あ!?」

「シニユルシードか！？」

「そんな！いつの間に封印したんだ！？」

驚くわたし達を他所に、雪斗くんと女の子は帰つていいく。  
その時、一瞬女の子が振り返つて、

「・・・・・『めんね』」

と呟いた気がした。

ネコを見ると、元の大きさに戻っている。

簡単な治療術を傳えてから、さがみはに通じた。

「洗ふやうにしちゃべってもひつわよ。」

・・・・・なんでだの、口は動いてないはずなのにわざ言つてる気がした。

s i d e 雪斗

「大丈夫か？」

「うん、投げられただけだから、どこも痛くない」

認識阻害をかけてから帰っている途中。  
彼女に安否の確認を取った。

たしかに見たところ外傷はない。

あの『ユーリ』と呼ばれていた奴のいつたことは本当のよつだな。  
容赦がない部分が見受けられたが、年下を傷つけるほど冷酷でもないよつだ。

「ユキは？あいて、強かつたでしょ？」「

「ああ、だが今はこちらが勝てるな、まあギリギリで、だが」

乱入者によりあの『桃香』といつ少女の戦い方は詳しく見れなかつたが、実力はかなりのもの。

治癒術を使つてゐるところも確認できたから、おそらく中衛に立て前衛をサポートする戦い方だろつ。

彼女と戦つた『なのは』という子については・・・・・・経験が無さ過ぎる、といったところか。

多分、最近になつて魔導師として活動し始めたのだろつ。だが潜在能力はかなりのものだ。

いつか彼女を打ち負かしてしまつのではないだらうか？

「《あーあーあー、マイクテス、マイクテス》」

・・・・・・・・思考に漫つていて、わざとふせけた念話が届いた。

声色からじて、『コーリ』だろつ。

「《移動中、あるいは団欒中失礼》wwwわたくし、コーリ・ローウエルと申しますwww」

・・・・・・・・ぜんぜん『失礼』といつ氣が伝わつてこんのだが。

「《えつと、今念話してゐる・・・・・・・・》」

「《簡潔に述べる、敵か？味方か？》」

なんだかしゃべらせてると本題に入らなさそうなので、やつが何か言つ前に割り込んでやる。

コーリは念話の向こうでうなつていたが、すぐに「まあいいや」と開き直つた。

「《とおどき味方、ときどき敵、かにや～WWあたしゃ近所から『爆弾』消えればなんでもいいから、そちらさんが劣勢だつたらそちらさんにつくし、逆にあちらさんが劣勢だつたらあちらさんにつくよ～WW?》」

「《・・・・・とこひ」とせ、基本傍観しているだけで、特に手出しがしない、と?》」

「《正解!そりこいつわけだから、そこそといじめたりじへいや～WW》」

そりこいつとゴーリは一方的に念話を切ろうとする。

だがそりはせせんぞ、聞き出すよじがヨほどあるからな。

「《待て、貴様は記憶図書館能力者か?》」

「《前者に暇だから一応待つよ～ん?後者に関しては再び正解WWあたしの管理者オーナーは暗羅つてえのつか、なんで分かつたのよ?実はその辺にいる魔法使いさんつてあるにゃよん?》」

「《貴様言つたな?『そちらさんが劣勢だつたらそちらさんにつくし、逆にあちらさんが劣勢だつたらあちらさんにつくよ』と?》」

「《あーつよ、言つたね》」

それが何か?と聞いてくるゴーリ。

「《貴様は何故『どちらかが劣勢になる』、と予想できる?普通なら有利なほうにつくんだろ?》」

「《・・・・・あー、なーんとなく分かつた気がする、つまり『どっちかが劣勢になる』って分かつてなきや出来ない発言だと?》」

「《そうだ》」

向ひつで、今度は納得したよつて唸つてから、

「《おつと、それじゃああたしはそろそろログアウトよひし? もり  
き割り込んできた嬢ちゃんたちがもう待つけれないみたいでさ~ わ  
わわ》」

「《。。。。承知した。。。。最後に言ひておく、敵に回  
つたときは密赦せんからな?》」

「《おおー怖や怖や わわまあ了解だで~ わわ》」

それじゅつ、と言つて奴は「ことここと一方的に念話を切つた。

「ユキ、どうしたの? さつきから黙り込んで。。。。」「  
「ん? ああ。。。。なんでもない、ただこれからのことを見  
えていた」

そういうて、彼女の頭を撫でる。

彼女は気持ちよさそうに目を開じた。

## 第十九話死神さんが出てきた時点で、イラギュラーには気をつけましょ？（後書き）

というわけで三人目転生者の登場でした！

設定は待て次回ということで。

一番苦労したのは飛鳥の『熾天覆<sup>ローアイアス</sup>う七つの円環』の部分。

なんでルビに変換されないのか・・・・・・onz

それではへへノシ

## 第一十話温泉、相談、戦闘（前書き）

遅くなりました。第一十話です。

何だか話が長くなっている上にグダグダになっている気が・・・。

## 第一十話温泉、相談、戦闘

妹を起こさないように気をつけながら、そつと部屋に入り込む。極力足音を立てないようにして、ゆっくりゆっくり、ベッドで寝息を立てる彼女の傍らに立つてから、手のひらを上に向けた。

「…………ん、準備おく?」

ああ、出来ている。

瞬間、あたしの手の中に拳より一回り大きくて赤くて、丸い『宝珠』を取り出して語りかける。

『宝珠』は一瞬輝いてから、思念通話であたしにOKを出してくれた。

「うー、じゃあ始めまそ?」

了解した。

そつやつて、妹の左手に『宝珠』を入れた。

side なのは

遂に始まつました、『ゴールデンウイーク!!

ところ訳で、わたし達家族含めるみんなで温泉に向かっています。  
お父さんとお母さんも、今日はお店を若い人たちにまかせて、休日  
を満喫するつもりみたいですね。

「それにしても、本当にあなたのね～魔法って」

関心したように車の中で呟くアリサちゃん。

実はこの間、アリサちゃんとすずかちゃんに「魔法がばれちゃつたん  
です。

その時一緒に現場にいたコーセン曰く、

「なつたもんはなつたもんでしゃーないだしょ、」の際全部お話し  
ませw」

つてことで、ユーノくんのこととか、ジュノルシードのこととか、  
色々話したんだ。

もちろん一人とも最初は驚いてたけど、ちやんと信じてくれて・・・

ちょっと嬉しかったなあ。

あ、そうだ！

温泉に向かっているメンバーは、わたしとわたしの友達一同と、す  
ずかちゃんのお姉さんの田村忍さん、それとファリンさんとノエル  
さん。

ちなみにユーノくんはバスケットに入っています。

そして・・・・・

「はやてちゃんは知つてたんですね?」

「うん、実際にいくつか使えるけど、念話・・・・・でいつもよりトレパシーゅうた方が早いね・・・・・と、ちょっとした射撃くらいしかできひんのよ」

はやてちゃんとユーノさんのハ神家!

「一人とも身寄りがな」「こと」「じやあ一緒に!」ってお父さん達が誘いました!

ちなみにユーノさんは桃香ちゃんは忍さんが運転するほうの車に乗っているので、はやてちゃんとは離れているのですが、多分大丈夫だと思います。

近場で一泊、のんびり温泉に漬かって田舎の疲れを癒そうと云つて、高町家の旅行プランとしてはいつものことです!

### side 飛鳥

さて、あたしとはやはては高町家の畠さんの家族旅行にお誘いを受け、同行している最中です。  
あたしはともかく、はやはてにものんびりしてもらいたいですね。  
ましてや行先は温泉だ、足に効くんじゃないかな?  
・・・・・まあ、そんなんじゃ治らないこと知つてるんだけど  
や。

ほら、いつのまにか気持ちが大事とか言つじゃないwww?

ところ訳で気軽に楽しむつゝ思つてゐるぜ

「コーリちゃん、桃香ちゃん、やんわりつから準備してね？」

「あ、了解です」

「分かりました」

ちなみにあたしと桃香ちゃんはすずちゃんのお姉さん……忍さん言うんだけど、その人の車に乗せてもらつて。

・・・・・別に、高町家の車がいっぱいぱいで乗りきれなかつたつて訳じやないんだからね！？

つげフン！－閑話休題つと。

まあそんなこんなで、あたしは降りる準備をした。

といつても、軽く広げてたメモ（内容は秘密）を貼付けるくらいだけどにや～

なんかそれだけじゃしつくづくなないので、無意味に姿勢を正してみた。

「そーいや桃香ちゃん、これから行くところつて……」

「うん、海鳴温泉だよ」

「そつかあ、そーいやあたしゃ温泉つていつたことねえや

「それじゃあ、はやてちゃんも今回が初めてなのね？」

「そーゆーことになりますね～」

まあ、前世では何回か入ったことあるんだけどね。

それなりに気持ちよかつたけど、結局効果が実感出来なかつたって  
いふ・・・・・。

「お、あれつすか？」

「やつだね」

ひみつび遠くの方に、施設が見えてきた。

side 桃香

温泉宿に着いて、チェックインをしてから部屋に入る。  
そしてちょっと早いけど、皆で温泉に入ることに！  
なので、みんな着替えを持って脱衣所前に集合している。  
ちなみにはやてちゃんは美由紀さんが抱っこして連れてきた。

「わざわざありがとうございます」

「すみません、ほんとならあたしが抱っこしたんすけど・・・」

「いいくていいくて、子供なんだからもづきよつと年上頼つていい  
んだよ」

申し訳なさそうにお礼をいうコーリさん、はやてちゃんとい、元気な笑いながら答える美由紀さん。  
確かに、コーリさんはともかく、はやてちゃんはもうちょっと頼つてもいいと思うなあ。

全員そろつたのを確認してから、お風呂に入つていいくつと、そうだ。

「なのはりやん」

「つる~」

「れゅうー~」

「はこ恭也わんむのじく~」

「あ、ああ」

「え? あ、ああつー?」

あ、すみません、単語だけじゃ分かりませんね。  
わたしがやつた動作を言葉で描写すると・・・・・。

なのはちやんの名前を呼ぶ 体<sup>い</sup>と振り返るのはちやん やつ氣  
無くコーコーくんを取り上げる そして流れるように恭也わんに渡す。  
とこづ感じ。

「ちよ、ちよつとー桃香ちゃん!」

「気持ちは分からぬでもないけど、コーコーくん一応男の子だよ?  
だったらわたし達じゃなくて恭也わん達の方がいいと想つな

「で、でもつー!」

「まー、こーんじやこーにのん~?」

ほっぺたを膨らませて反論するなのはちやんをなだめみつこ、元気な  
ーつさんが話に入ってきた。

「姿は動物とはいへ、コーコーくん一応健全男子なんだからそー?」

まだ反論したれやつこ、コーコーくんを見るのはちやん。  
だけどさすがに諦めたみたい。

恭也わんの方を見て、

「じゃあ、お願ひね? お兄ちやん

「ああ、まかせろ」

「それじゃ、あたしらも入る? ザー? さすがにこれ以上待たせるわけにもいかないからさ~ わ~」

ユーリさんの提案にうなづいて、脱衣所に入つていった。

(よかつたですねユーリさん、淫獣回避おめでとうございます)  
(もう、そう言わないの!)

### s i d e ユーリ

た、助かった・・・・・・!

確かに今は動物の姿になつてているとはいえ、やつぱり女湯に男が入るのはどうかと思つていたし・・・・・・。  
かといってあそこで『人間だ』って言つても信じてもらえなかつた  
だろうしね。

桃香には後でお礼言わないと、

「それじゃあユーリ、俺達も入るか?」

「あ、はい!」

そつやつて僕は、恭也さんと一緒にに入ることになった。

「そうだ、ユーリ」

「？は？」

「今は密は俺達だけだ」

「あ、そうですね」

確かに、僕達以外のお密さんとすれ違つてないなあ。  
でも何の関係があるんだろ？

「というわけで、『戻つたひびつだ』？」

「…はい、分かりました！」

そういうひとか。

さすがにまだ全快していないけど、元に戻る分には問題ないから・  
・・・・・。

目を閉じて、自分の下の姿をイメージ、イメージ・・・・・。  
緑色の光に包まれて、僕は元の『人間』の姿に戻つた。

「ふう・・・・・・よし」

「それが本当の姿か」

「はい、最初に会つたときも言つたと思つのですが、負傷が酷くて・  
・・・だから回復しやすいようヒリヒリレットの姿をとつていたんで  
す」

来ていた衣服を脱ぎながら、恭也さんから洗面用具を受け取つた。

「その辺は桃香から少し聞いた、確か遺跡の発掘をしている最中に  
ジユエルシーードを見つけたんだろう？それで護送を頼んだ船が沈没  
したとか」

「ええ、それで責任を感じて、この世界に来たんです  
「なるほどな」

浴場に入った後、恭也さんに日本のお風呂のマナーを教えてもらひつた。

s.i.d.e なのは

ユーノくんと一緒に入れなかつたのは残念だけど、確かにちょっと強引だつたかも。  
後で謝らなきや。

「温泉つてええなあ～」「  
「でしょでしょ～？」

隣では、はやでちゃんとアリサちゃんが楽しそうに話して、そのまま隣ですすかちゃんが笑つている。

少し離れたところでは、桃香ちゃんとユーロさんと、わいわい回り回りで、お母さん達が話していた。

・・・・・

「《ねえ、ユーリさん》」「  
「《はいはい～、何かご用かにゃ？なーちゃん》」  
『《…………唐突で悪いんですけど…………その、『人殺し』つてしたことありますか？》』

何でだるい。

「の間の木の」と、桃香ちゃんじやなくて、コーツちゃんと話したらすつきりする気がした。

何だかみんなに聞かれたくなつたので、念話で話しかける。

「《あるよ》」

「《やつぱりやつですね、普通そんな…………ってええ！？」

『』

なんだかすゞへ重要なことをあつせつ答えてくれたの――！

「《回数的に一回ぐらい、人数的には…………あ、数えるの面倒だ》」

「《……………そ、なんですか》」

「《まあ、一回ともそういうなきや救えなかつたしね～》」

「《え…………?》」

「殺さなきや救えなかつた」って、どいつうことなんだらう…………。

「《一回田はやー、転移の失敗でたまたまだり着いた世界で、悪い人たちに現地の動物がいじめられたのよね、それでフツチンしちゃつて、やくつと》」

…………言ひ方は軽いけど、その時はどんな気持ちだつたんだひつ。

「《んで、一回田は同じ世界で、腹うしりえしようと思つて立ち寄つた先の村を襲つてた盗賊団にこれまで普ツチンして、それでもたらやくわくつと》」

「《……………どんな気持ちでしたか?》」

「《気持ちも何も、ビビりとも一一番最初に思つたのが『それのみ

ろ』だったね》」

「《なんとも思わなかつたんですか?》」

ちよつと酷い気がするナビ・・・・・・。

「《頭はね、体は結構限界だったみたいでさ、翌日吐いたのよこれ

が》」

そう言つてへらへら笑うコーリさん。

・・・・・でも、

「《やつぱり、きつくないですか?》」

「《まあ全然つていつたら嘘になるかもだけど、特に何も思わない  
ね、さつきも言つたけど、そうしなきや今頃もつとたくさんの人や  
動物が苦しんでたんだから》」

「仕方ないのよ~」と、コーリさんは言つた。

「《・・・・・やつぱり、コーリさん強いです》」

「《やん強いんじゃなくて、そつまつ神経が無いつてだけの話よ  
ん? そういう点では、おねーさん、なーちゃんがうらやましいけど  
にや~》」

「《ふえ?》」

ちよつと意外・・・・・・。

「《だつて、おねーさんは人一人死のうが何にも感じないけどさ、  
なーちゃんはちゃんと苦しんでるじゃん、赤の他人の為に怖がつて  
るじやん》」

「《…………》」

「《そういう『優しさ』ってえの？大切なと思うよ》」

「…………『優しさ』、かあ。

「《戦うことに関しても、人殺しに関しても、ある程度の恐怖は持つてた方がちょうどいいと思うにゃ WWW》」

「《…………はい》」

「とにかく」とユーリさんは続ける。

「《死んだ人間は生き返らないってのは、みんな知つてることだから、なーちゃんは間違つてないよ》」

ユーリさんはそういつて、わたしに笑いかけてくれた。

「《…………そうですか、ありがとうございます》」

「《いいのいいの WWW》」

「《あ、あのつ》」

最後に、気になることを聞いてみる。

「《最後に教えてください、何でユーリさんは人一人死んでも何も感じないんですか？》」

「《ああ、そゆこと？簡単簡単 WWW》」

「《感情がないからだよ》」

side 雪斗

現在、俺と彼女らはジユホールシードを探るために、とある温泉宿の近辺に来ていた。

今は俺の隣で、彼女が意識を集中させてくる。

(しつかし、持つたいねえことするなあお嬢も、せっかくの温泉だ、ゆづくればいいのによ)

(まあ、『母親』があんなでは、彼女も頑張りやるを得ないかと・・・)

・・・・・いいえ、この場合無茶ですね

(言つてやるな、闇、暗<sup>アン</sup>、どつぼにじろじろジユホールシードは回収しなければならないものだ)

その様子をみて、どこか残念そうに言つて闇サワと暗サワ。  
ちなみに、この二人は俺の管理者オーナーで、闇サワを『闇』、暗サワを『アン暗』と呼んでいる。

(ま、そりなんですけど)

(俺としちゃ、この間の田木みたいにでかいのが出てくれたら面白いけどな、痛めつけがいがありそりやお)

さらばに補足をいれると、暗は常時敬語の一般常識者、闇は超うだ。『ア』ではなく『超』であるところがポイントである。

「…………あ」

会話が一区切りした時。  
ちょうど彼女が顔を上げた。

「見つかったか？」

「詳しい場所までは無理だつたけど……だいたいのところな

がら

そう言つて小さくため息をつく彼女。  
よく見ると、額は汗でびっしょりになつっていた。

「…………お前も一緒に入つてくれればよかつたのに

先に温泉に入つていった仲間　　アルフといつのだが　　を思  
い浮かべながら、そつと言つてみる。

しかし彼女は笑つて、

「うん、でも今はジュエルシードを優先…………？」

言葉が途中で終わったので、何事かと思つたが、ジリヤーのアルフからの念話らしい。

つかの間黙り込んで、小さく頷いた。

「アルフからだろ、何だつて？」

「こ」の間のあの子達と接触したつて

あいつ・・・・・見た目どおり大胆なことするなあ。

「ほう、それで相手はなんて？」

「それが・・・・・」

「こ」の酔っ払いですかあなたは、人違いくらいなら結構ですけど言つだけ言つて爆笑つて、あなた喧嘩売つてるんですか？ここまでくるととばっちりもいいところですよ。

「・・・・・だつて」

彼女は若干涙を溜めて震えている。

しかし・・・・黒いな；

「だ、誰がそれを言つたつて？」

「えつと、この前コキと戦つてた人だつて

・・・・・桃香か。

(彼女は怒らせないほうがいいようですね)

(だな、その内もつとおつかねえ」と顔に出すんじや……)  
(あるいは……)

ちなみにこの間、子猫のようになつていた彼女を見て和んでしまつたのはここだけの話だ。

side 飛鳥

(にしてもだ、昼間の人さへあれアルフさんだよにや？)  
(ああ、しかし使い魔か)

会話の内容から察した人もいるかもだけど、アルフさんとあったの

よ。

え、そういう描写全然なかつたって？

原作とほほ変わらないから作者が描くのを面倒くさがつたのよ。

(そうだね……そろそろあの子らの誰か、呼ぶ? )

メタ発言せぬ重じてひと・・・・・。

ほら、よくこいぢやない、『田には田を』 つゝわ。  
つていう訳で、別の世界で待機させてる使い魔の内の一人を呼び出  
そつかつて話になつてゐる。

・・・・・・・・・ちなみに言ひと、『田には田を』 で有名な『

ハンムラビ法典』だけど。

本当は『田をつぶされたら、つぶした相手の田もつぶせられたれつー』  
つていう復讐の法律なのよね。

あ、ちなみにあたしらは部屋にいるんだけどにや。

うん、めちゃめちゃ広いわ~ www

思わずはやてと一緒にじろじろやつたよ、三往復くら。

晩御飯もおいしかつたし、現在子供組は寝室でお休み(つつても、  
あたしと桃香ちゃんは起きてるけど)で、大人組は隣の部屋で談  
笑中。

時間的にも、ジュエルシードがそろそろ発動してもここと思つけど

「《つ、なのは!桃香!ゴーツさん!…》」

にや～つて、発動したんかいつ！

ユーノくんの言葉に反応したのか、なーちゃんががばつと起きて、  
あたしと桃香ちゃんを見る。

そしてそのまま頷きあつて、アリサちゃんとすずちゃんとはやてを  
起こさないよう部屋を出て、なーちゃんはバリアジャケットを、  
あたしと桃香ちゃんは武装して、夜空へ飛び立つた。  
あ、ちなみに士郎さん達へは置き書きをやつておいた。

閑話休題。

しばらく飛行していくと、一筋の光が見えた。

一気に速度を上げて近寄つてみると、桟橋のすぐ近くからその光が伸びているのが分かる。

そのまま側には・・・・・・・・。

「あ・・・・・」

「あの子・・・・・」

フェイト嬢と雪斗がいた。

すでに封印処理は済んだみたいで、あたし達が地上におつる頃には光は収まっていた。

「んじや、あたしは一応中立だから」

「分かつてゐる」

桃香ちやんと短い会話を済ませて、再び戻る。

ある程度高い所で戦いの行く末を見守る所とした。

side なのは

田の前に立るのは、この前すずかちやん家で出合った女の子。この子の田を見たときから、ずっと気になっていたことがある。

「あの時の魔導師・・・・・か」

どうして、そんな寂しそうな目をしているの?

「あ～ら～、あたし言わなかつたっけ?」

急に声がしたので振り向くと、昼間あつた女人人がいた。けど、普通じゃないってことがすぐに分かつた。

だつて、犬の耳と尻尾が生えてるんだもん。

「いい子は大人しくしないと、ガブツといくよつてね?」「やつぱり・・・・・・なのは、あの人使い魔だ!!」

女人を見て、ユーノくんが叫んだ。  
『使い魔』って確か・・・・・。

「そうさ、存在のためにご主人様の魔力を食らう、その代わりに守つてあげるのさ、命を懸けてね!!」

すると女人人は、全身から魔力を出して体を変化させる。次の瞬間には、女人の姿は狼に変わっていた。

「実質三対三、かあ、やれる?なのはちゃん」

真剣な表情でわたしを見てくる桃香ちゃん。

・・・・・・・・・この前みたいに勝負にすらならないと思つねび。でも、

「大丈夫!」

何にも出来ないのは嫌だもんね！」

「そっか、じゃあわたしはまた……」

桃香ちゃんは、あの子の隣に居る男の子（名前は雪斗さんだったと思つ）を見る。

「ユーノくんには、あの使い魔の人を頼んでいい？『なるべくなのはちゃんと離してね？わたしはともかく、経験上どうしてもこうち側が不利だから』」

「まかせて《わかつた》」

ユーノくんは真っ先に飛び出て、あの使い魔さんに向かっていきます。

何か仕掛けようとしているのを感じたのか、使い魔さんは毛を逆立てて、

「させると思つているのかい！？」

「させてみせるぞーー！」

二人の足元には、きれいな緑色の巨大な魔方陣。

「なつ、まさか転移魔法……」

使い魔さんが何かを言い切る前に、一人はどうとかへ消えてしまった。わたしはレイジングハートを構えて、目の前の子を見つめる。

「…………話し合いで、どうにか出来ないかな？」

「…………きっと、何を言つても無駄だと思つ」

何とか戦わないでの解決を提案するけど、ばっさり切られた。

「戦うしか、ないの？」

「そうだね・・・・・賭けて、互いのジュエルシー<sup>ド</sup>を一つずつ

女の子は言つなり、杖を鎌に変形させてわたしに突っ込んできた。  
わたしはとつさにプロテクションで防ぐけど・・・・・。  
一撃が重いつて、こうこうことなんだろうね。

卷之二

女の子はまた鎌を振る。

録はわたしの「**アケシヨン**」を壊して、わたしに迫ってきた  
思わずそれを腕で受け止めたけど…………。

電気をまとつてゐるー?

一瞬体中がしひれて、動けなくなる。幸いなのは非殺傷設定つてことなのかな?

けど、腕から少し血が出てきた。

女の子は一旦離れて、今度は電気で出来た発射体を撃つてくれる。  
わたしはそれにディバインショーターで立ち向かう。

「・・・・・・・バルディツシュ」

A sonic move

つ、女の子が消えた・・・・・・違う！追いきれない速さで動

いているんだ！！

証拠に、消えたすぐ後から攻撃が始まった。  
すぐにフィールド系のバリアで防ぐけど、一撃一撃が強くて、防ぎきれない！

そして急に女の子が目の前に現れて、鎌を振ってきた。  
まずい、首が狙われて・・・・・・！！

「へーい、そこまでねんww」

ガキンっと音がすると同時に、コーリさんの声が聞こえた。  
反射的に閉じていた目を開けると、刀に止められている鎌が見える。  
すると、レイジングハートが一回光つてから、

『Put Out』

ジュエルシードを一つ出した。

「レイジ・・・・・・」

レイジングハートにむかって思わず「何してるのー？」と言い掛け  
て、黙つた。

あの子わざと言つたもんね、「互いのジュエルシードを賭けて」つ  
て。

わたしは負けた方だから、ジュエルシードをあの子に渡すのは当然・  
・・・・。

「わざと主人想いのいい子なんだね・・・・・ありがと」

女の子は寂しそうな目を変えないままで、そう言つた。

ジュエルシードはゆっくり静かに動いて女の子のデバイスのコアに

入つていつた。

ユーノくんと桃香ちゃんの戦いも一段落ついたみたいで、わたし達のまづに走つてきつた。

「……………」ひづらの勝ちか

「わづがあたしのご主人様！」

冷静に書つ雪斗さんと、素直に喜ぶ使い魔さん。  
女の子は一人に向けて小さく頷いてから、

「……………帰れ！」

女の子が離れていく。

ジユエルシードを探し続けていれば、またぶつかる事になるんだろう。

・・・・・でも、やつぱり何も分からぬまま争つのは嫌だ。

「あのひ、まつてーーー！」

思わず女の子を呼び止める。

どうしてだか、自分で分からぬ子だ……。

「あなたの、名前は？」

これだけは聞かなきやいけないと思つた。  
女の子はわたしを少しだけ見つめてから、

「……………フロイト・テスター・ロッサ」「フロイトちゃん…………わたしは」

女のト、フニイトひやんはお前を叫びてくれた。

だからわたしも駆け乗るつとするけど、フニイトひやんはそれより早く、この場から帰ってしまった。

・・・・・また、会えるかな？

## 第一十話温泉、相談、戦闘（後書き）

この小説のテーマは『原作破壊』。  
というわけでユーノくん淫獣回避です。  
ユーノファンの皆さん、よかったですね（笑  
ついでにフラグをまた一つ立てました。  
それではへへノシ

## 第一十一話レベルアップと『炎姫』（前書き）

全開、あ、違った、『前回』更新した後に気付きました。

雪斗の設定のつけてなかつた・・・・・！ orz

あとがきに乗っけています！

それでは十一話じゅうぞー！

追記：11／24、ちょこつと修正。

## 第一十一話 レベルアップと『炎姫』

槍を振ると、刀で起動をそらされる。

それでも、少し傷をつけることは出来た。

すると相手は刀を槍に交えたまま、刀身をこちらにずらしてきた。刃は少し刃こぼれしながらも確実にわたしへ迫ってきている。

対するわたしは無防備、唯一の武器は刀で防がれている。  
流石にまずいと思って、とっさに口を閉じた。

「……………？」

とこゝりといひで口が覚めた。

呼吸が乱れて、のどが苦しい。

無理矢理整えてから、とある戦法が頭に浮かんだ。

「ねえ、桃香ちゃん・・・・お願いがあるの」

「? なあに?」

## 温泉の一併から数日後

なのはせやんが突然真剣な表情で語しかけてきた  
うばか二つ亡しげ居るの仕道場。

この間の温泉

て大変だつたから。

木に挂ける簡単方。

だから思いついた戦法を練習していた。

その素振りを一旦止めて、なのはちゃんの話を聞く体制を取る。

卷之二

「・・・・・・・・はい？」

烹外がモ

それなのに槍を教えてと言つて来た。

גָּדוֹלָה

理由を聞いてみる。

「…………この間、温泉でフロイトちやんと戦つたとき、何も出来なかつたから…………あのときゴーリさんが割り込んできてなかつたら、わたし、多分ここにいない」

の子達と初めて会った時、いつたでしょ？あなたとフロイトちゃん

んじや、経験の差がありすぎるって」

「もうかもしれないよ・・・・・・・・・けど、強くなりたいんだ、フロイトちゃんと話し合つためにも、あの大きい木の時みたいに死ぬ人を出さないためにも」

「・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

力が届かなかつたり、何も出来なかつたりつてこりとぼど、辛いことは無いもんね。

だけど・・・・・・・・・・・・

「どうするの？ジュエルシードも探さなきゃいけないのに

「それはボクがやるよ、一人でも出来るから・・・・・・・・・・

そういうのはユーノくん。  
でもそうはさせないよ？

「駄目、ユーノくん、まだ完治していないでしょ？一いつのもなんだけど・・・・・・・・・怪我人なんだから自重しなさい、今のあなたは足手まといだよ」

「うぐつ・・・・・・・・で、でも、どうやってなのはの実力をあげるの？桃香、教導の経験ないし、いつまたああの子、フロイト達が来るか、分からんなんだよ？」

うーん・・・・・そこなんだよねー。

(主、ちょっと)

?藍桜・・・・・・・?

(どうしたの?)

(ええ、実は面白いものを見つけまして、今データを出します)

田の前にウインドウが現れる。

これって・・・・・・・・。

side 飛鳥

「あ、せや、おねーちゃん  
「ん? 何よ?」

さつてと、あの温泉でドンパチから数日。  
あたしもはやても無事我が家に帰ってきて、現在リビングで一人そ  
ろつてのんびりしてゐる。  
で、はやてが何か思い出したらしくて、話しかけてきた。

「あんな、最近変な夢見るようになつたんよ」

「夢？」

「うん、なんか変な広場のど真ん中につちが立つてるねん、すごいなー思つて走り回つたり、飛び回つたりしてると、足元になんかの魔方陣が出てくるんよ」

「それってどんな？」

するとはやては白い紙を取つてみると、鉛筆でその魔方陣の大雑把な形を描いてゆく。

「こんな感じの、なんか真ん中辺りに翼っぽいのがあるんよな」

「ほうほう、それで？」

「そしたら、魔方陣の縁いうのかなあ？そこから火みたいなんがふわーっと湧き出でくるんよ」

そつこいつとまやては、「ぶわーっ」の部分でまだか細い手を命つぱい広げた。

うん、可愛い、萌え。

・・・・・げふん。

「でもな、その火熱く無いんねん、あ、熱がないってわけじゃないよ？ただなんというか、こう・・・・・・あつたかい？なんかそんな感じなんよね」

「ふーん、それでその後どうなるのよ？」

「うん！でな、そのあとその火が人の形になつてな、何か話しかけてくるんよ、けど・・・・・・全然聞こえへんのやあ～」

はやては頭を抱えて、おでこをテーブルにあてた。  
あたしは苦笑いしながら。

「でも全くつてわけでもないじゃら？ちよつとも聞き取れた部分

とかは？」

『アーニー』、ねえ

「うん、何なんやうひね?」

「おお、あたしもせめていいでしょ？」  
と喜んでいた。

(『あいつ』がはやでになじみ始めたよつだな)  
(だね、あとはあの子が覚醒めるのを待つばかり、か)

side なのは

「なのは?何かあつたの?」

「やつだよなのせねやん、元氣なこよ?」

「ふえ？…………あ、アリサちゃん、すずかりちゃん

桃香ちゃんに槍を習い始めてから三日ぶり。

学校で、机に突っ伏してると、アリサちゃんとすずかりちゃんが話しかけてきた。

「…………」の間のあの子の「」と？

「…………」やはは、やつぱつ隠し切れなかつたか

体を起こして、一人を見ながら、

「…………完敗だつた、手も足も出なかつたよ」

「そ、そななの？」

「うん、何と言つか…………経験の差がありすぎるんだよね」

今わたしは、苦笑いをしているんだろうな。

アリサちゃん、すずかちゃんはちょっと寂しそうな顔をして、わたしを見ている。

・・・・・ちよつと暗くなつちやつたかな？

「あ、でもね、最近桃香ちゃんに槍を習つてゐるんだ、これでちよつとは敵えばいいと思うんだけど…………」

「でも相手は強いんでしょ？大丈夫なの？」

「そうだよ、怪我とかしたら…………」

「まあ、やらなきや分からないよ、それに前より戦えると思つた

心配してくれるのは嬉しいけど、わたしだつて負けるわけにはいかないもんね。

「むう…………あ、無茶だけはしないでよね？」

「いやはは、分かつてゐる

「怪我には十分気をつけて」

「うん」

s i d e   ? ? ?

夜。

ビルの上にて『爆弾』を捜索しつつ、主様を待つてゐる。  
しかし・・・議論の末くじ引きで決めたとはいえ、残してき  
たみんなには少し申し訳ありませんね。

むこひに戻る時はお土産でも持つて行きますか。

「ごめん、お待たへ

「主様！」

思わず膝をつきかけましたが、何とか抑えて一礼だけですませる。  
主様はこういった『固いこと』は苦手なおかたですからね。

「『めんにや』待たせちゃって」

「いえ、先行して安全確保するのも役目です」

「あははー、ありがと」

そういうつて、気さくな笑顔を見させてくれました。

・・・・・・・・おや? そういえば幾ばくか曇っていますね?

確か予報では一日晴れ・・・・だつたはずですが。

それに・・・・。

「魔力を感じるねえ」

「はい」

時々ですが、一瞬暗雲の中に稲光が走るのが見えます。

おそらく、魔力変換『電気』を持つている者の仕業と思われますが・

・・・・・。

「主様、心辺りは?」

「あるある、ありすぎて困っちゃうwww」

困る、と言つてゐる割には余裕そうですが・・・・それが主様ですから、仕方ないでしょう。つと、

「結界が展開されましたね」

「おうよwwwこの魔力はユーノくんだね、行くよ?」

「承知」

そして私と主様は、ビル街を跳んだ。

side なのは

ユーノくん、桃香ちゃんとジュエルシードを探してて、もうタイムアップかな? という時に、発動した。

雷を使って無理矢理発動させたみたいだけど・・・。魔力からして、フェイトちゃんじゃない、じゃあアルフさん? とにかく...ジュエルシードのところにいかないと!

「《桃香ちゃん! ユーノくん!》」

「《分かつてる!》」

「《いくよ!》」

「《うん!》」

念話で短く話してから、ユーノくんが結界を展開、わたしはレイジングハートを首元から取り出して、

「《いくよ!》」

『A.I.I r.i.bon t , m y m a s t e r』

「セーブトーアップ!」

桜色の光のあと、バリアジャケットをまとつて、空を飛ぶ。  
しばらくビルの間を進んでいると、向こうに青い光。

「見つけた！」

レイジングハートをシユーテイニングモードに切り替えて、砲撃をチヤージ。

そのまま撃つ！

「バスターッ！」

「ファイアッ！」

フロイトちゃんも近くにいたみたい。

金色の砲撃と、桜色の砲撃が、ジユエルシードにぶつかって、封印した。

ジユエルシードの近くに来て、わたしは見つめる。

「フロイトちゃん・・・・・・

「・・・・・・」

フロイトちゃんはただ黙つて、わたしを見るだけ。  
後ろからは雪斗さんとアルフさんが走ってきている。  
わたしの方からは、桃香ちゃんとコーノくんが来ていた。

「・・・・・」の間は、自己紹介できなかつたけど・・・・・聖祥

小学校三年生！高町なのは！」

聞いてくれていいと思つけど、もしかしたら聞いてないのかもしれない。

それでも、わたしの名前をあの子に伝えたかった。

「…………」

フエイトちゃんはただ黙ったまま、杖（多分バルティッシュショットで名前だったと思う）を鎌に変えて、斬りかかって来た。  
わたしは咄嗟にレイジングハートでそれを受け止める。  
それを合図に、また戦いが始まった。

s i d e 桃香

わたしが横一閃を繰り出すと、雪斗くんは縦一閃でそれを弾く。  
雪斗くんが突きを繰り出してくると、わたしは顔を横にずらして、  
槍でいたした。

しばらく金属音だけが続いてから、同時に距離を置いて、

「…………実力を上げたか」  
「じんぱんにやられて何もしないつてのもどうかと思つしね  
「なるほど」

せつかりて、また打ち合いが始まる。  
ふと、雪斗くんが視線を逸らした。  
その先にあるのはフエイトちゃんとなのはぢちゃん。

戦いつつ、一人を見てから、

「…………あの子も、動きが変わっているな？」

「やつぱり分かる？」「

今のわたしはきっと、いたずらっぽく笑っているんだひつ。  
雪斗くんを見ながら相手の出方を伺ひつ。

「あえて何も言わないけど、とうあえずわたしたちを舐めないでつ  
てこと」

「…………そうか、承知した」

「といひで」と雪斗くんは続ける。

「気付いているか？」

「…………うん」

『何に』と言わなくとも分かる。

わたしも雪斗くんも一点を見つめた。

「ユーリ・ローウィル…………といつたか」

「うん」

今回はかなり遠くにいる。

それに、隣には覚えの無い気配があつた。

仲間か何かのかな？

ここからだと、存在しか確認できない…………。

「まあ、とにかく邪魔しなければ俺は構わんがな」

「あはは、同感だよ」

と、会話が終わると同時に雪斗くんは切りかかってくる。

しかも、わたしの間合いに入ってきて、だ。

前にも言つたけど、槍はリーチが長い分、間合いに入られると防御が取れないって弱点がある。

熟練の人なら、そんなことが滅多に無いか、対策を立てているかしているんだろうけど、わたしは生憎素人。

そんなわたしに出来ることは、対策を立てるくらい。だから、

「ふつ・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・

・・・・・・ふふふ、驚いてる驚いてる。

相手の力を利用して、何とか弾き返してから再び体制を立て直す。雪斗くんは、わたしが片手に持つてている物を凝視している。

「・・・・・・・・短槍、か」

「そう、普通の槍に比べて短いけど、今みたいに間合いに入られた時には便利なんだよ？」

「なるほど、だから『舐めないで』か」

「そうだよ、けど、これだけで驚かないでよね？」

そう言つて、なのはちゃんの方に田をやつた。

## side フェイト

「やあっー。  
「はー！」

もう、何度もなのかな？

あの子の杖とわたしのバルディッシュが、また火花を散らしてぶつかりあった。

始めの内は、少し腕が上がっていると思つていたけど、違つ。これは少しどころの話じやない。

あのネコの時や、何日か前の戦闘とは比べ物にならない。

それに、誘導弾も打ち出してきた。

一体・・・・・この何日かで何があつたって言ひのー？  
また鎧迫り合いをした後、いつたん離れた。

「・・・・・いつたい何をしたの？」  
「そうだね、早い話・・・・・舐めないでってこと」  
「・・・・・」

本当に・・・・・何日か前に会つた時より強くなつてゐる。

「・・・・・始まは、コーコーくんのお手伝いってだけだつたの、  
それに桃香ちゃんだけに戦わせたくなかつたから」

ゆつくり、目の前の子は話しあす。

「だけど・・・・・ある時にね、わたしのミスで、たくさんの人

が怪我したの・・・だから、もう一度とそんなことが起きないように、誰も傷つかないために

・・・・・　目には、誰にも動かせない『想い』があった。

「これが！わたしの理由！！」

あの子はほつきり、  
そう叫んだ。

「フロイトちゃん！ あなたがジュエルシードを集める理由は何！？ わたし、何も分からぬままぶつかるのは嫌だー！」

・・・・・何でか分からぬ、けど・・・・・。

「おや、話してもこい氣がした。

・・・・・わたし

「言わなくていい！」「

突然アルフが叫ぶ。

「優しくしてくれて、理解してくれるような人たちの中でぬくぬく育ってきた奴に、話さなくていい！今のわたしたちの最優先事項は、ジユエルシードだ！！」

・・・・・ そうだ、わたしの目的はジュエルシードだ。

• • • • • • • •

「こんなところで、何を迷っているんだー！」

「確かにー。」

氣を引き締めて構えたとき、あの子が声をあげた。

「確かに甘ったれた子かもしれないよーだけどー！覚悟だけは誰にも負けないー！」

まっすぐな目を崩さないまま、そう叫んできた。

思わず、アルフも黙つたようだ。

その時だ。

ジュエルシードが、強烈な光を放つたのは。

free side

それは突然の出来事だった。

ジュエルシードが、眩い光を放つと同時に、辺り一帯がゆれ始めたのだ。

『地面』ではなく、『空間』が、唸りをあげて揺れている。

すると、本能的にそれをまずいと感じたのか、なのはとフェイトが

同時に動き出した。

数十秒と経たずに二人はジュエルシードのもとへ到着。

互いの杖をジュエルシードに向けた。

事が急だつただけに、二人は気付かなかつたのだろう。無理も無いかもしれない、ジュエルシードに触れたものは全て願いを歪んだ形で叶え、暴走してきたのだから。

しかしそれでも、『ミス』は『ミス』である。

「封いつああ！」

「封つうわあああ！」

突然ジュエルシードから発生した衝撃波で、一人とも吹き飛ばされた。

ジュエルシードの

二人はそのまま成す術無く地面に叩きつけられ、痛みに思わず体を縮める。

桃香と雪斗は、呆然とその光景を見る。  
どちらかが、ぽつりと呟いた。

「・・・・・まさか、次元震？」

痛い・・・・・・・・・・体中がズキズキする。

目を開けると、未だに光を出しているジュエルシードがあった。

・・・・・・・・このままほつといたら、また誰か死んじゅうのかな？

あの時みたいに？

・・・・・・・・・・マタ、タクサンシンジャウ？

「・・・・・・・・・」

立ち上がりつて、走り出す。  
行き先は、ジュエルシード。

フェイトちゃんも、同じように走り出していた。

手を伸ばす、ジュエルシードを掴む。

気付いたら、わたしもフェイトちゃんも、デバイスを持っていなかつたけど・・・・・・。

もう、関係ない。

両手で包み込んだ途端、手がすっごく痛くなつた。

「うああつ・・・・・・  
「ぐあ・・・・・・」

それでも、止めない。

また、誰かが死ぬなんて、また、あんな思いをするなんて・・・・・

。

「・・・・・嫌だ！」

ジュエルシードを握る力が強くなる。

「止まれ……………」

ふと瓶にした詰葉が、フリイトちゃんに重なる。

ジユエルシードの勢いはいつ無くなるか分からぬ。  
それでも、わたし達はやめない。

手が動かなくなつたつて構うもんか。

絶対、絶対に・・・・・・・・・。

「止まれえええええええええええつ！！！」

十九

呆気なく衝撃波が止まつた。

思わず、わたしもフュイトちゃんも笑顔になる。

けど・・・・・・現実は甘くないって、このことを言つんだね?

次の瞬間には、わたしもフュイトちゃんも、また飛ばされていた。

ジュエルシードの光はさつきより強いし、揺れも大きい。

『絶望』って言葉が似合ひそうだけど・・・・・。

でも、諦めたくない。

けど、体が動かない。

遠くの方で、アルフさんとコーノくんが叫んでいるのが聞こえる。

桃香ちゃんと雪斗さんは、動こうにも動けないみたいだ。

流石にもう終わりかなって考え始めた時だ。

ジュエルシードのすぐ側に、女人人が立つた。

真っ白なコートに、同じぐらい真っ白な髪の毛。

毛先は少しだけ桜色になっている。

その人は、腕を振り上げると、

「・・・・・封印術式『魔女狩り』、発動」

何かを呑きながら、ジュエルシードを殴つた。

その瞬間、光が収まる。

女人人はジュエルシードを手にとつてからわたし達を見て、

「主様より皆様へ言伝です、『ちょっと気が変わった、しばらく一個だけあたしに預けてくれないかい?』・・・とのことです

みんな、田を点にした。

free side

突然の乱入者に、一同は驚愕と警戒心を抱いていた。  
無理もないだろう、いきなりジュエルシードの暴走をパンチ一つで  
収めたと思ったら、『主からの伝言』でジュエルシードを持つてい  
くと宣言したのだから。

「ど、どういうことだ！？それが危険だつて分かっていっているの  
か！？だいたい！君の主つていつたい！？」

ユーノは焦り故の大声で、乱入者に問いかける。  
乱入者は全員の顔を見渡しながら、

「危険だと承知しています、故に皆様が集めているといふことも  
「だつたら・・・・・！」

反論しようとするユーノを乱入者は手で制して、

「ですが、主様としては毎回ドンパチやられるのもハラハラしてし  
まうそうで、今のあなた方の行為は、爆弾の傍で花火などの火遊び  
をやってくるようなものですから」

冷静にそう告げた。

ユーノはそれを聞き、「しまった」という表情になった。

「というか、十分な封印処理もせずに戦闘など、危険もへつたくれ  
も無いじゃないですか」

乱入者はあきれたように首を横に振る。  
一方のユーノは押し黙り、俯いてしまう。

「…………一ついいか?」

「ええ、答えられる範囲でなら」

そんなさなか、雪斗が手を上げた。

「あやまの主といつのは…………ユーリ・ローウェルか?」

「肯定、自己紹介をおくれましたね、わたしはヒノコ、主様より『炎姫』の肩書きを授かつた使い魔でございます」

乱入者、ヒノコはそう言つと、お辞儀をした。

すると今度は桃香が口を開く。

「今度はわたしから、ユーリさんの目的は?」

ヒノコは桃香に体じと向き合つてから、

「主様の考えはこいつです、まず我々がこの一つを預かります、そし  
てあなた方のジュエルシードの持ち数がそれぞれ10になつた時、  
互いのジュエルシード全てと我々が持つているジュエルシードをか  
けて、勝負をしようじゃないか、ということです」

それを聞き、一召を除く者達は納得の顔をしている。  
そう、『一召』を除いて。

「…………ふざけんな」

低い震えた声で、さつさつと話したのは、

「アルフ…………」

フュイトが、さみしげにさつさつと話す。

「フュイトは一個でも多く集めなきゃいけない理由があるんだ……！  
それをお前なんかに渡してたまるか……！」

「まう？では、あなたはこのまま何もせずにこいつへ戻つておきますが、今回一步間違えればこの世界がなくなつていたのかも知れないと、どうなつてしまえば困るのはあなた方では？」

「それでも構わないさ！あたしはフュイトが幸せになれるならなんだつてするつて決めたんだ……！」

感情に任せ、ヒノコにさんざん言い返すアルフ。

一方のヒノコは肩を少しあげて、戻してから、

「その心意気は立派ですが、あえて言わせていただきます、あなたのそれはただの駄々こねですよ？」

「つ・・・・・うるせー……」

ヒノコの挑発めいた発言に、とつとつアルフの堪忍袋の緒が切れる。するどい右ストレートがヒノコに迫るが、彼女は呆れたようにため息をつくと、慣れた足取りで体をすらり、左手で受け止めた。

そしてそのままアルフの力を利用して、後方へ投げ飛ばす。アルフは体制を崩すも、地面に手をつき、ばねの容量で立ち上がった。

そして再びヒノコに接近、アッパーを繰り出す。

ヒノコはそれをまたも簡単に避けた、

「精神に乱れがあるようですね、その程度で戦うなど……戦いを舐めているのですか？」

「お前えええつ……！」

再び振りぬかれるアルフの拳を、ヒノコは驚づかみにした。

「もうあなたの相手はしていられません、いい加減帰らねばお嬢様を心配させてしましますし……と、とりあえず、終わりましょう？」

刹那、アルフを掴んでいるヒノコの手が、熱を帯び発火した。

「ブラスト！」

「がつぐあああああ……！」

炎を纏つた一撃が、アルフの腹に直撃、そして派手に吹っ飛ばされる。

「アルフ……この……！」

大分回復したらしい。

フェイトがまだふらふらとする体で立ち上がり、バルディッシュをヒノコに向ける。

そして帶電した短槍を数本生み出して、

「ファイアー！」

ヒノコへと発射した。

咄嗟のこと故か、反応しきれなかつたヒノコは直撃を受けた。

「つづあ・・・・・・・！」

雷撃を受け、ヒノコは膝を着き倒れる。

だが、あまりの呆気なさにフェイトはポカンとしてしまった。ジユエルシードを拳一つで封印し、今まで自分の使い魔を圧倒していた相手が、雷撃で倒れたのである。

「フェイト！」

「あ、アルフー！ん、お願ひ！」

戸惑いながらも、ジユエルシードを手に入れる好機と判断。アルフに向かわせた。

「はいストップ！試合しゅーりょーーー！」

突然アルフの目の前に、軽い口調とともにコーリが落ちてきた。ヒノコを護るよろしくして立ち、刀の切つ先をアルフに向ける。

「主様・・・・・申し訳ありません」

ふらふらと立ち上がり、申し訳なをせつに頭を下げるヒノコ。コーリはくらべらと笑いながら、

「しゃーないしゃーないwwあなたの素体の弱点が電氣つてだけの

話だしょー？」

言いながら、ヒノコの手から落ちたジュークエルシードを拾い上げる。アルフの視線が鋭くなつた。

それを受けたユーリは考える素振りを見せると、徐にジュークエルシードをポケットに入れ、歌いだした。

「ポケットの中にはジュークエルシードが一つ」

歌いながら、ポケットを軽く叩く。

「もひとつ叩くとジュークエルシードが二つ」

ポケットから取り出されたのは、二つのジュークエルシード。

「へ？・・・・・えええええつ！…？」

思わずその場の全員が大声を上げる。

「とこりわけで、良い子の一人にプレゼント♪♪♪

そつぱうと、なのはとフロイト、それぞれに投げて渡した。

「んじや、おねーさん達はいいやないかわよん♪♪♪

ひらひらと手を振り、ユーリは夜空へと跳ぶ。ヒノコも一礼してから、ユーリに続いた。

「《ガーフセヒ》」  
「《ゴーリ》」  
「《んお~♪ひつたよお~一人セミ~?質問なら受け付かるよん~》」

『《あのもつ~つのジユヌルシー~ド、ビニ~で手に入れた?》』

『《ああ、あれ? 来る途中に拾つた》』

『《ひ、ひりつたあ?》』

『《おひよ~きちようどこ~こやーつて~? けどにや~あ~そだ雪斗ちゃん?》』

『《・・・・何だ?》』

『《あんたに聞する『予言』を一つプレゼントね~桃香ちゃんもそのときに介入しなきやだから、聞いててよん~》』

『《わたしも?》』

『《そそ~『あの子のママンとガチバトルッ~、そゆわけだから、雪斗ちゃん気をつけ~ね~?》』

『《あ、待て!~・~・~一方的に切つおつた~・~・~》』

## 第一十一話 レベルアップと『炎姫』（後書き）

飛鳥が最後にやつた予言は、最近気になつてゐる『大神』のウシワカヨリ  
というキャラを意識してみましたww  
それと、飛鳥の使い魔も出してみたり。。。

早速次回、ガチバトルです。

できれば黒之フルボッコまで行きたいな。

その間に劉汗の説教もハハハハ

沢城雪斗（12・男）

身長：男子の平均より遙かに上、中1でも通じそう。

管理者：鶴ナフ、  
オーナー

ライブラリ：記憶図書館、ソードマニア

詳細：記意圖書館の管製人格により故  
ライブライ

一  
人。

前世  
の

とする姿勢を持つ。

フェイトやアルフには、素性が分からぬ自分を拒むことなく受け

入れてくれた恩義を感じている。

そのためが、共に行動している」とが多い。

戦闘では、主に居合いや強力な足技でのダッシュを狙ってくる

絶妙な美術だけならほとんど負けなし  
オーナー

能力の關係一時一管理者が二ノ用

二〇、三愛生云、樂一、むかしの形體はがたつ。一。

伝染の原因は記憶図書館の管製人名が、前世の生  
ライブラリ

男と誤認したため。

一話更新することに、重くなっている件。orz  
今回なんて20KB記録したんだぜ・・・。

## 第一十一話「おつかれさん（前編）」

あけましておめでとうございました！  
ちょーっと『いろいろ』あつたとはいへ、更新が遅れましたことを  
お詫び申し上げます。  
それでは本編どうぞ！

## 第一十一話／おおかーさん

side 雪斗

「そろそろ、母さんに報告に行こうと思つていいんだ」「な、行くのかい！？」

あの次元震から数日。

フェイトがどこか暗い面持ちでそう提案してきた。アルフはかなり慌てた様子で、フェイトに寄る。

「うん、ジュエルシードもだいぶ集まってきたしね」「しかしフェイト、大丈夫か？」

・・・・・・・・・あの『母親』が、フェイトにまともな態度を取ると思えない。

「大丈夫だよ」

俺の問い合わせに、フェイトはただ笑うだけ。まったく・・・・・。

「無茶をしあつて・・・・・・」

「ん？ 何か言った？」  
「いや、何も」

「うん、だいぶ回復したね」

「ほんと…？」

「まだ『門の中』での練習は駄目、もうしばらくマルチタスクで練習だね」

「あいつ…・・・・・」

今、なのはちゃんはどこか不服そうに不満を漏らしながら思つてゐる。

思わず、『可愛いな』って思つてから、頭を撫でた。

あれから数日。

なのはちゃんの怪我もだいぶ治つて、生活には問題が無いレベルに達している。

最初のころはちょっと楽しかったな。

両手が使えないからって『あーん』をしてあげたら顔を真っ赤にして照れるし。

久々に一緒にお風呂にも入つたつけ?

けつこう懐かしい体験をしたもんだよ。

・・・・・ん?『門の中って何?』って?

それはね、

(こしてもちょっと驚いたかも、まさか『MAR』の『修練の門』  
が入ってるなんてね)

(ですがお陰でなのはの実力も上がっています、あわよくば、フ

イと互角になれるかもしません)

(やうだね、なのはちゃんがんばってるし、わたしも負けてられな

いな！

(はい)

『修練の門』の中は異空間だから、時間は現実の60分の1。

分かりやすく言つと、修練の門の中で60日いても現実ではたつた1日しか経過しないんだ。

だから手っ取り早く強くなりたいとき・・・・・つて言つたらちよつとあれだけ。

とにかく、現実で数日経たずに実力を上げることが出来る便利なアイテムなんだよ！

だからそのお陰でなのはちゃんもはじめに比べたら実力がかなり上がっている。

マルチタスクで練習し始めたなのはちゃんを見つめながら、わたしはなのはちゃんを診るために展開していった術式を閉じた。

side はやて

今日のおねーちゃんはびいかペリペリこじる。

いや、な、顔はいつも通りにこじることなんやねん、その、何と言うか・・・・・。

『出撃前の兵隊さん』・・・・・・?

なーんかそんな感じがするよね。

今だつて、ほら、

「なるほど、アーニーだが・・・・・」

「そそ、でだ、調べて分かつたことが・・・・・・」

かなり真剣な顔でヒノ「わん」と話してゐる。

の使い魔さん。

男が目に映るがさうで、勝手がわからぬ。

『嬢様』やで？

ええ人つていうのは分かつとるんやけどな。

何か凄いのだったのは覚えどるんけどなあ・・・・。

バシーン・・・・・

バシーン・・・・・

「たつた三つとまだ二つ、二つとなの二つ」とイー・ル。

なんでだよ・・・・・・・。

「悲しいわフェイト！あなたそれでも私の娘なの！？」

バージーン

バージーン

といひだ!? 言われたどおりなやんと持つておたじやないか・

「これ以上母さんを悲しませないで……。」

フロイトは一生懸命じゃないか！？あんたの為にほんせんになつてゐるぢゃないか・・・・・・！

バージーン・・・

誰か・・・・・誰かフェイトを助けて・・・・・・！

「この！役立たず！！」

誰か・・・・・・・・

「ユキ・・・・・・・・

s i d e ? ? ?

ママやめへよー

わたしの妹をいじめないでよー

ママー、氣づこてよー

どうしてわたしの声が聞こえないのーー?

どうして妹をいじめるのーー?

どうしてわたしを見てくれないのーー?

もうやめてーーそれ以上やつたら死んじゅうまーーー

ママーーー

side 雪斗

さて・・・・・今頃フェイトとアルフは時空の庭園、か。  
・・・・・一人にはそろつて、『留守番してて!』と言われた。

まあ、腐つても親子だ。  
水入らずの時間も必要だろうが・・・・・。

・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・

・・・・・修羅場を迎えていなければいいが。  
それに仮に大事があつても問題はないだろう。

一応有事の際には念話で知らせるように言つてあるが、無意味だろうな。

フェイトは年の割には強いし、アルフも優秀な使い魔だ。  
更に、フェイトの母親である彼女・・・『プレシア・テスタークッサ』は過去に『大魔導師』と呼ばれていたらしい。

最近では研究のために籠りつきりらしいが、それでも実力は十分なのだろう。

これだけの精銳が集まっているのだ、多少の天変地異はなんとかできるはずさ。

お、そろそろ昼時か。

何か作ろう

「『ユキ！聞こえる！？ユキイー！』」

「『つ・・・・・アルフカ！？どうした！？何があつた！？』」「

「『フェイトがあ・・・・・フェイトがあ・・・・・・・・・！？』」

『有事』の内容を聞いて、

頭の中の何かが切れだ。

s.p.i.e 桃香

「おぬしはさんを食べ終わつて、のんびりしてこむ時だ。

「『ガーフー・亜桜ー・ビリーハでもこい・答えてくれー・』」  
「『雪斗くんへ・ど、ビリしたのやんなに慌ててー・?』」  
「『やだよーん、めずらは深いきみこきめしょや、ー・!! やつたら  
落ち着くんで無事の?』」

頭の中で、ガーフーさんと雪斗くんの声が響く。  
慌てていたりしこ雪斗くんは何度も吸つたり吐いたりを繰り返して  
から、

「『・・・・・・・・フロイトが危ない』」

言つたことは、ただ、それだけなのが、

「え、ちゅ、桃香ちゅんー?」  
「どうしてへんだー? 桃香ー?」

玄関を飛び出した。

side 飛鳥フウリ

はやてをヒノコに任せ、街を走る。

「『とりあえず』一人は、今から言つ番地にあるマンションの屋上に来てくれ！管理人はいるがセキュリティは甘いからすぐに入れるはずだ！」

「分かりました！」

「『りょーかい！』」

「『ちよ、雪斗さん！？ コーリさんもーへビーフー！』とーへー。」

雪斗と桃香ちゃんと連絡を取り合いつつ、歩道を走る。  
つてか、なーちゃん着いてきてんの？

「『だつて桃香ちゃんこきなり飛び出しこへんだもんー。それにフエイトちゃんが危ないって聞いてーー。』」

なるほど、やつぱり優しい子だねえ・・・・・・。

(つていうか、セキュリティが甘いマンションつてビーフー・  
(1)都合主義つてやつだなー。)

なんて突っ込み入れつつ、言われた番地に向けて速度を上げた。  
・・・・・今なら車と互角に渡り合える気がする、うん。

「「ゴーリさん！」」

「お、桃香ちゃんになーちゃん！」

途中桃香ちゃん達と合流して、待ち合わせ場所に駆け上がる。屋上では、雪斗がすでに武装して待っていた。

「「ごめん！待たせましたか！？」

「いいや、多分問題ない！早速だが転移を頼みたい、俺は転移系の魔法は使えないんだ！」

「ああ、だったらあたしがやるよ」

転移ならしじょっちゅうやつてるからね！

というわけで、雪斗に教えられた座標を入力して、あたしらは世界からいなくなつた。

「そーいやゴーノくんは?」

「あ」

「…………置いて来ちゃつた」

…………哀れフュレット。

side 桃香

転移の光が納まると同時に、周りの雰囲気が変わったのが分かる。目を開くと、目の前に異様な光景が広がっていた。

近未来的な構造と、西洋文化が入り混じったような感じで、かなり不思議な建物だ。

窓の外に見えるのは空じゃなくて、暗い何かがうごめいてる風景。初めての場所だからなのか、なのはちゃんは不安そうにキョロキョロしている。

「とにかく進むぞ!」

「うん」

「あ、はい!」

「おーらー!」

雪斗くんに急かされて、前に進みだすわたし達。

「……人ん家に勝手に上がりこんでなんだけど、ここ、あまりいい気になれないにゃ~」

ヨーリさんがそっぽやいているのが聞こえた。

閑話休題

途中何度も、防衛用と思われるロボットと戦つたけど、そんなに苦労はしなかった。

雪斗くんを先頭に、ひたすら奥まで進んでいく。すると進行方向に何か見えてきた。

「アルフ！！」

アルフさんの顔は、涙でグシャグシャになつてゐる・・・・・つて。

「何があつたんですかアルフさん！？」

なのはちゃんとがかなり慌てた様子で、アルフさんに聞いていた。  
何回かしかあつたことがないわたしでも分かる。  
あのアルフさんがこんなに泣くくらいのことだ。  
ちょっと想像がつかない。

「この際誰でもいい！フロイトを……フロイトを助けてくれ！」

「…」のままで「フ」イトが、「フ」イトがあ…。」

なのはちゃんとしがみついて、必死に頬み込んでくるアルフさん。  
言われなくとも・・・・・

「もちろんです！わたし達のために来ましたから…」フ」イトちゃん  
んは？」…？」

すると今まで黙っていたコーリさんが突然、アルフさんの後ろにあ  
る扉に向かって

「おひじやまっしゅーす…！」

思いつきり蹴飛ばし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ちょ、いいのかな！？緊急事態とはいえた人の家を壊すって・・・・・

。コーリさんはそのまま中に入つて行つちやうし、雪斗くんもなのは  
ちゃんもそれに続いて行つちやうし・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（主！今は・・・・・）  
(分かつてゐ！行くよー)

とにかく…今はフ」イトちゃんを助けないと…

s.i.d.e フライト

…………私はできなこ子、役立たずの子。

ゆうとの期待に応えられなこどりひつもなこ子。

…………ナビ、エリックよつかな…………。

またぼんせんになつちやつた…………。

アルフとヨキ、心配するんだらつなあ…………。

またいつも通り、アルフにだいたい直してもらつてから帰るへ…………。

それでもた、ジュノルシードを集めなきゃ…………。

ゆうとを懸しめやらや、ダメだ…………。

「おひじゅまつこまーすーー!」

「フライテー」

「フライテーさんー」

あ、もつ意識が…………。

side なのは

桃香ちゃんが急に飛び出して、追いかけてたらフェイトちゃんが危ないって聞いて……。

それで、フェイトちゃんのお母さんがいのつといひに来た。ヨーリさんが扉を蹴り飛ばして（あれはすつじくびくらした……）奥に入ると、ひどい怪我をしてこるフェイトちゃんと、鞭を持った女人人がいた。

「つ誰!?

女の人が怖い顔でこっちを睨んできた。

怖がつて、ちよつと足を止めたわたしと違つて、雪斗さん、ヨーリさんはフェイトちゃんと女人の人間に立つた。

桃香ちゃんもフェイトちゃんと近寄つて、怪我の具合を見ていた。わたしも咄嗟に、桃香ちゃんのそばに立つて女人の人を見た。けど、

「なのはちゃん、今フェイトちゃんに持続型の治癒術をかけたから、外に運んで、アルフさんのそばにいてくれる?」

「え、で、でも」

「多分じゃなくても戦闘になる、あなたがここにいたら……」  
「いつ言つたらなんだけど、足手まといになる」

「…………」

『足手まと』…………。

「『めん、 はどお願い、 』『じやあなたにしか頼めない』

桃香ちゃんは、わたしを真っ直ぐ見てくる。  
手には、階しえうに懸をしてるフロイトちゃん。

…………。

「…………わかつた、任せて」

「ありがと」

フロイトちゃんを受け取つて、走り出す。

部屋を出る時に見たのは、どこか頼もしい雰囲気を纏つている桃香ちゃん、コーリさん、雪斗さん、三人の姿だった。

「さーってと！18歳未満の方の「J退場はもつおしまい」？」

「18未満って、それ俺たちも該当しないか？」

「気になら負けよ～？ほら、RPGとかでよくあるじゃん？イベント戦闘とかで、このキャラは外せません！つての」

「いや、例えが分かりづらいから」

ヘラヘラとした顔で話す飛鳥<sup>ヒナ</sup>と、冷静にそれに突っ込む桃香と雪斗。

「話はもうおしまいにしれくれないかしら？」

そこへ女性が口を挟んできた。

紫色の長い髪を揺らし、所々露出<sup>アブノート</sup>がしている黒い衣服を纏っている。

「雪斗くん、この人が…………？」

「ああ、フェイト・テスターの母親…………プレシア・テス

タロッサ」

「雪斗…………？そう、あなたの所為なのね？最近フェイトが墮落している原因は」

女性…………。プレシアは雪斗を睨みながら、鞭を杖へと変形させた。どうやらあの鞭はデバイスだつたようである。

「とにかく、あなたを倒せばフェイトはまた元に戻る…………わたしのお人形にね！」

狂ったように、プレシアは両手を高く上げる。

飛鳥達三人は、武器を構えた。

刀を抜刀した雪斗は一番前列、同じく刀を構えた飛鳥は中衛、槍を構えた桃香は後衛についた。

フレシアが握っている杖から紫電が迸り、部屋全体を砕き焦がしていく

三人は慣れた足取りでかわし、行動を起こす。

「自分の娘を人形呼ばわりとかさー、人としてビーよー!?」

フレシアにそう語りかけながら、飛鳥<sup>ユーリ</sup>は刀から衝撃波を飛ばす。

「フェイトちゃんだつて生きているんですよー? 親子なのに、どうしてそんなこと言つんですか!?!?」

桃香は槍を振るい、真空波を撃ち出す。

「誰の為に彼女が戦い続けているのか、考えろ!! フレシア・テスタロッサ!!」

雪斗は腕と刀に魔力を纏わせ、フレシアに斬りかかった。しかし、フレシアは小さくため息を吐くと、

「…………つるさい」

「は?」

「え、ちょっと」

「なつー!」

一瞬の出来事だった。

紫電が空気中を走り、部屋中を震わせ、三人を弾き飛ばした。

空間の中をプラズマが暴れ周り、飛鳥<sup>ユーリ</sup>を床に叩き付け、桃香を壁にめり込ませ、雪斗をフレシアに捕獲させた。

フレシアはギリギリと、華奢なはずの手で雪斗の首を強く締め上げる。

雪斗は呼吸が不能になり、口を動かして酸素を求めた。

s.i.d.e 雪斗

脳裏が真っ白に塗りつぶされ、残る思考は今この場にいない彼女のこと。

危ういのは自分なのにと思いつつも、彼女がどうなるのかとすればかりを考える。

アルフがそばにいるから問題はないだろうが、いつたん考え出すと止まらない。

段々と死にたくないといつ思いが強くなつてきた。

相棒、ここでおしまいかあ？

脳裏に、声が響く。

終わる気、ねえだろお？俺も、暗サワも、お前も・・・・・・

・。

鼓動が高ぶつてくるのが分かる。

何で記憶図書館に選ばれたか、考えろよ。  
ライブラリ

力なく垂れ下がっていた手に、力が籠るのが分かる。

お前が、ここで終わる器じゃねえからだよ。

もつ島は出来ないはずなのに、まつひとつプレシアを睨む。

さあ、俺を解放しろや相棒。

自分でも驚くくらいの力でプレシアの腕を払いのけ、拘束から抜け出す。

能力名でもいい、それに使われる道具の名前でもいい。

声に導かれるがままに、仮面をかぶる仕草を取る。

さあ、叫べ。

side 飛鳥

あっちやー、思ったより強いわプレシアそん。  
さすがは『大魔導師』って感じ？

つて、そんなん呑気に考へとる場合ぢや、いわ――！――

あたしはともかく雪斗くんがパンチじゃにやいのーーー

。 ザベー助けようにも全身痛いし、すぐには動けなもそうだし……

桃香ちゃんは！？・・・・・ひだりやん！-夢の中にいる！-『絶しちょる！-

詠唱とか明かに間に合わねえし」とないしよがめに!!?

突破口は開けるはずだ！ 諦めたらセレーノ試合終了じゃあああああ

二〇四

— . . . .  
— ?

なんて思考してたら、雪斗くんが自力で拘束から脱出してた。なんとか最悪の事態は回避できたみたいだの。

卷之三

つて言つてるそばから『何か』発動させおつた！！  
一瞬だけ仮面と思われる幻影が顔に浮かんだ後、背中の皮と服を突  
き破つて六枚の翼が現れる。

闇を思わせる真っ黒なそれらが血を滴らせながら背中の表面から少し離れた位置で浮いた。

「…………てめえ、よくもやつてくれたなあ？」

口から放たれた音は寒氣を覚えるには十分すぎるものだつた。  
つか、感情がいくらか『無くなつた』あたしでも寒氣を感じる」と  
は出来るのね・・・・。

ちよつと感動。

さて、話しかけられた方のプレシアさんはつと・・・・・。

「おまえ、何者だ？」

いや、君が見られるにと  
るべし。」

あれか?『これ以上のプレッシャーを受けたことの有るあたしにや

文庫本  
一七二九

でもそれ抜きでも感心だわ。

「…………もう一度いいだお？ フロイトが誰の為に戦っているか、考えろや女郎

うん、明らかに雪斗くんの気配が別物だね。  
や、根っこには同じだよ？なんつーか、こつ・・・・・葉っぱの色  
が変わったー・・・・・みたいな。

紅葉みたいに夏あたりは若葉色だけじ、秋になつたら鮮やかな血の色になる感じ。

口調も厳格な武人さんから不良っぽいものにがらつと変わってるし・

もしかしたらあれが雪斗くんの能力の一つ?  
でも何にせよ、形勢逆転のチャンスってことだけはよく分かつたわ。

突如として雰囲気の変わった雪斗にたいして、プレシアが抱いた感情は『困惑』と『恐怖』。

普段礼儀正しく厳格な彼が、突然自分の目の前で変貌したのである。誇り高き武人から、百戦錬磨の狂人へ変わった雪斗をいくばくか眺めた後、杖を構えてプラズマを打ち出した。

少しの恐れを抱いたものの、戦う意思は消えていないようである。紫色のプラズマは雪斗を襲うが、彼はそれを素手で受け止めた。その光景を見た飛鳥<sup>ヨーリ</sup>と、彼女の治療により目を覚ました桃香、そしてプレシアは驚愕する。

だが雪斗は立ち直る時間を与えない。

紫電を握りつぶすと体を回転させ、鋭い蹴りをプレシアに打ち込む。

プレシアは咄嗟に障壁を張つてそれを防ぎ、杖を鞭に変形。

帶電させて、雪斗に向け振り下ろす。

一方の雪斗は荒っぽく、それでいて無駄のないステップで打撃の嵐を掻い潜り、プレシアに接近。

鳩尾にきついストレートを放つた。

「がつ・・・・・はつ・・・・・！」

人体の弱点をつかれ、プレシアの体制が崩れた。  
それを見た飛鳥<sup>ヨーリ</sup>は何を思ったか、立ち上がりて詠唱の姿勢をとる。

「光の花、咲いて開いて田くらましー『ヴァンジーロスト』……」

光の粒がプレシアの頭上に集束され、雪斗との間に落ちる。  
飛鳥は、不満そうに視線を突き刺してきた雪斗に向かって、

「奇襲かけるよーいつたん退いてー！」

束の間黙り込んだ雪斗だが、やがて了承の意として小さく首を縦に振る。

飛鳥も頷くと、桃香を支えどこか隠れられる場所を探し始めた。すると、壁に不自然な凹みを見つける。

田くらましの効果の期限もあつたので、飛鳥達は飛び込んだ。

『中身』がなんなのか確認せずに、である。

きつちり扉を閉じて、三人は一息ついた。

沈黙が束の間、そして、

「「ふはあつーー」」

桃香と飛鳥<sup>ユーリ</sup>が同時に息を吐き出した。

「お、おつかねがつただあー、流石大魔導師だべー」

「さりげに東北弁になつてるよユーリさん・・・・・・けど、それに同意」

息を整えながら、苦笑いを交わす。

「ところで」、と飛鳥<sup>ユーリ</sup>が切り出した。

「雪斗くんそれ何よ？や、あんたの能力ってのは分かるけど

その問い合わせしばらく沈黙する雪斗。

やがて、

「ああ、やうだ・・・・・・・ぢつかの世界で作られた—最強（最凶）の兵器の力らしいが、実際のところは俺にもわからねえ」

「ただ」と続ける雪斗を、じつと見つめる桃香と飛鳥<sup>フーフ</sup>

「最大限にまで開放したあかつぎにや、世界を一つぶせるって話らしい」

「あ一分かるかもしね、だつてほら、それ発動させたときの仕草むーあるで

BEECHにてぐる『虚化』みたいじゃん

へらへらと笑ひ飛鳥<sup>フーフ</sup>を、雪斗はどうか付き合つきれないと云つた顔で見た。

「・・・・・・けど、フロイトに見られなかつたのは幸いだな、こんなおつかね一姿、餓鬼にはみせらんねえ」

そんな中、ふと、桃香は道が続いているのに気づいた。

そして、その先がぼんやり明るくなつていてることも。

・・・・・はじめはただ的好奇心だった。

その先にあるものは何なのかと、目を凝らしたとき。

桃香の顔が、驚愕に歪む。

s i d e 雪斗

「ふつ二人とも、あれ見て！！」

いつのまにか思考に浸っていた俺を現実に引き戻したのは、亜桜の焦った声だった。

何事かと思って見ると、亜桜はかなり驚愕した様子である方向を指差している。

そこには通路があり、その奥を見て、

気がついたら走り出していた。

三人一緒に突き当たりまで走りぬいて、呆然と立ちつくす。

田の前にあるのは、何らかの研究に使われるであろう「ポット」。

・・・・・いや、それだけなら問題はねえ。

俺たちが驚いているのは、その『中身』だ。

「どうして……？」

隣で、亜桜の震える声が聞こえる。

「どうして……『フュイトちゃん』が！？」

液体の中で死んだように眠る……いや、眠ったように死んでいるか？

なんにしろ、こんなもんに餓鬼を放り込むなんざ正気じゃないな。

「あつちゅー…………しまった…………そうだったかー」

亜桜とは逆隣から、コーリのそんな声がした。

俺も亜桜も思わずコーリのほうを振り向いてしまう。

奴はけつこう驚いた顔をしたが、すぐに納得したような表情になり、

「もしかして…………その様子だと、二人とも『原作』知らない？」

「…………知らない」

同時に答えた俺たちを見て、再び納得したようにうなづくコーリ。

「まあ、なんだ？プレシアさんが、その、『狂ってる』理由っての？この子なんだよ」

『狂つてゐる』の部分を遠慮がちに口にしたあたり、何か知っていると見える。

やつも話す氣はあつたらしい、ゆっくりと語りだした。

「この子の名前は『アリシア・テスタークロッサ』…………フェイ

トちゃんの『オリジナル』だよ」

「…………オリジナルつてことは…………まさかフェイト

ちゃん…………！」

「や、『プロジェクトF』っての技術で生まれたこの子のクロー

ン」

それを聞いた瞬間、先ほど以上に、呆然としてしまった。

同時にフレシアへの怒りもわいてくる。

それを察したのか、ユーリは静止するように手を前に突き出してから、

「でも、一応フレシアさんも被害者だかんね？自分が横暴な上司に従つた所為で、愛娘をなくした、だから狂つた」

ポットを撫でながら、ユーリはどこか冷たい目をしていた。

「フェイトちゃんが本来のアリシアちゃんと違つたから、ジュエルシードを求めてる、そーでしょ？フレシアそん？」

思わず、後ろに振り返つた。

そこには、黙つてこちらに杖を向けているフレシアが…………。

free side

「や、すみませんね、じつちもじつちで必死だつたんて、お望みな  
らすぐに出で行きますよ?」

飛鳥の軽い口調に対し、プレシアは無言の殺意で答える。  
しばらく沈黙が続くが、それを破つたのはプレシアだつた。

「…………なぜ、アリシアのこと知つているの?」

「見てのとおりあたし暇人なんで、色々世界を渡つて、資料とか見  
てこるうちに、ね」

「そう…………」

彼女は小さく、それだけいふと、杖を降ろした。  
それと同時に殺意が消える。

「…………正直迷つてゐるわ、このままジュエルシードを集め  
続けたとして、本当にアリシアが蘇るのか」

ぽつりぽつりと語りだすプレシアを、飛鳥<sup>ヒナミ</sup>、桃香、雪斗の三人は、  
臨戦態勢を解きながら見つめた。

「フロイトの事だつてそつ、頭ではアリシアではないと分かつきつ  
てこるはずなのに、あんな仕打ちをしてしまつ…………」

フレシアの両手はだらりと垂れ下がり、杖を握る力は弱くなっている。

「わたしはどうすればいいのかしら? フェイトを娘と呼び、アリシアを忘れるか、アリシアに執着して、フェイトを捨てるか……。」

そしてそのままがつくりと、膝をついた。

桃香はやるせない表情で、雪斗はどこか意外そうな表情で、フレシアを見る。

そんな中、飛鳥<sup>ヒナ</sup>がため息をつき。

「アホやろ? アホやろ? もっかい言ひ、アホやろ?」

「ちょ、ゴーリさん! ?」

「容赦ねえな」

腕を組み、ぱつさつとフレシアの悩みを切り捨てる。

「そんなん決めるのあんたの仕事やろ? つかなんでその選択肢に『フェイトを娘と呼び、かつアリシアに執着する』ってのが無かど?」

「・・・・・・・」

いつのまにか九州弁になっている飛鳥<sup>ヒナ</sup>の言葉に、フレシアはうなだれる。

飛鳥は鼻でため息をつくと、後ろでぽかんとしている一人に、「帰<sup>ヨーリ</sup>わづ」と叫び、とつと歩き出す。

「・・・・・・ばつてんね、『娘たち』の為に必死に悩んでるあんたは、かつによか親て思つよ?」

フレシアとのすれ違いながら、咳く様にそつと呟いた。

はつとして彼女が顔を上げたときには、もう二人は部屋の入り口にいた。

桃香はどうか罪悪感のようなものを感じていたのだらうか？

フレシアと田代が会つと、少くとも余裕をした。

「あーそだ、ほれ、そこのお嬢ちゃんおこで」

・・・・・ふえ？あなた、見えるの？

「もううーぱつちつ見えちょるよ～～～」

そつか・・・・・よかつた・・・・・もつ離れても気づいてもらえないと思つたら、わたし・・・・・わたし・・・・・！

「あはは、まあおねーさんは余裕で見えるからねえ・・・・・突

然だけじゃ、おかーさんにはいたくない?」

え? それってどうこう……?

「ん~、せり、アメわやんあげるから、とにかくおねーさんについて  
ておいで」

(・・・・・完全に不審者の発言だぞマスター)

・・・・・?

## 第一十一話／＼おかーさん（後書き）

四苦八苦しながらもなんとか書き上げることができました。  
今回登場したのは、サワノ様より設定を「提供いただいたものです。  
詳細に関しては、私としては無印が完結したころにだそうかなつと  
思っています。

次回、フルボッコです。

第一十一話　うなぎの匂いとアーモンドコンを懸こ湯かべるよな？（前編）

「久々ではお久しぶりです。  
やつとりが咲きました……。

第一十一話 いつひきとくとパソコンを廻に浮かべるよな？

「艦長…もうすぐで目的地に到着です…」

「分かりました、到着次第、次元震の原因究明に当たりますので、各自準備をして置いてください」

「了解…」

オペレーターの報告を受けた、この船の長と思われる女性は慣れた様子でコンソールを叩きつつ、手早く指示した。

「クロノ執務官」

「はい、いつでも出撃できます」

女性の後ろに控えていた少年は、メタルカードを取り出して返事をする。

「よろしく、では指示があるまで待機して置いてください」「了解しました」

「ぐわ助えええええ　　つ……」

「うつわ!? おねーちゃん! ?」

「いかがなされましたか! 主様! ?」

何だかイラッとする気配を感じ取つて、反射的に叫んでいた。  
隣ではやでがびっくりして、ヒノコがすつ飛んできてるけど、気にしないつ

そこにはつとして辺りを見渡す。

幸い家の中だったからよかつたけど、近所迷惑よね、うん。

(うぬせこマスターで申し訳ない、近所の『婦人方』)

変わりに暗羅が謝つてくれたから、結果オーライかにや?  
さて、フレシアさんとこから帰つてきた後、フェイトちやんは治療  
もかねて高町家で保護することになります。  
アルフそんも雪斗くんもついでに療養してて、当然の『』とベジュール  
シード争奪戦は休戦。

今のところは、なーちゃんとフェイトちやんの交互で集めるつてこ  
とで、合意してるみたい。

聞いた話だと、雪斗くんは毎日のように恭也さんと挑まれてるから  
若干疲れ気味だとか。

でもその割には楽しそうだつてさ。

そんなわけだから、あたしも傍観者休んではやでやヒノコと、ゆつ  
つらーとしてる(あ、ちなみに『ゆつつらー』は九州北部の方言で  
『ゆつくり』って意味ね)。

まあ、それよりもだ。

「もう五月があ、あとちゅういではやでの誕生日よね~」

「うん~」

「それは・・・・なにかプレゼントを用意しなければいけません

ね

そつこいじだから、ちやちやつと終わらせたい訳だけど。  
・・・・・・上手くいかねえ？

s.i.d.e 桃香

「出来た？」  
「出来た！」  
「た、多分……」  
「見せて……うん、一人とも上手」

あれから一週間くらい。

フェイトちゃんは治療と休養を兼ねて、高町家で預かることになりました。

今日はフェイトさんがジュエルシードを探す番だったのですが、雪斗くんとアルフさんと、あと意外にもコーノくんが引き受けてくれて、実質なのはちやんもフェイトちゃんもお休みになっちゃって。

だから、せっかくだし」とことで、お裁縫を一人に教えてる。

・・・・・うん？ 小6のお前に出来るのかつて？

転生者舐めないで下れこ、じかとり前世では毎日のようにやつてしま

したから。

友達とか同級生に、『お母さん』とか、『おかん』ってあだ名をつけられたのはいい思い出です。

二人が縫っていたのは、ちょっとした布製のバッジ。サイズも小さいし、小学生に練習させるにはもってこいだろうって思つて……。

予想どおり、なのかな?一人とも小学生にしてはとても上手に出来ていた。

ちょっと不恰好なのは『愛嬌だね』。

「よし、じゃあ後はこのペンをつけて完成だね」

「はーい」

また作業を始めた二人を見てて、思わず笑みがこぼれる。

(今なら、この子達の為になんでも出来そう)  
(主が取った行動に、二人が喜ぶかどうかは別ですけどね)

藍桜の皮肉に苦笑いしてから、私も作業を再開した。

side 雪斗

「今日はここが限界か……」

「そうだね」

「むう・・・・・せつちゅうしと探していったかつたんだけどねえ」

ビル街の上。

ジユエルシードの搜索をしていたが、日が大分暮れてきた。いつもならここで搜索を続行するのだが、今は、まあ色々あつて居候の身だからな。

家主たる心を醸させられにはもいかん

「ああ、帰ろ」

珍しく人間の姿に戻つてゐるコーノの提案に乗り、居候先へ帰ることにした。

「フェイト！」「アルフ！」

帰るなりフェイトに飛びつくアルフ。

犬形態なので、別になんら変わった点はない。

(いや、犬が喋ってる時点ですでに変わっていると思います)

そこは突っ込んだら負けだ、暗。

side 飛<sup>フ</sup>鳥

「つか、気付いたんだが」「  
(何だ、マスター)

軒先でのんびりしてたら、ふと思<sup>フ</sup>立つた。

「管理局、そもそも出でへるんじやないかにゃ?」  
(ああ、あいつらか)

今冷静になつて考えたらあの廿<sup>ニ</sup>党<sup>ドウ</sup>な艦長<sup>かんじょう</sup>との発言<sup>はつげん</sup>ついで一つか矛<sup>矛</sup>盾<sup>ぼう</sup>してゐるところがあるのみの<sup>み</sup>ねー。

それに一年前の『アレ』とかあるからセー。  
・・・・・・・もしかしてのまさかのアンチ管理局ですかそ  
ですか。  
とか自己完結しちゃつたり。

「願わくば三提督あたりが味方になつてくれるといこなーつと」  
(まあな)

どつつけよ接触は必要よね?原作ブレイクするんだから。

s i d e はやて

声が、聞こえる。

女の人気が泣いてる声と、何か語り掛けてくる男っぽい声。

女の人は泣きながら謝つて、男っぽい声は同位体がどうの言つてくる。

・・・・・「めん、一人ともいつぺんに話かけんといってくれますか？」

うち聖徳太子やないから、聞き取れません。

といづか、あんたら何者？

うちに、何の用事なん・・・・・・？

「うう」数日、ジユエルシードの発動の頻度が長くなっているな

休日。

お匂いはんを食べ終わった後、雪斗くんがぼつりと呟いた。

「確かに、大分減ってきたんかねえ？」

「けど、全部じゃないのは確かだし……」

そうやつて頭をひねつて考え込む、フエイトちゃんとアルフさん。

「はやく見つけないと、また被害が出ちゃうかもしれない」

「やつだね、でもどこにあるんだら？・・・・・？」

なのはちやんとゴーノくんも唸り始めた。

「ちよっとでもいいから、何か情報があれば・・・・・・・・・・」

そういつて若干俯く雪斗くん。

情報・・・・・情報・・・・・・・・・あ。

「ね、みんな」

声を掛けて、その場の全員が反応したことを確認する。

「情報に関して宛があるんだけど、任せてくれないかな？」

side なのは

あの、桃香ちゃんが情報に宛があるつていつた次の日。  
わたしは桃香ちゃんと一緒に公園にきてるんですけど・・・・・・  
その・・・・・・。

「じゃあ心あたりはないんだね？・・・・そんな、いじょとりあえ  
ず仲間に気をつけるように伝えてもらいたい？」

「いやー」

桃香ちゃん・・・・・・・。

「動物と話せたの？」

「うん、お陰で情報網はばっちりだよ、あ、カラスのみんなは特に  
気をつけてね？キラキラしたもの見るときびくんだから」

そういうて桃香ちゃんが見た先には確かにカラスがいます！  
注意されたカラス達は、びくつとして体を小さくしていました。  
一方の桃香ちゃんはふふっと笑って、

「とにかく、みんな協力お願いね？見つけても不用意に近づかない  
こと」

動物達が桃香ちゃんから離れて行きます。  
どうやらお話は終わったみたいですね。

「動物さん達、何だつて？」

すると桃香ちゃんはちょっと残念そうに笑って、

「何にも知らないって、けび見つけたらひやんと教えてくれるって約束してくれた」

「そつか、何だか心強い味方が出来たねー!」

「あははっそうだね」

side 飛鳥<sup>ヒトリ</sup>

今日ははやての病院もないし、便利屋の方にも依頼は来ていないので、家でのつほほ～んとしてる。その上日差しもいい感じに暖かいから、このまま寝るつて言つのも風情だねえ・・・。

・・・・・・やめることないからこいよ?

それじゃ、お休みなわ

・・・・・イイイイイ・・・・・。

あーい・・・・・。

「主様！ジユエルシードが・・・・・ッ！？」

・・・・・〇・ニ

「あ、主様！？」

「うん！」やべり、なんでもないよ・・・・・行こうつか・・・・・

後でヒノコに聞いたけど、そん時があたし、滅茶苦茶へこんでいたらじい。

「ハーケンセイバー！」

フェイトが飛ばした刃を、暴走体は根で跳ね除ける。

「つの一食らえ！！」

次にアルフがストレートパンチをジュエルシードの暴走体に繰り出  
すが、今度は障壁に阻まれた。

「生意気にバリアまで張るのかい！！」

舌打ちをしながら、アルフはバックステップで攻撃を避けた。

・・・・・　今度の暴走体は思ったよりやるな。

ぱっと見て、樹木を素体にしていると考えられるが、火を使おうこ  
も障壁に阻まれるのがオチだな。  
さて・・・・・どうしたものか。

「ユキ！なのは達には・・・・！」

「もう連絡を入れてある、悔しいがこいつ、俺たちだけでは骨が折  
れるぞ！」

フェイトが若干焦った様子で俺に連絡したかどうかの確認をしてき  
た。

もうとっくに済ませていたので、問いかけには肯定して、迫つてき  
た根っこを斬り飛ばす。

単独になるのは危険と判断し、フェイトとアルフに合図を送る。  
二人は小さくうなづくと、俺の近くに来てくれた。

相手はアルフのスキル『バリアブレイク』をも跳ね返すよつた強固  
な障壁の持ち主だ。

なのは位の火力でなければ突破は不可能と思われる。  
と、その時、

「そいつ！」

聞き覚えの有る掛け声がして、そいつは暴走体に一閃を繰り出した。  
だが、一閃は障壁に防がれた。

一閃を撃つた本人は苦笑いして、俺たちの隣に降り立つ。  
隣にはその従者が控えている。

「やほ、大丈夫～？」

「ユーリー！」

「お前は・・・・・！」

アルフがヒノコに牙を向ける。  
だが、

「アルフ！今はそんな余裕ないでしょーー！」

「つぐ・・・・・・覚えとけよ！」

「はて？何を？」

「～～～つ！」

ヒノコの挑発めいた発言に、アルフは青筋を浮かべていた。

「挑発は後で、今はあつちが相手」

そう注意するユーリの声を背にして、俺達は再び田の前の暴走体を見据えた。

改めてみてみると、部分的にはそんなに注意すべき点は無い。  
障壁以外で警戒すべきは地中から出てくる根程度だろうか？

先ほども思案したように、火さえ用いれば怖くない相手だ。だがその前にはあの障壁をどうにかしてひっぺがさないといけないで……じうしたものか。

「《雪斗くさん、ちょいとよるし?》」

「《コーリ?何だ、近くにいるのだから直接・・・・・》」

「《原作に関わる》ことだからダメ》」

「《・・・・・》」

突然、ドンッと派手な音がして、暴走体が怯んだ。

・・・・・・・がらにも無ぐざまあみろ、と思つてしまつたのはこ  
こだけの話しだ。

見覚えの有る桜色の光の出所に目をやる。

「大丈夫!/?フェイントちゃん!アルフさん!」

「みんな無事!?」

「今治癒魔法かけるから・・・・・!」

案の定、なのはと暁桜とコーノがそこへいた。

「《ああ、丁度いいや、原作に関わることでちょっとあるから、桃香ちゃんもきいてちょ?》うし、ヒノコは前衛お願い!あたしが中衛やるから、桃香ちゃんは後衛ね!」

「《・・・・?う、うん》り、了解!」

コーリの指示を受けつつ、それぞれが配置につく。

俺たちには何も言わなかつたことと、先ほどのコーノの発言内容から、回復に専念しようと言つことなのだろう。

後退してコーノの元に向かいつつ、コーリが話し出すのを待つ。

「『や、実はにゅ、今戦つてゐる』に、確かに障壁張るナビ、強度はそんなに無いはずなんだ』」

「『え、え?』」

「『そうなの?』」

原作を知っているコーリならではの発言に、思わず食いついてしまつた。

一方のユーリは、こちらをちらりと見てうなづく。

「『ん、さつきあたしが撃つた一閃・・・・次元斬つて技で障壁』とスパンいつたつもりだつたけど、防がれたのよね〜』」

「ま全力でやつたわけでもないんだだけれど、」と苦笑いした。  
と、同時にユーノの治療も終わったので、手短に礼を述べてから戦闘に参加する。

「『び、びつして・・・・・』」

「『わあ? シラネ』」

三人そろつて、向かつてきた根を切り飛ばした。

「『はいーお話お仕舞いー集中しましょ、この『意外とやるわよーん?』』

「『分かつてますー』」

「『言われなくとも・・・・・ー』」

また奴を見てみると、障壁に若干のひびが見受けられる。  
これなら・・・・・。

「フハイトーなのは! でかいのを打ち込んでやれ!」

「ひびに容赦なくがポイントだよ！」

亜桜も気付いていたらしく、一人に向けて親指を立てていた。ユーリは何も言わなかつたが、にやつと口角を上げているのが分かる。

フェイドとなのははこちらを見て力強くうなづくと、それぞれチャージを始めた。

一方、こちらの意図に気付いたらしい暴走体は、阻止しようと一人を攻撃してきた。

だが、

「チエーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

「炎閃！」

ユーノとアルフが攻撃してきた枝や根を縛り上げ、そこへヒノコが炎を見舞う。燃え尽きると同時に、二人のチャージが完了した。

「ディバイン・・・・・・」

「サンダー・・・・・・」

十分に魔力が込められた閃光が、暴走体を貫く。

暴走体は断末魔を上げながらジュエルシードを残して消えた。

アルフが封印処理を施し、一件落着。

・・・・・かと思われたが、ちょっとした問題が発生。

「あの、この場合どうちが持つべきなのかな？」

一応今日は俺たちが集める日なんだが、途中からなのは達も参加し

てきたからな。

そろつて悩み始めた時だ。

「…………！」

「え、ちょっユキー？」

背後に転移反応、同時に敵意も感じたのでアルフに田配せし、フェイトを抱えてその場を飛び退く。

予想通り、さつきまで俺達がいた場所に魔力弾が落ちていた。飛んできた方向を睨むと、黒い服をきた、フェイトと同じ年位の少年が立っている。

そいつはこちらに杖を向けて、

「時空管理局クロノ・ハラオウンだ！」この戦闘は危険すぎる…。  
「な、管理局だつて！？」

そして再び魔力弾を撃つ為にチャージを始める。

まずいな……今の俺は飛び退いた勢いで倒れてしまっているし、何よりフェイトを抱えている。

防ぐしかないかと思つたその時になつて気付いた。

ユーリと桃香の姿が見当たらない。

しかし、生憎と二人を探す余裕は無かつたので、再び少年に向けた。

…………そこで見たのは、

「帰れえええええええつ…………！」

「空氣読みなさい……」

女子らしからぬ絶叫と共に、少年の顔面にドロップキックを見舞つ  
一人の姿だった。

free side

思わぬ一撃を顔面にもひこくらし、数瞬のタイムラグの後、ふつと  
ばされる少年。

そんな少年を、どこか満足げに見つめているのは、飛鳥<sup>ヒナリ</sup>と桃香だ。  
二人して『やりきつた!』とも言いたげに、ため息をつくとフェ  
イトに向き合つた。

「そういうわけだから、良い子はおひいに帰りなよ?」「  
「」の間作つてたバッジ、次の機会にでも届けるから」

清清しそうな笑顔で後ろに倒れている少年を無視し、フェイトの手  
を握つて別れを惜しむ。

一方、突然のことには呆けていたフェイトは、はつと我に帰つて、な  
のはを見た。

なのはも同じくぽかんとしていたが、すぐに再起動。

桃香と同じくフェイトの手を握つて若干涙目になりながら別れを告げる。

アルフは状況が飲み込めず、ユーノとヒノコに助けを求める視線を送るが、流石のユーノも少々混乱している様子だった。

一方のヒノコは珍しくにこにこしながら我関せずといった状態である。

「あ、これしかないけどお土産ねーおかさんによろしく～

ユーリはまるで帰郷する年下の子にお土産を渡すようなノリで、フェイトの手にジュエルシーードを握らせた。

フェイトはかなり驚いた表情をしていたが、ユーリの背後で管理局を名乗った少年が立ち上がるのが見えてしまい、首を縦に振り、お辞儀をする。

「ふえ、フェイトちゃんーあの、気をつけてねー！」

「う、うん、なのはも元氣で」

注意がある少年に向かっていたからか、フェイトは見てしまった。握った手をぶんぶんと振るなのはの肩越しに、起き上がった少年にハリセンで容赦ない一撃をくらわせてくるユーリの姿を・・・・・。その如何にも楽しそうな表情にて、一瞬寒気を覚える。

「あの、色々ありがとうございました」

「ううんーまた困ったことがあつたら何でも言つてねー」「はいー」

離れたところで殺伐とした光景が繰り広げられているにも関わらず、かなりアットホームな雰囲気でフェイト達は送り出された。

「よし、それじゃああたしらも帰るのつか？」

「やうだね、士郎さん達に説明もしないと……」

「おこー！君達！」

そのままの雰囲気で帰ろうとした時、あの少年が杖を向けて叫ぶ。

「自分のしたことが分かつてはいるのか！？公務執行妨害だぞ……！」

「公務？え、じゃあ警察官か何か？」

「さつまもこつただるひー・時空管理局だ！」

再び少年の口からでた単語に、ユーノ以外はきょとんとした。  
何かを言いかけたユーノを、飛鳥<sup>ユーリ</sup>は口を押さえて黙らせる。  
つかの間拘束から逃れようともがくユーノだったが、ふと桃香と視線が合つ。

彼女は、見たこともないような表情をしていた。

表面は笑っているのに、内側では相当な怒りを溜め込んでいた。

「『えっと、ユーノくん、今の桃香ちゃんには話しかけないほうがいいかも』」

「『な、なのは…？』、どうして……』」

突然のなのはからの念話にびくつとなるものの、なぜかを問いかけた。

すると小さな苦笑いのよつた声が聞こえて、

「『だつて桃香ちゃん、すぐ怒ってるもん』」

さも当然のよつた返答に、ユーノは啞然としてしまった。

そんなやり取りを他所にして、飛鳥はおどけた態度を見せ、

「持久管理局・・・・・・・つて、何？」

「な、馬鹿な！魔導師なら管理局を知っているはずだ！…といふか、

『持久』じゃなくで『時空』だ！」

少年の台詞を終わった途端、連續して舌打ちをする音が聞こえた。その音源である飛鳥は、指を横に振っている。

「ダメだねえ～、まずはその固定観念からなんとかしないと」

「何！？」

「リンク園があるからといって、いつでもりんごが取れるわけでもないのと同じだよ？」

にこにこと笑いながら、桃香は田も笑っている笑顔で少年に睨みを聞かせる。

「つ、だが！君があの少女に渡したあればロストロギアだ！…何の目的で使うのか知っているのか！？」

「へえ、ジュエルシード以外にもそんな呼び方があつたんですね？」

「目的は知らないけど、あんなに必死な目えされちゃ、断るのが野暮つてモンでしょ？」

売り言葉に買い言葉、きつい表情を崩さない少年と、余裕の雰囲気を崩さない一人の攻防が続く。

だが、少年のほうは限界が訪れたらしい。杖を構え、切つ先に魔力を集中させる。

「これ以上の言い合ひはもういらない…」いつなつたら実力行使で…

・・・…！」

すると一人は急にため息をつき視線を交えると小さく頷きあつ。そしてにやりと笑つた。

三日月を九十度回転させたような笑みを浮かべて、くつくつと笑い出すと、

「ふふふふふふふ、どうやら調教の必要があるみたいだねえ？」

「ぐすくすつそうですね、ちょっと痛い目にあわせましょうか？」

見るもの全てを恐怖に陥れるよつな、そんな笑顔を向けて、個々の武器を構えた。

「大丈夫、殺しはしないよ？」

「苦しむのは一瞬であります、ですがそれ相応の痛みは感じるでしょうね？」

次の瞬間、ヒノコは魔法陣を開きなのはとユーノの視覚と、念話以外の聴覚を奪つ。

慌てる二人に大丈夫だと念話で伝えると、両脇に抱えてその場を去る。

最後にヒノコは見たのは、明らかに手加減した技で容赦なくじわじわと攻め立てる無邪気な一人の姿だった。

## 第一十一話ひみつを置くパソコンを思ふかべるよな？（後書き）

今回書きたかったのは、腹黒さとひつ氣が五割増の飛鳥と桃香でした。

一応言つておきますが、彼は生きてますよー？

あとわりげなく桃香の三つ目の能力を出してみたり　ｗｗ

さて、次回はおそらく管理局を接触です　ｗ

## 第一十四話専門家より上手の一般人（前書き）

こちらではお久しぶりです。

お待たせしました、二十四話ですよ～　～～

4／7：一部修正。

## 第一十四話専門家よつ上手の一般人

side 飛鳥ナリ

「へえ、こんななんなつてんだ」

「ナビ外の景色は好ましくないですね、ちよつと怖いです」

ふつふー、ゴーリ・ローウル」と一條飛鳥です。

や、あの黒い坊やにとどめ刺そつかなつてしてた時に、お偉いさんからストップがかつて。

とりあえずお話し（肉体言語じゃない方ね？）しようじゃなかつてことになつて、なのはちゃんとちも一緒に乗り込むことになつたんよね。

まあ、察しがいい人はお偉いさんが誰で、あたしらがどこののが分かつてるだろうけどね。

・・・・・ちなみに坊やはあたしが治した。癪に障つたとはいへ、母親に頭下げられたら、ねえ？

「やつだ君達、そろそろ武装を解除しても構わないよ、君も元に戻つたらどうだい？」

「うつわ、やっぱ治すんじゃなかつたか。

「何その上から田線」

「武装を解除？バカ言わないで下せー」

なのはわいやとゴーラくんは素直に従つてゐるけど、あたしらは簡単には解除しないもんね。

坊やがジト目でこつちを見てきた。

「だつてあたしらからみたら」は得体の知れない場所よ？宇宙人のいる謎の戦艦だよ？」

「油断できない場所で武装解除とか、自殺行為でしょ」

なのはちゃん含むちびっ子はともかく、年上であるあたしらがしつかりしてないとね？」

ちなみにヒノコは帰られた。

はやてを一人にさせるわけにはいかないからね。

「まあ流石に後ろからサクッはやらないから、大丈夫……多分」

「多分なのか！？」

坊やの突っ込みは全力でスルーね。

・・・・・おんや？ そういえば後ろが騒がしいねえ？

まあ予想付くけど。

桃香ちゃんと一緒に振り返ると、なのはけやんの隣にクリーム色の髪の美少年が・・・・・って。

「「なんだコーコーくんか」」

見事に桃香ちゃんとハモったwww

まあ、若干驚いてたっぽいけど。

それとハモつたりすると得した気分になるのはあたしだけ？

「ユーリさんと桃香ちゃん驚かないの…？」

「別に…？」

「魔力を探れば」

何事も冷静つて大事だよ～？

なのはちゃんは感心したような、びっくりしたような顔でこっちを見てきている。

するとユーノくんが、

「ね、桃香、ぼく出会った時この姿だったよね？」

「何を言うの？最初からフェレットだったよ」

「ええっ…………うーん…………」

考へてる考へてる。

BGMは木魚、これ王道ね。

「ああ、そりそりー。そりだつたー。」めんなのは、忘れてた  
「だよね？だよね！？よかつたあ～…………」

隣であたふたしてたなのはちゃんは、ツインテールをピロピロ動か  
してからはあーっとため息をついた。  
うん、誤解が解けたみたいだね。

「それじゃあ、そろそろいいか？」

「おーらい、『一応』よろしく」

主に坊やに向けての嫌味をたっぷりこめて返事してやった。

坊やに案内されて、とある部屋の入口にやつてられた。文字が何となく英語に似てたから、多分ここは応接室だね。

「艦長、失礼します」  
「どうぞ」

奥から女の人の声が聞こえてきて、みんなで入っていく。

「わっ」  
「わあ」  
「……」  
「あらま」

何と書つか……『和』が、たっぷり。  
……どうしよう、突っ込みどころがある。

その中に、正座で座っている女人人がいた。

「いらっしゃい、まずはそこに座つてくれますか？」  
「あ、はい」

すげえ、四人分の座布団も用意してある……じゃなくて……

「なして座布団？」

「あー、わざわざおわせたつもつなのだけれど……」

うーん、お気遣いは嬉しいんですけどちょっと時代遅れですね。

「初めまして、この次元航行艦アースラの艦長をやっています、リンディ・ハラオウンです」

知っていますよ♪ わ

「あ、高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「亜桜桃香といいます」

「ユーリ・ローウェル」

自己紹介されちゃったし、ここは返すのが礼儀でしょ。終わってから、ジュエルシードに関してのことを話してくれと頼まれたので、出来る限りのこととは話すこと。

と、

「『あの、ユーリさん、桃香ちゃん、フュイトリヤンたちのこと話したほうがいいのかな?』」

「『……いーんでないの?』」

「『ただ、あの子等はあくまで被害者ってのを伝えたほうがいいかもね』」

なのはちゃんは小さく頷いて、話し始めた。

少女説明中・・・。

「ほ、本当に入れおつた・・・・・砂糖とミルク!!

「では、コーノさんはジュークエルシードを回収しに来たのですね、なるほど・・・・立派なことだわ」

「だけど同時に無謀でもあるー。」

感心するコンドーリさんと対照に無謀と罵る坊や・・・・。  
「は、いいおるわ、小僧が。

「次元震起についてからのいやつてきたあんたらが吐く四詞じやないでしょ?」

「つおまえ・・・・!」

「クロノ!」

リンディさんは、あたしに食つて掛かってきたクロノを抑えてから、

「そいつえばみなさん・・・・コーノさんはともかく、あの世界出身のお三方がロストロロギアについて知っているのは何故ですか?」

「あ、そんなこと?」

「あたしの入れ知恵つす

「ユーリさんの？」

「はい、使い魔が出来てからどうも暇人になっちゃって、それで色々な世界を回っていて、気がついたらそんな知識がついてたって言つ。」

「…」

「そ、そつなんですか・・・・・」

？もしかして、驚いてらつしやる？

「普通個人で世界への転移は難しいことなんだがな」

「へえー」

ちなみに今の台詞は某泉を意識www

一通り話を聞き終えたのか、リンティさんが小さく頷いた。

「あなた方がやつてきたことは評価されるべきですが、管理局として一般人を巻き込むわけにはいきません」

「そんな！」

その口から出てきた言葉に、なのはちゃんが身を乗り出した。

うーん、とりあえず落ち着こうぜ？

ほらほら、膝がお茶にあたつたよ。

「まあ、こきなり言われても気持ちの整理がつかないでしょ」

うわ、きた。

あの名（迷?）台詞！

「四人でゆつくり話し合つてそれから答えを・・・」

「一般人を巻き込めないなら、何故話し合つんですか？」

「え？」

そーだそーだー! 言つたれ桃香ちゃん!!

「ぶつちゅけていいですか? 胡散臭いんですよあなた方、後からのこのこやつてきたくせに主導権を握るつとつて、そういうのはもうつけなく私たちを利用しようとしましたね?」

坊や、リンティさん親子の顔に、陰りが差しかけた。

「こなんなんだつたら、コーノくんやフエイトちゃんたちのほうがあつまつ優秀じやないですか? そう思ひません?」

「うふ、ちよつと桃香ちゃん・・・・・・」

なのはちやんの田が、流石に言つすがだと語つてこる。  
けどね、

「あたしも桃香ちゃんの意見ひさんせ」

「ゴーリさんまでー?」

「よく考えてみなのはちやん? ジュエルシード、本来はこいつらがなんとかしなきやこけない代物なんだべよ? それなのにこいつら、あの地震もどきが起つてからやつてきた上にあたしらの努力を利  
用しよつとしたのよ?」

あたしとしては『一年前』のこともあるから、余計に、ね?

「そんな奴等の言つて」と、聞いてやる義理はない  
「ええ、頼み」とがあるなら素直に言つたらどうですか?」

応接室が、静まり返つた。

沈黙が続いた後、突然リンティさんは田を閉じて、頭を下げる。

俗に「上位下座」でやつだ。

「か、母さん！？」

「確かに、わたしあなた方を引き入れようと考えていました」

うろたえる坊やを他所に、顔を上げるリンディイさん。

「遠まわしな言い方での勧誘、および到着の遅れに関して、深くお詫び申し上げます」

「ですが」と続けるリンディイさんの口は、覚悟でいっぱいだった。

「ジユエルシードの暴走体と戦闘したことのあるあなただからこそ、頼んでいるんです、どうか事件の解決に協力をしてください」

・・・・・まいったね、じつや本物だ。

「いや、断るのは野暮かな？

「やりますーやらせてくださいー」

「僕からもお願ひしますー」

『田の前』で、なのはなちゃんとコーノくんがリンディイさんに負けないくらいの上位下座を見せた。

二人の視線が、あたしと桃香ちゃんに向けられる。

答えは決まってる。

「それだけ言われて断るなんて、空氣読めないとしませんよー？」

「いらっしゃい、よろしくお願ひします」

同盟もじき成立やね。

リンティさんの田には、若干涙が浮かんでいた。

それを拭つてから、

「それにしても、コーツさんと桃香さんはしっかりしていますね、わらの子ももう一い年なんだからそれくらいになつて欲しいわ」

アットホームな雰囲気がわっと広がって、和氣藹々とした空気に変わつた。

そんな中で、リンティさんがそつ話しかけてくる。

「否定はしないっすけど、坊や何歳ですよ？」

「…………一応和解したとはい、坊やはいじりがいがありそうだからね。

「今年で14歳なんですよ」

「ふえつ！？」

つはつはつはーなのはちやん驚いてるなー（笑）

「えつと…………いたんだですか？」

れつきとは違う意味で沈黙が始まった。

といつあえず、故意にそれを破ることにする。

「つげ、年上かよ」

free side

「それでは、詳しい」とはまた後口と聞ひたので、

「はい、さよなら！」

リンディさんと田に見えてへこんでいるクロノに見送られて、『桃

香達は『出て行く。

『彼女』はその様子を、部屋の隅でじっとみていた。

「それじゃクロノ、あなたは反省文と報告書を仕上げてね

「・・・・・はい、艦長は？」

「ここ」の片付けをやつておくわ

「そんな！それは僕たちが・・・・・」

リンディはふふっと笑って、

「いいのよ、道具の片付けくらい自分でやるわ

「・・・・・分かりました

しぶしぶ、クロノが出て行った。

先ほどまでの騒がしさが嘘のように静まり返る。

その中でリンティはため息をついてから、

「人払い用の結界は張りました、もう出てきてもいいんじゃないですか？」

何もない、壁に語りかけた。

普通そんな所に話しかければ、何があつたと疑われるだろ？

返事が来るわけがない。

が、

「ははっ、さすが艦長を務めるだけありますね、気付いてたつか」

バリバリとパズルピースのようにして、空間が剥がれていく。  
そこから現れたのは、今しがた桃香達と出て行つたはずの。

「ども、リンティさん」

ユーリ・ローウェルだった。

ユーリはへらへら笑いながら、リンティに向かって会うよつとして座布団に座る。

「気付いたのはこの部屋に入つてから、ですが・・・・・いつから？」

「あんたから連絡入つて、こちに来るよつられてから」

しつと返された返事に、リンティはまた驚愕する。

数多の世界への個人転移といい、今見せた高度な幻術といい・・・・・

・。

「バケモノ、と呼ばれても仕方ないと思つのですが?」

「同感です」

リンディが入れたお茶を一口飲んでから、ユーリは姿勢を正す。射抜くような視線を向けながら、

「誘導尋問とかどうも苦手でね、率直に聞こいつ、あんたは『白組』? それとも『黒組』?」

「…………そこまで知つていてるんですね」

「言つただしょ? 暫人だつて」

何の悪びれた様子も見せず、再び茶を啜る。リンディは一呼吸おいてから、

「白組、と言つて信じもらひえるでしょうか?」

恐る恐る、たずねてみた。

ユーリは束の間黙り込んだ後、

「…………あたし、親がいなくてね、妹と使い魔の三人暮らしなんですよ」

「はい?」

苦笑いしつつ、ユーリは続ける。

「幼い頃なんかは、時折両親の遺産目当てに言い寄つてくる大人もいた、だからそいつが嘘ついてるかどうか、一目で分かる」

リンディの表情が引き締まつた。

ユーリは仕上げににやっと笑つてから、

「大丈夫、信じますよ」

それを聴いた瞬間、リンディの肺から一気に空気が抜けた。ヨーリはまた苦笑いしてから、

「あたしの用事はそれだけです、ああ、あと・・・・・・」

おもむろに、リンディの手にある砂糖のポットを指差した。

「砂糖もミルクも入れずに、緑茶本来の苦味と旨味を楽しむのが日本人のお茶の楽しみ方です、一度やってみるとおススメしますよ?」

「あらそりなの?、それはありがとうございます、今度やってみるわ」

ヨーリは満足そうに頷いてから、転移魔法でその場を去った。一人残されたリンディはまたため息をつく。

「敵に回らなくてよかつたわ・・・・・あの子、家族の為なら何でもやりそりやつたもの」

## 第一十四話専門家より上手の一般人（後書き）

お茶の楽しみ方に関しては適當です（）  
とりあえずまたフラグつぽいものをたてておきました。

## 第一十五話お久しぶりです（前書き）

お待たせしました、一十五話です。

## 第一一十五話お久しぶりです

side クロノ

ユーリたちが帰った後、僕、クロノ・ハラオウンとその相棒、エイミイ・リミエッタは先ほどの戦闘のデータを見ていた。

・・・・・・改めて見てみるとほんとに情けないな、僕は。あー、そこは右に撃てばよかつたのに・・・・！

「す」「いす」「ーーー！」四人とも魔力だけ見ればクロノ君以上！さりにユーリちゃんと桃香ちゃんの二人は実力もあるんだから、こりやクロノ君がやられてとーぜんだわ！」

・・・・・Hイミイ本人は心から感心しているようだが、聞いてると嫌味に聞こえなくも無いぞ。

「それにしても・・・・なのはちゃんとこちらもフヒイトちゃんたちも、ジユエルシード集めてる理由は分かってるけど、ユーリちゃんはなんでだらうね？」

「それはさつき聞いてきた、ユーリとしてはジユエルシードがなくなるならどちらにも味方するみたいだ」

「そうなの？」

「ああ、近所の平穏を齎かすものが無くなればなんでもいいとぶつちやけていたが・・・・」

それ以外に何が隠している感じだつたんだよな。

エイミイはふうんと、再びモニターに目をやってから、

「それと、一人・・・・特にユーリちゃん、身長高いよねー？十一

歳だけ？クロノより年下じゃん」

「それは言いつなハイハイ……」

おへしょつ・・・・・・・毎日牛乳飲んでるのに何で・・・・・。

「そのユーリさんから、クロノにアドバイスよ」

一  
あ  
艦長！

そこへゆき・・・・・艦長が入つてくる。

一  
体

「身長を伸ばしたいなら、牛乳だけじゃダメだそうよ？カルシウムは骨を丈夫にするだけで、身長は伸びなくなっちゃうからー

牛乳じゃ伸びないっていつのまか！？

「え、じゃあ何をどればいいんですか？」

「ダンパク質ですごく伸びて伸びての方を身長を伸ばすのに適しているらしいわ」

「へえー！博識なんですね、ゴーリちゃん！」

タンパク質か  
・・・・・・・・・・・・・

・・・・・なんだろう、大切なものをなくした気がする。

「それよりも、わたしが気になるのは・・・・・」

「彼のこと、ですか？」

「ええ」

ちゅうじゅーターー、フヒイトと行動していくとこの少年が『つて  
いふ。

母さんも僕も、思わず苦い顔をした。

「何故、彼からロストロギアの反応が…………？」

side 飛鳥スイナ

「こっくしゅ！」

ありや？風邪でもないのにくしゃみが…………。  
あ、掃除してるからか。

「飛鳥ー！こっちの棚動かすよーー？」  
「はいはーーー！」

今日は久々に剣道場に顔を出します。  
ほら、ジュエルシードとか便利屋とかでバタバタしてたからね？  
その便利屋のほうが起動にのってきたんで、余裕が出てきたんだよ。

「よ……っヒト、お疲れ」  
「お疲れです」

一緒に棚を動かしたお姉さんに声を掛けてから、また簞を手に取つた。

「この掃除も前はかなり慌しかつたけど、今じゃ門下生も増えて、余裕が出てきてるみたいだね。」

でも、こうものんびりしてると、あの忙しさが懐かしくなるわー。」

「一条、きていたのか」

「ん？ あー辻じやん、おひでー ウウ」

うわ、久々にこいつの顔見た。  
つかイケメンになつてないか？  
だからといって惚れたりはせんが。

「最近来てなかつたみたいだな？」

「ん、ちょっと便利屋始めてさ、他にも色々立て込んでたのよー」

一緒に床をはきながらへラへラ笑つておいた。  
辻は興味なさそうに、『ほつ?』と言つて、黙々と掃除に取り掛かる。

・・・・・・・・・んー、前々から思つてたんだけどさ、辻ってどう  
か老けてるよね？

これであたしと同い年だぜ？ 信じられるか？

「・・・・・・大変そうだな、体は無事か？」

・・・・・・・・なん・・・・・・・・・だとつ・・・・・・・・・・・・・・・?

「・・・・・・?どうした一条？」

「今日は雨でも降るか？ 天変地異でも起きるか？」

「は？」

呆ける辻を無視して、みんなに向かつて叫ぶ。

「ちょっとみなさん聞きましてー？『あの』辻さんから人を氣遣つ  
ような発言がとびだしましたよーーー？」

『な、なんだつてーーー？』

「ちょっと、おい！」

だつて、あの辻だぜーーー？」

くそ真面目で、稽古馬鹿で、困つてる誰かに相談されても『お前の  
問題だ』とかいつて突き放すよつた野郎だぜーーー？」

「変なものでも食つたかーーー？」

「熱でもあるんじやないかーーー？」

「あたし、体温計もつてくるーーー」

一気に道場の中がざわめきだして、騒がしくなつてきた。

みんなの中心で、辻がもみくちゃにされている。

・・・・・うん、面白いくwww

「おいー一条ーた、助けてくれー！」

「・・・・・むふつ」

「何だその笑いはーーー？」

「あー面白かったwww」

「お前…………」

真面目キャラがもみくちゃにされてあわあわしてゐのを見ると、こ  
やつとしちゃうのはあたしだけ？

騒が一段落して、みんな稽古に打ち込み始めた。

今日は練習試合みたいだね。

つか、

「ほんとに珍しいじやん？辻が人を気遣うなんてさ、何かあつたん  
？」

「…………やつこいつときもあるぞ」

「いや、あなたの場合はそれが異常だからみんな騒いでだわけなんだ  
ぞ」

「むう…………」

・・・・・・・・何かあつたな？

別に聞かない理由もないでの、聞いてみることにした。

「な、今までに何かあつたん？」

「・・・・・・・あつたといえばあつたな」

あらま？

じゃあ根掘り葉掘り聞いやいましょ www

「何々？おねーさんに教えてみんしゃい？」

「何故だ？あとなんだその九州弁は？」

「べつに～？それよりもほら、お話してみーよー？辻きゅーん？」

「むう・・・・・・・」

辻は少し泣つてから、ゆっくり話し始めた。

### side 辻

今から三田ほど前のことだ。

いつも通り稽古に行つて帰つている途中、カツアゲの現場に出くわした。

制服が聖祥付属のものだったから、狙われたんだろう。

その時は『そいつの問題だから』と無視したんだが・・・・・。

「何ガソつけとんじや我え！-！」

「・・・・は？」

とばつひとつを受けてしまつてな。

カツアゲされていた奴と一緒に不良に絡まれてしまった。

俺の問題となれば、自分で対処しないわけには行かないから、竹刀に手をかける。

「お、やるかあ？」

「やめておけよお、お兄さんたち、もつと怖いものもつてんだから・

・・・・・」

二人同時に動きがあった。

それなりに速い速度で、俺達二人にナイフを振つてくる。  
これは・・・・無傷では帰れな・・・・・つ！？

「・・・・・・・・・・・・・・

「なつなんだてめえ！？」

「おまえは・・・・・・・・つ！」

目の前に、突然女の子が現れた。

金髪であることから、日本人じゃないことが分かる。

それだけならまだいい。

俺たちが驚いたのは、彼女が指でナイフを止めていることだった。

「あ、あの君は・・・・・・・

「大丈夫、下がつて」

俺の後ろにいた聖祥付属生が、そいつに声をかけた。  
そいつはこっちに微笑んでから、不良と向き合つ。  
そして、

「・・・・・・・・・・・・・・

「はつ？」

「ぐるりー。」

・・・・・・・・・・・・信じられるか？

明らかに年下の子が、一瞬で何倍も大きい不良をのしたんだぞ？  
しかも確実に人体の弱点を付いている。  
こいつ、やるようだな・・・・・・。

「あのー」「めん、助かつたよー。」

「いいの、無事でよかつた」

少女は聖祥付属生に向けて微笑んでから、じつちを見た。  
そして同じように笑って、

「あなたも、怪我はない？」

「あ、ああ、お陰でな」

「うん、よかつた」

そのときの笑顔を見て、何と言つか、顔が火照ったといつか・・・・・

それまでの自分を変えてみたくなつてな。

今でも時折、彼女の顔を思い出す・・・・・・・・・・・・?

「おー、どうした？ 一條？」

ぽかんとしている一條。

ためしに田の前で手を振つてみると、なんの反応もしませない。

・・・・・・・・・・・・ビーッしたんだ？

「・・・・・・・・・・・・」

・・・・・?

一体何が

「みんな大変だーっ！…辻に春がキタ

ツ！…！」

side ???

「ふつくしゅ…」

「風邪か？」

「かなあ？」

ハンカチで口元をふいてから、一息ついた。

直後に視線を感じたので、なんとなく夜一さんを見てみる。  
ちょっと怖い顔・・・・・つてまさか。

「お主、この間街に出たじやうへ。」

「なつなんの話かな！？」

「動搖しておる時点でバレバレじゃ、まつたく、あやつり出なによ

「う、うす、ぱく言われておるじや わい  
「だ、だつてひまなんだもん！」

「田中お部屋の中じやつまんないよー」

「あと少しばかり我慢すればいいじゃろ？」「体に魂魄が定着するまで、最低半年はかかるんじや わ？」

「うううー・・・・・・」

・・・・・半年、かあ。

今の中からやること考えとかないと。  
まあ、いくつかは決まってるんだけどね。

「ふつふーーーんにーうはーーー！」

あ、アスカさんだ！

「んにーうはーー！」

「おっすーおひさしー」

アスカさんの手になにか袋が握られている。  
何だらう？

「ん？ああ、気付いた？」

そういうて、アスカさんが出してくれたのは・・・・・・アイス？

「ブックモ ブラ、九州地方某県の『当地アイス、食べる？つていうかそれ目的で持つてきたんだがなwww」

「食べる食べるーーー」

「夜一さんもびつぞー」

「む？ああ、いただこう」

みんなで、そのアイスを食べぐるーとになつた。

山がプリントしてある青い袋を開けると、チョコチップがトッピングしてあるアイスが出てくる。

んー、おいしい！

アイスに舌鼓を打つていると、アスカさんがこっちを見て、

卷之二十一

「つむぐ！」

「おぬしが何故その事をしている？」  
わしはとせかく

「いや、うちの知り合いがあんたを見たつていつてるからあ。

「あの時助けた剣道の人かな？」

多分、一言が間違いなくそれ

偶然だね、アスカさんの知り合いだつたなんて。

するとアスカさんはため息をついて、「それよりも・・・・」と、

「暇だつても分からなくも無いけど、退くべきところは退いてち

「むう・・・・・はーい

「あ、そこまで暇してるならちよつといいかな？あなたの服装の試し斬りがてら、ちよつと連行しようかな」と思つてたから

・・・・・・・・?

それって・・・・・・・・・・・・

「ホントー!?」

「ほんとほんとおー、つまでもおねーさんがよく行つてゐる世界だけ

どいや

「わあーーー！」

楽しみだなあ！

side 桃香

「じゃあ、連絡してくれたんだね？」

「うん、近い内に向こうと合流するって

「了解」

今コーコーくんと話していたのは、管理局からきていた協力要請について。

元々断る理由も無かつたのですが、士郎さんや桃子さん達に説明する必要があったので、そのための時間をリンディさんからいだいていました。

それで、無事で帰つてくることを条件に、承諾してもらいました。けど、ちょっとした心配が。

家族に許可をもらえたのはよかつたけど、リンディさんになんて話そうかってこと。

・・・・・え？ 言葉は通じるだろ？ 何言つてるんだ？  
いや、だって、ひとつと向こうで文化が違うのは一目瞭然。  
こつちでよしこれていることだが、向こうではタブーだったりどうするの？

それに向こうは提督なんだから、失礼があつたら大変でしょ？  
そういうことで、連絡はコーカくんに任せました。

協力する姉はちゃんと伝わったようで、一安心です。

あ、ちなみにコーカくんは人間形態だよ？

この間の一件で、人間形態に戻れるくらいに回復していふつてことが分かったので。

「・・・・・で、何日くらい向こうにいるんだ？」

たまたま隣にきた恭也さんがそう聞くと、

「だいたい十日くらい、桃香達の学校はエスカレーター式だから一応進学に差し支えは無いと思つけど……」

そうコーカくんが説明する。

「そつか、じゃあ大分けついつ長い間空けるんだね」「うん」

そんな美由紀さんとののはちやんの会話を聞きながら、恭也さんは少し寂惜しそうな顔をして、

「それじゃあ、久しぶりに模擬戦やるか？動かしておかないと、鈍つてしまつぞ？」

「あはは、はい」

side 雪斗

「『ヒューウェーで、そつちは簡単につかまらない』ように気をつけ

?ジユエルシード見つけたら、最優先でそつちに流すから』」

「『分かった、すまないな』」

「『いんや、別にw?あたしはあくまで中立だかんねwww』」

あれから数日。

つこをきほどまで、コーリに管理局の方針を教えてもらっていた。本当はいけないことなんだろうが、今はそれがありがたい。

(自分の身はともかく、フロイトお嬢様がいらっしゃいますものね)

(運べ言やあ、お荷物だな。)

オーナー一人の眩さにため息で返してから、フロイド達のほうを見た。

「じつやう、アルフに逃げようと説得されてるようだつたが、フロイドは首を横に振つて拒否してゐるようだ。」

その後何度も提案し続けるが、平行線をこねばかりだ。

「もう一雪斗からも何か言つしゃつてくれよー」そのままジヤフロイトが・・・・・。」

「俺はフロイドの意見を尊重するな」

「ちよひー。」

今にも噛み付かねうなアルフを抑えてから、

「逃げたといひでじうなる? 今度は管理局と、プレシアの両方から負われるに決まつてゐた」

「プレシアにとつて貴重な駒だし」と、フロイドには聞き取りにくい声で、アルフにそう告げる。

アルフはやりきれないような顔で押し黙つていたが、そのまま立ち上がり、その場を去つてこつた。

「ユキ、ちよひと雪こすぎじゃ・・・・・。」

「まあ、そうかもしけんな・・・・・けど、アルフなりにお前を気遣つた結果なんだから、頭いりなしに否定するなよ?」

「・・・・・ん」

s.i.d.e 刀護

「でやああああああつーー！」

「…………」

俺が繰り出した一閃で、田の前の虚が倒れる。  
ため息をついて、斬魄刀を納めた。

閑話休題。

「お茶、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

場所は変わつて浦原商店。

居間で寛がせてもらつていると、爾さんがお茶を出してくれた。  
お礼をいつてから、早速一口。  
んー、この人が入れるお茶つて、おいしいんだよなー。

「はあ・・・・・・」

ため息を一つ、ついた時だつた。

「ほらほらーー！」

「・・・・・・・・」

「」の声は・・・・・・・・

「」んこにちせはせやしてサン、おやへー、」かうの方は?」

「あ、最近うちに住み始めた子ですー。」

やつぱりか・・・・・・・・

・・・・・・何か知らないけど、最近はやてと顔合わせるのが照れく  
さく感じている。

表からは、はやてと浦原さんの会話が聞こえていて。  
どうも今日ははやて一人じゃないらしい。

一体・・・・・・?

「ヒノコ、とお呼び下さー」

「ヒノコサンですね、了解つす

ヒノコでこうのか、声の感じからして、高校生とか、そのくらい・  
・・・・?

「いつもどおり、五百円分ですね?」

「はーー!」

「あ、それと、刀護さん来てますよ?」

ちよつ、浦原さんー? ?

「ほんまですか!?」

「はー、ちょうど居間にいらっしゃいます

何で教えるのかなあ!?

俺は隠れているから、はやて達の声しか聞こえないけど、嬉しそう  
にしているのが手に取るように分かる。

「お嬢様、会計はわたしが済ませておきますから、どうぞお友達の  
といりへ」

「あ、「めんな、お願いや」

「はい」

ガラガラと車椅子の音がこすれに近づいてきて・・・・・。

「とー「ぐーん!」

「おわあつー?」

抱きつかれ・・・・・・つて!――

「ちよつとはやでさん!?なにしてらっしゃるんでー?」  
「あー、ごめんなー、久しぶりに会うたから、つい・・・・・・

つこつて、この子は・・・・・・。

「あの、あかんかった?」

「つ、いや、別に! ただびくりしただけだからー!」

「ほ、ほんまに? 迷惑やなかつた?」

「大丈夫! 大丈夫!」

するとはやでが、へにゅつと笑つた。

「よかつたわあ、嫌われたか思つた」

「あ、ははつ・・・・・・」

もう、乾いた笑いしか出でこない、うん。  
でもまあ、こいつのもいいかもな。

と、やうく、

「お嬢様、お待たせしました」

「あ、」苦勞さんや

はやてと一緒に來たらしい女の人、が入つて來た。  
銀色の長い髪で、毛先は桜色になつてゐる。

つていうか、

「お嬢様？」

「えつと、何とこつか・・・・・・一応関係としては、おねーちやんの、従者さん? けど、つむぎはそんなん気にせんよ。」

「初めましてヒノコと申します、お見知りおきを」

「あ、」、「ひらり」と、黒崎刀護です

正座して、深くお辞儀をされたので、思わず「いつもも返してしまつた。

何というか、丁寧な人なんだな。

「もへ、もつちよつと碎けた感じでもええって、いつもやーといふやん」

「お葉ですが、他人であるからいへ、礼儀を重んじなければ

帰つてきた言葉に、はやはて苦笑していた。

side なのは

「それじゃあ、しばらく会えないんだな？」

「…………ん」

わたしは闘夜くんに、しばらくの間用事で会えないことをお話ししていました。

さすがに、魔法のことは話せないから…………。

「それは、寂しくなるな」

「…………『めんなさい』」

「別に、お前が謝ることじゃないだろ？」

わたしが謝ると、闘夜くんは少し笑って、頭を撫でてくれた。

ちなみに右腕の包帯は無くなっているから、怪我はすっかり治ったみたい。

ここ最近、夕方になつてから、闘夜くんと一緒にいるのがわたしの日課になっています。

さすがに始めは練習の邪魔になつていなか不安だったけど、本人が、

『誰かに見てもらつてたほうが、癖とか直し易いだろうから

つて言ってくれて…………。

それ以来、ここにずっと来ています。

「…………ありがとう」

「どういたしまして」

いつも笑うときは控えめに、少しだけだけど、暖かくて。  
家族といふときはまた違つた暖かさを感じる。

「…………ふにゅ」

「む？すまん、何か妙な所を触ったか？」

「あ、だ、大丈夫！どこも触つてないよ！？」

「そうか、それはよかったです」

そう言って、撫でるのを続ける闇夜くん。

・・・・・わたしは人殺し、だけど、いつも時間が過ぎぐら  
い、いいよね？

## 第一十五話お久しぶりです（後書き）

今まで影が薄くなつていた人々を出してみたり。

辻くんは元からレギュラーに決まつていましたwww  
本編で出てきたアイスは実在します。

だから伏字にあるんですwww

所々で桃色空間になつているのは、その通りと書つことで一つ。  
誤字脱字があれば、ご指摘お願いします。

27万hit記念!『遠い世界で』(前書き)

## 27万hit記念！『遠い世界で』

森の中、誰も訪れないような深い場所。

「…………」

古ぼけた建物の前に突つ立つて、それを見つめる人物が一人。やけに緊張した面持ちで、その中へと入つていった。

扉を開けると、生暖かい風と共に、かび臭い臭いが鼻をつく。完全に開ききり、息を呑んで、一步一歩、慎重に進み始めた。

ことの始まりは、数日前に届いた任務だった。

最近になつて発見されたらしいこの建物の内部に入った調査員が、必ず怪我をして帰つてくるといつ。

その特徴は、ダークグレーの髪に空色の瞳だと言うのだ。

人物 少女は、その特徴に心当たりしかない。

故に、調査員を襲撃している『者』の正体を自身の目で確かめに来たのだ。

時折遺跡の特徴をレポートに纏めながら、仕掛けやトラップを描い潜り、前に進む。

突然、開けた場所に出た。

位の高い者が使用していたであろう部屋。

奥の方、玉座と思われるイスに、そいつは座つていた。

イスが薄汚れているからか、後ろから日の光が当たつていてるからなのか。

その姿は、圧倒的な威厳とプレッシャーを纏っていた。

「…………へえ、あたしを見て驚かないか」

頬杖をつきながら、彼女は口を開く。

相手をおちょくるような、余裕たっぷりの口調だ。少女は思わず刀を投影し構えて、彼女を見据える。

「くすぐす、あたしと戦うってか？いいじゃん、おもしろそーじ  
やん」

言つと彼女は立ち上がり、少女と同じく刀を投影した。

少女は、彼女が自分と同じ技術を使つたことに驚愕しながらも、納得したような、信じがたいような表情をする。するとまた彼女はくすぐす笑つた。

「ぶつちやけた話、あたしだって信じがたいよ？けど、ビリヤリ現実っぽいしね」

空気が引き締まり、両者ともに、腕をだらりと下ろす。

これが彼らの構え、隙が大きいように見えて、幅広い範囲で応用が利く形のそれを取りることで、ピアノ線が伸びきるような感覚を覚えた。

数秒だけ、世界の音が消える。

どれほどの時間が経つたのだろうか？

やがて建物の外で、木の葉が揺れる音が聞こえたとき。空間いっぱいに、金属が打ち合つ音が鳴つた。

「見せてござりん？」先祖様がきつちり指導してあげる……。

先ほどより高い金属音が続けて三回、まるで合図せ鏡のような動きで、二人は刀を打ち合つ。

同じ色合いのダークグレーが宙に舞い、同じ色合いの空の瞳が相手

を捕らえ続ける。

彼女の横一閃、少女は屈んで避ける。

少女の縦一閃、彼女は受け止めて弾き返す。

大道芸のようにも見えるそれは、見るものを魅了すること間違いな

止まない打ち合いの中、彼女は鎧迫り合いを突然切り上げて後退する。

「なるほど、刀は合格レベルだね？じゃ、次いこつかー！」

トレス・オン  
具象・開拓

具象  
開始

刀を破棄し、次に両者が出したのは白黒の双剣。息つくまもなく、再びぶつかつた。

今度は斬り合い、互いに斬撃の嵐を浴びせかけ、相手の攻撃を防ぎ、避けて、受け流す。

鶴翼二連つ！！

「ウルフ」

— १ —

すれ違はずまに斬。

両者の体に傷がついた。

だが共に怯まず、次に投影したのは弓。

黒く無骨な形をしたそれを  
華奢な勝て枝で引ひ締つた

# 「赤原猶犬！」

放たれた矢同時がぶつかり、爆ぜる。

発生した爆煙をかき分けるように、飛び出して、再び投影した双剣を投げ飛ばす。

今度は違う場所から出血、顔をしかめる少女に対し、彼女は笑っていた。

まるで、子どもの成長を喜ぶ親である。

「はっはあーお嬢ちゃんやるねえ！」

互いに双剣を破棄。

一定の距離を取った両者は、足元に魔方陣を展開させる。

「熱く滾りし炎、聖なる獣となり不道を喰らい尽くせ！」

「集え暗き炎よ、宴の客を戦慄の歌で迎え、もて成せ！」

フレイムドラゴン！  
ブラッティハウリング！

湧き上がる瘴気と、炎の龍が激突。

室内の温度が急上昇し、一瞬で汗が大量に湧き出す。

少女は怯まず、次の言葉を紡いだ。

「ナイン・テール・フォック！真実知る精靈の導きー己の耳で、足で、目で、しかと確かめよ！ナウマクサンマン・ダバサラダンカン！受けよ、明王のいかづち！」

「つ我を取り巻く六つの星よ、万物を阻む光の盾となれ！」

とつさの判断で、彼女は防御魔法を唱える。

刹那、轟音と共に光の斬撃が結界を攻撃。

彼女はなんとか耐え切るも、大破した結界は存在しきれなくなり、自壊する。

「I am the bone of my world!—」

しかし彼女は再び防御を展開、今度は大輪の花を構えた。直後、空気を引き裂く音をたてて、稻妻が襲い掛かった。

「じゃあいつちの番だ！」

攻撃が止むと同時に、彼女は詠唱を開始する。

「オン・アラ・ハシャノウ！文殊の名において、その闇今ここで祓おひで！」

パキンッと、指を鳴らすと同時に少女の頭上に現れたそれは、聖水を滝のように落とした。

一方の少女は、若干湿りはしたものの、防御には成功したようだ。使った札が力を失い、ただの紙になるのをみながら、少女は彼女を見据えた。

彼女は少し考えるような、何かを思い出しているような素振りを見せている。

そして、満足そうに頷いた。

「ん、オールおっけー！いやー、事故ってたまたまここに来たとはいえ、面白かつたわー！」

詠唱破棄、ナイチンゲール

ふわっと、彼女が発動させた術が、傷を治癒させる。

まるで始めから傷など無かつたような、その精錬度に、少女は感嘆の声を漏らしていた。

その様子を見ていた彼女は、やがてブツブツと音を立て、なかなか

「写らないテレビのようにそのままの姿をぶれられる。」

彼女は自分の手を見て、苦笑いした後、少女を見つめた。

「ほんに強いのがあたしの子孫なら、大丈夫か……いや、未来にこれるなんてなかなかない体験だからね！悪いとは思つたけど、ちよーっちは試さしてもらつたよ？」

へらへらと笑う彼女はなおも続ける。

「つーか、まさかの西洋魔術まで使う系？うは、下手したらあたしヨリチート？え、何コレ、あたし心配するだけ無駄ってか？」

彼女の下半身はほとんど消えていて、せじずめ、幽靈を思わせた。顔を七変化させながら、また最後に笑つて、

「えじや、おねーさんさいの辺で、まつたこち～～～

元々出合つことなどありえない。

それを分かつているはずだったが、それでも口にしたのは『また

とこう言葉。

少女も照れくさそうに笑いながら、手を振り返す。

「・・・・・・・・あ」

顔まで消えかかつたところで、彼女は思ひ出したように声をあげ、少女を見た。

「お嬢ちゃん、お前は～？」

「・・・・・わたしだ」

ブツンッと、音が遮断される。

だが唇の動きは見えた。

彼女はまた笑つて、

「いい名前だ」

## 27万hit記念！『遠い世界で』（後書き）

そこ、思つたより短いとか言わないの！

いや、はい、これ書く前に、ポケン金銀のレッド戦の曲聞いてたら、思い浮かんだつす。

あと、同じ動画にあつたキャッチフレーズの『原点にして、頂点』つてのにビビビッと来て・・・。

今回登場人物は一人だけですが、二人が何者かはみなさんのご想像にお任せしました。

最後に、なかなか更新できないにも関わらず、27万になるまで読んでいただきいた皆様に、感謝を！

ありがとうございます、これからもよろしくお願ひします！

## 第一一十六話選択と秩序

free side

アースラ、会議室。

「というわけで……本日の時を以つて、本艦全クルーの任務は、ロストロギア『ジユエルシード』の捜索と回収に変更されます」

スタッフ達は少し変わった形のテーブルを囲み、真剣な面持ちでそう宣言したリンディの次の言葉を待つ。

「また本件においては、特例として、問題のロストロギア発見者で、結界魔導師でもある…………」

「はい、コーノ・スクライアです」

緊張しているのか、コーノの声は少し上ずつている。

「それから、彼の協力者でもある現地の魔導師さん」「た、高町なのはです！」

「亞桜桃香です」

立ち上がり自己紹介した三人を見て、リンディは少し頷いて、

「以上三名が、臨時局員として事態に当たってくれます」

「不束者ですが……」

「よろしくお願ひします」

三人そろって、お辞儀をした。

その時、たまたまクロノとなのはの田<sup>ハタ</sup>が合<sup>ハ</sup>つ。なのはが人懐<sup>ハ</sup>く笑<sup>ハ</sup>つて見せると、クロノは顔を真<sup>ハ</sup>赤にしてそっぽを向いた。

何があつたのかと、ぽかんとするなのはに対し、ユーノは何処か不満<sup>ハ</sup>そうにしている。

(・・・・・)「ヨーロッパさんがいたら、絶対からかうでしょうね)

(あの人ならやりかねないよ・・・・・)

アースラ、船橋。

「ここからは、ジュエルシードの位置特定はこちりでやります、場所が分かつたら現地に向かってくださいね?」

「はい!」

リンディに力強く返事するなのはとユーノ。

桃香は声にこださないものの、黙つて頷いてこたえた。  
と、そこへ、

「艦長、お茶です」

「ありがとう」

リンティはエイミイが持つてきた湯のみ（日本を意識しているのか、でかでかと『湯』の一文字が書かれている）を受け取り、一口。その様子を見ていたなのは少し考へ込んでいゝよつた表情をしていた。

「?.どうかしたの？なのはちゃん」

「ああ、いや、その・・・・・・」

わたわたと慌てるなのはを見た桃香は、苦笑いしてから、変わりに指摘することにした。

「今日は砂糖とミルク、入れないんですか？」

「ああ、実はこの間、ヨーリさんに日本のお茶の楽しみ方を教えてもらったの、お砂糖もミルクも入れないのが日本流でしょ？」

「ええ、まあ、そうですけど・・・・・・」

「どうか、いつの間に？」

またぽかんとするなのはに対し、リンティは微笑んで答えてから、思い出したよつて

「やつ言えばなのはさん、桃香さん、学校の方は・・・・・？」

「あ、はい、家族と友達には説明してありますので・・・・・」

一方その頃、聖祥大学付属小学校。

「どうわけで、高町さんは家庭の事情で、しばらく学校をお休みします」

「だが、病気や怪我や、不幸なことがあって休むわけでもないそつだから、心配はするな」

なのはと桃香の教室で、一人の欠席が担任から告げられていた。

「高町さんがお休みの間、ノートとプリントは……」「はい！わたしが！」

なのはのクラスで、そつ手を上げたのはアリサだ。

「それではアリサさん、よろしくお願ひしますね」「はい！」

担任は頷いてから、

「さて、それではホームルームを始めましょう」「きつーつ

号令がかかり、クラス全員が立ち上がる。そんな中、すずかは一人外を見て、思つ。

(なのはちゃんと桃香さん、元氣でいるかなあ)

某所。

桃香達の田の前にある結界の中で、鳥型の暴走体が暴れている。美しさゆえにおぞましいそれに、なのはとゴーノは少し怯んでいる。よつだつたが、桃香は違つた。

自らの傍ら、半透明となつて出てきている『者』に声を掛ける。

「いけるね？ シルフ、セルシウス」

誰の使役精靈だと思つてい  
任せください。

桃香は一人に微笑んでから、なのは達と向き合つた。

「二人とも、いつも通りにいけば大丈夫、ただ、油断も無理も禁物だからね？」

「はい！」

「もちろん！」

三人で頷きあつてから、結果内に飛び込んだ。

「なのはちゃんはシユーターで翻弄！ コーノくんは隙を見て捕獲して！ セルシウスは一人のフォロー！ シルフは槍と融合！」

「わかつた！」

「まかせて！」

承知！

御意！

素早く指示を飛ばし、シルフの宿つた槍を構える。

なのはがシューターで追い込み、鳥が攻撃した際に発生する流れ弾をセルシウスが処理。

そのお陰で集中できていたユーノは、捕縛の準備が整う。それを確認した桃香が鳥の背後に回った。

シルフの加護もあり、移動速度はフェイトに勝るとも劣らない。一閃が鳥の翼を両断し、飛行不能にする。

それでも片方の翼で飛び回る鳥を、ユーノが鎖で捕縛した。

「つかまえた！なのは！」

「うん！」

なのははレイジングハートを封印形態に変形させ、帯状の魔力を鳥に向かわせる。

帶は鎖と共に鳥に絡みつき、その頸にシリアルナンバーを浮かび上がりせた。

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアル8！封印！…」

号令と共に宙で待機していた残りの帶が、突き刺さる。鳥は断末魔の悲鳴を上げて、消えていった。

「状況終了です、ジュエルシードナンバー8、無事確保！お疲れ様、なのはちゃん、ユーノくん、桃香ちゃん」

「はーい！」

「お疲れ様です」

船橋にいたスタッフは、三人がそろつて「」とモニターで確認してから、

「ゲートを送るね、そこで待つて！」

成り行きを見守っていたリンティは、満足そうに唸つてから、

「三人ともすゞこ資質だわ、このままつむけ欲しいくらいかも」

閑話休題。

船橋とは別室で、ハイミーはフロイト一味について、調査を進めていた。

「フロイトちゃんって言つたつけ？」の子」

「ああ、それにかつての大魔導師と同じファミリーネーム……。」

「へえ、そつなの？」

「大分前の話だが、ミッドチルダの中央都市で、魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして、追放されてしまった大魔導師」

クロノの話に、ハイミーは感心したよつな声を漏らしてから、

「じゃあフロイトちゃんはその関係者？」

「そつとは限らない……が、なのは達が言つていたことが本当なら、彼女は少なからず虐待を受けていることになる」

ハイ//イは納得しながら、フロイトに関する身辺関係を検索にかける。

しかし出てきたのは「データが無い」とを表す赤い文字だった。

「あー、やっぱりだめだあ・・・・・フロイトつかん、よつまび高性能なジャマー結界使つてるみたい」

「使い魔の犬・・・・多分」につがサポートしているんだ、それと・

・・・・

「雪斗くんもだね」

次にモニターに表示されたのは、アルフと雪斗。

アルフは狼形態で立っている。

「おかげで、もう2個もこいつちが発見したジュエルシード奪われちゃってる!」

「いや、それはフロイトたちだけじゃないだろ!」

そうこうしてクロノがパネルを操作。

出でたのは、ダークグレーの短髪を揺らす少女。

「コーリ・ローウィルちゃん、だつナ?」

「ああ、奪われたうちの一つは、コーリが先に回収して、それを譲渡しているみたいだ」

「ほんとにジュエルシードが無くなれば何でもいいんだ・・・・

呆れるハイ//イを他所に、そこまで話しあったクロノは一息ついでから、

「しつかり探してくれ、頼りにしてるんだから」「はあ、はいはい・・・・」

アースラ廊下。

三人が割り当てられた部屋に向かっていると、なのはが突然立ち止まつた。

桃香とユーノも、吊られて立ち止まる。

「どうしたの？」

「……………フエイトちゃん、現れないね」

「ああ、ijuちゃんは別にジュエルシードを集めているみたいだけど・

・・・」

「うーん……」

静かな湖畔。

その岩の一つに、フエイトはただずんでいた。

そこへ、ひとしきり捜索を終えたらしい雪斗とアルフが戻ってくる。

「だめだ、ここも空振りだよ」

「どうやら先を越されたらしい」

「……………やつ」

その報告を聞いたフェイトは俯いて、残念そうに呟いた。

「やつぱ、向ひ見つからぬよひ隠れながらて書つのは、

なかなか難しいよ

「今まで続くか・・・・」

「…………うだね、でももうちょっと頑張る」

そう言って、フェイドは徐に腕に巻いていた包帯を解いた。

先日ケロノに攻撃された際に付いた傷だ

黙々お隣で黙なきを得たとは云ふ

フェイトはそれを、どこか決意した顔で見つめていた。

「おお～！」

Side 飛鳥 ユーリ

ジーも、ユーリ・ローウェルこと、一条飛鳥です。

今何やつてゐかって？怪物狩人の醍醐味、肉焼きだよ！！

ジユエルシード探索は、現在はフェイトちゃんらに加勢してゐるわけ  
だけども、管理局に本腰入れられるのも怖いので今はなりを潜めて  
います。

・・・・・いやね、組織は胡散臭い部分もあるから信用できな  
いけど、個人に比べたら力はその倍以上。

ぶつちやけ、この世で一番やつかいなものだと個人的に思つてゐる。  
さらに相手が次元世界を股にかける时空管理局だぜ！？  
逃げ切れるとしても、次第にこっちが手詰まりになつてはいゲーム  
オーバーってなるのは、洒落にならん、まじで笑えん。  
というわけで、こないだフェイトちゃんたちにジユエルシード渡し  
たとき以来、ずっとなりを潜めてますです、はい。

そんなこんなで暇だつたので、はやてと一緒にプチバーベキューを  
つてたり・・・・・。

「いただきまーす！」

手を合わせて、肉にかぶりついた。

作法？むしろそんなやつてる方がおかしいって！

こうこう肉はかぶりつくのが作法！

・・・・・すみません、なんか壊れたね、うん。

それについても、『あの子』の復活とか、装備とかも無事決まつたし、  
いい感じに原作破壊できるわ～。

あとはプレシアさんと祝福ちゃんだけかな？  
よーし、おねーさんがんばっちゃうぞー。

「おねーちゃん、お野菜いる？」  
「ピーマンとにんじんくれ

「せこなー。」

とつあえず今は腹<sup>はら</sup>じゅう<sup>し</sup>やね。

・・・・・・・・「うん? ヒノ口?」

あの子は故郷で『あの子』のお世<sup>よの</sup>りやつてゐる。

つつても聞き分けのいい子だから、そんなに苦<sup>くる</sup>がなしだこと思ひつか  
どね。

「《ゴーリさん》」

「《ん? 桃香ちゃんか、どしたん?》」

「《いえ、ただ・・・・・》」

念話を飛ばしてきた桃香ちゃんは、少し黙つてから、

「《残りのジュエルシードが、六個になりました、けど、場所が分  
からなくて・・・・・・ゴーリさんなら、分かりますよね?》」

「《なるほど!、それで『原作』しつてるあたしを頼つてきたわけか

》

「《ええ》」

残り六個・・・・・・ひとつひとつといふことは、『あれ』か。

フロイドちゃんが無茶やつて、リンディさん<sup>さん</sup>が見捨てよつとある『

アレ』。

したら・・・・・海の中つてことになるな。

でもそのまま教えるのは面白みがかかる・・・・・・ん。

「《あんまり原作壊すのも何かつて思つから、ヒントだけでいい?》

」

「《お願いします》」

「《んじゅ、一回しか言わないからよーく聞いてよ~》」

桃香ちゃんの返事を確認してから、

「《灯台下暗し》」

side なのは

『HマーージHンシーネ… 捜索範囲の海域にて、大型の魔力反応を感知  
!』

ゴーくんたちとお話ししていると、艦内で警報が響いて。

『なんだとしたら…あの子達…』

急いでリンクトイさんのところに行くと、やつはハイハイちゃんが叫んで  
いるのが聞こえた。

みんなと一緒にモーターを見て、

「…………フハイトちゃん」

side 桃香

モニターに向ひついで、大きな儀式魔法を発動させていたフロイトちゃん。

まさか、あそこに残りのジュエルシードが…………？

灯台下暗し

わざとユーリちゃんに教えてもらひたヒントが、頭をよぎる。  
もう、なんでもうと早くユーリさんに聞かなかつたの…………  
！？

「何とも呆れた無茶をする子だわ！」

隣で、リンディさんが呆れ半分、心配半分の声でそつと囁く。  
確かにあれは無茶だ、魔力が大きいとはいえ、所詮九歳の体。  
今ので絶対に限界を迎えたはず。

雪斗くんやアルフさんもいるんだろうけど、放つておいたら確実に・  
・・・・・・

「あの、リンディさん！わたし急いで現場に・・・！」

「その必要はないよ」

抑えられなくなつたのか、なのはぢゃんが転送ゲートに向かう。  
けど、クロノくんはそれを止めた。

「放つておけば自滅する、仮に自滅しなかつたとしても、力を使い果たしたところを叩けばいい」

「そんな！」

「今の内に捕獲の準備を！」

「了解！」

呆然とするなのはちゃんを他所に、クロノくんはクルーに指示を飛ばした。

モニターに向ひついで、ジュークエルシードと戦うフォイトちゃん達。雪斗くんやアルフさんが必死にサポートしているけど、正直いっていいっぱいみたい。

そんな光景を、なのはちゃんは心配そうに見つめていた。

「わたしたちは、常に最善の選択をしないといけないわ、残酷に見えるかもしれないけど、これが現実……」

確かに、秩序を守るために、時に残酷な選択をしなければいけない。

・・・・・けど、それは『組織』で考えた場合。個人としては、納得できない・・・・・！

「・・・・・シャドウ」

――――――

ゆらりと、わたしの影から闇精霊『シャドウ』を呼び出す。それからなのはちゃんに念話を飛ばした。

「《なのはちゃん、いつか》」

「いつか振り返ったなのはちゃんは、シャドウを見て驚いていたけ

ど、味方だつて理解したみたい。

叫びそうになつた口を、なんとか塞いでいた。  
続けてユーノくんに田配せして、頷きあつ。

それからまたなのはちやんを見て、また念話を飛ばした。

### side なのは

「《これからシャドウの能力を使って、フロイトちゃんのところへ道をつなぐ、けど、それをしたらわたしたちは命令違反つてことで処罰される》ことになる……それでも、いく~》」

そひ、桃香ちゃんは真剣な顔で、聞いてくる。  
・・・・・確かに、怒られるかもしない、でも・・・・・。  
もひ一回、モニターを見る。  
フロイトちゃんが、一人で必死に戦つていて、雪オセさんやアルフさんが必死に護つていて。  
・・・・・うん、やつぱり。

「《行くー見てるだけなんて、いやー》」

桃香ちゃんは笑つて、シャドウをとことん図、隣に真つ黒な穴をあけた。

息を呑んでかがり、もう一回かって駆け出す。

「あ、おーーー」

「じゃー行くーのーーー」

一歩手前で、リンゴトイさんやクロノくんが止めようとして来た。  
けど・・・・。」で止まるわけには、いかない！

「ひやあー。」

正直、真っ黒な穴は怖かった。  
でも、フェイトちゃんだって、怖いはずだから。  
だから・・・・！

side 桃香

「貴様！なぜ行かせた？」

そういつて胸倉をつかんでくるクロノくん。

全く、思考回路がいくつか麻痺してるんじゃないですか？この子。

「わたしなりに被害を出さないよつに考えた結果です」

「君のやり方はむしろ被害が増えるぞー。」

「おやおや、じゃああなたは考えなかつたんですか？あの子が自滅せず、かつ、暴走したジュエルシードが結界を越えて、市街地に及ぶという可能性を」

「それはっ・・・・！」

クロノくんが怯んだ隙に手を叩き落として、コーンくんに合図。先にコーンくんを穴にくぐらせて、現場に向かわせる。

主は如何する？

「ちょっと話してから、すぐに行く・・・・・ウンディーネ、ボルト、現場に先行してみんなを守つて」

% & , @ \* \$ # ” !

御意

二人が行つたのを見送つてから、もう一度船橋を見渡してみる。クロノくんが睨んで、リンディさんは複雑そうにしていた。流石にオペレーターは対応に追われているから、こっちを見ていいなかつたけど。

「・・・・・確かに組織として考えれば、あなたの考えは正しい、ですが、個人として考えれば、納得できない選択です」

「だが、そうしなきや秩序は・・・・・！」

「・・・・・秩序、ねえ」

くすっと、笑顔がこぼれた。

「女の子一人救えない秩序なんていりません、くそくらえです」

呆然とするハラオウン親子。

言いたい事は言つたので、無視して、シャドウのゲートを潜る。

## 第一一十六話選択と秩序（後書き）

そんなこんなの一十六話。  
個人的に桃香の精靈をいくつか出させて満足。

第一一十七話海上で（前書き）

一ヶ月ぶりですね・・・・・。

8／4・ルビに変換されていない部分を発見、とりあえず修正

## 第一一十七話海上で

side フライト

六つそろったジュエルシードの力は、わたしの想像を超えていた。結界を張っているから、市街地に「こぐ」とはまず無いと思つけど、わたしだけで封印できるかどうか……。

「つフライトー」

「コキ！？・・・・・つぐあー」

後ろから、一撃。

背中が焼けるように熱くなつて、体が動かしづらくなる。  
でも、母さんを待たせるわけには・・・・・それに・・・・・・  
。

思い出すのは、コーリ達に助けられてから、あの白い子　なのは  
の家で過ごした時間。

他人の家なのに、とても暖かくて、優しくて。  
ユキやアルフも、いつもと比べて笑っていた。  
ジュエルシードさえ、ジュエルシードさえそろえれば、母さんと、あ  
んな時間を過ごせるはずなんだ・・・・・。  
だから・・・・・・・!

「つああああああああああつーーー！」

体に鞭打つて、バルディッシュを掲げる。

その時、上空から魔力反応。

転移系のそれが放出したのは・・・・・なのは?

続けてユーノ、少し遅れて桃香がやってきたのがわかつた。

…………あの思い出があるからなのか、三人がやつてきた」と  
にまつとした。

「フュイトちゃん！」

なのはは真っ先に駆けつけてくれて、わたしに抱きついた。  
・・・・・・・つて、ええ！？

「ちょ、なの・・・・・・」

「大丈夫！？どにも怪我してない！？」

「あ、あの・・・・・・」

なのはの顔は、本気で心配しているそれで。  
わたしの魔力が限界だつて知ると、躊躇い無く分け与えてくれた。  
なんというか、胸の辺りが暖かい・・・・。

「フュイト！」

「フュイトちゃん、大丈夫！？」

ジユーハルシードに攻撃を加えていたコーノと桃香も合流。  
さつきが怪我した背中を治してくれた。

ほつと安心したけど、まだコキとアルフが・・・・・！

「あ、フュイトちゃん！」

後ろでなのはが叫んでいる。  
でも悪いけど、今は構つていられない！

「アルフ！コキ！」  
「フュイト！」

「フェイト、ダメだ！後ろ！」

一人に急かされて、反射的に振り返ると、ジュエルシードの攻撃が  
来ていた。

しかも、回避も防御も間に合わないといつおまけつきで。頭が真っ白になつて、動きを止めてしまつ。

・・・・・ああ、もう終わりかも

side なのは

「フハイトやん！」

そんな、せつかくここに来れたのに・・・・・・

「一ノ木と焼けやんが止め

と攻撃の間になんとか入り込む。

など思つていた。

この時ほど、自分の判断を呪つたことは無い。

桃香 Side

ウンティーネもボルトも、ジュエルシードを抑えるのに手一杯で向かわせることが出来ない。

かといって、今更わたしが向かおうとしても、間に合わないのがオチ。

……………

よつーー

考えなきや、考えなきや、考えなきやーーーー！

s.i.d.e ???

「んで大将、暴れるわけにはいかねえのかい？」

「そそ、あんまり手の内は見せたくないしね～」

「なるほどな」

ヒノコとの交代で大将の元に来ていた俺は、雲の合間から現場を見下ろしていた。

目の前には暴れているジコエルシードが六つ。

あれを相手に戦えないのはつまらねえが、外の世界に来れただけでもありがたいと思わなきやな。

「つーわけで、景気良くなつちやつてー！」

「おつよおー任せな、大将おおおおおつーーー！」

side 雪斗

目の前で、なのはとフュイトが、とりかえしの付かなことよつたダメージを受けかけた途端。

ツ――――

「つぐおー?」  
「つわあつー?」  
「【】やあああああつー?」  
「~~~~~つー!」

文字通り鼓膜を突き破りそうな咆哮が聞こえて、その場にいた全員が、思わず耳を塞ぐ。

獣形態になっていたアルフは防ぎようがなかつたらしく、一人悶えていた。

何とか辺りを見回して発信源を探すが、見当たらない。  
おそらくかなり離れたところにいるんだろうが・・・・・・だとしたらどんなボリュームだ!?

近くで聞いたときの事を考へると、苦虫をつぶした顔になってしま

う。

だが、一応味方ではあるようだ。  
証拠に、すぐに復活した俺達と違つて、ジュエルシードの勢いは弱  
まつたまま。

フュイトとなのははほんやりしている。  
が、先に再起動したのはなのはの方だった。

「フュイトちゃん、手伝つて！ 残りのジュエルシード、一緒に止め  
よ！」

「・・・・・・・」

表情が引き締まって、ジュエルシードと向き合ひ。

「アルフ、大丈夫か？」

アルフは意識をはつきりさせる為に、頭を振つていた。

「何とか・・・・・セーで、反撃開始かい！？」

「ああ」

さて、もう少し粘るとあるか・・・・・！

ジュエルシードが発生させた雷の合間を縫うように飛ぶ。

襲つてくる波飛沫をものともせずに切り裂き、攻撃をする。

臆することなくバインドで固定し、そのバインドの発動者を護る為に相手を斬る。

人ならぬ、しかし心通わせた者達を使役して、全体の援護を行う。そこにはあつたのは、高度な連係プレーだった。

なのはが撃ち、フェイトが斬る。

ユーノとアルフがそれを補助し、雪斗はジュエルシードの妨害をこじごとく斬り伏せる。

桃香はウンディーネとボルトに加え、イフリートも呼び出して、全体の援護を行つていた。

その時、ジュエルシードの一つが市街地に向かつた。

「I am the bone of my world（我が骨子は捻じれ狂う）……偽・螺旋剣！」  
「ステインガースナイプ！」

しかし、途中から参戦したクロノにより阻止。

さらに弓から放たれた螺旋した剣が突き刺さり、妨害された。

弓を撃つた本人の姿を見ることはできなかつたが、全員予測は付いていたのでスルーすることにした。

そんな中、強化魔法や治癒術を駆使していた桃香は、自身の精靈を見渡して、少し物騒な考えを思いつく。

すぐ全員に退却の合図を送り、続けてボルトに指令。

ボルトはありつたけの電流を流して、ジュエルシードが纏つていた海水を打ち消した。

さらにそこへイフリートが火炎を撃ちこんだ。

「…………あれ？まさか…………」

その場にいた全員、彼女が何をやらかそうとしているのか悟り、咄嗟に障壁を開く。

直後、轟音と共に炎上。

海の上なので炎は一瞬で収まつたが、彼女の容赦の無さに冷や汗をかいてしまう。

だが、ジュエルシードは今無防備な状態。封印するには持つて来いのタイミングだ。

「フェイトちゃん！一人で、セーので…！」

「…・・・・・ん！」

全員が見守る中、なのはとフェイトは陣を展開。

封印の術式を構築し始める。

狙いは、ジュエルシード。

「リリカルマジカル！封印すべきは恋まわしき器…。」

「ジュエルシード！封印…！」

side 飛鳥

ふつふー、だいぶ息があつてるねあの一人。

まあ、後に友達になるんだし、当たり前つかや当たり前のなかにや

ー?

弓を破棄して、見下ろす。

うん、あの様子なら大丈夫だね。

「んー…………」

「ん? どした?」

使い魔が悩んでるね。

聞いてみると、

「いや、俺あんまり出番なかつたなつて」

「あー、まあ、手札は今あまり見せたくないし、それにさつき一人も助けたじやん、十分活躍したつて」

「まあ、そうだけど…………」

「大丈夫だつて! そのうち暴れる機会あるから、活躍期待してるよ  
♪?」

「ああ! 任せな!!」

つふふ、さて、あっちの方は何か進展あつたかなー?

side フェイト

「やつた！やつたねフェイトちゃん…！」

「あ、わわっ・・・・・・・・」

「…さん

なのはは嬉しそうに笑って、わたしの手を握ってくれた。伝わる温かさに、思わず笑顔がこぼれる。

周りを見ると、アルフやユキ、桃香とユーノも笑つて。管理局の男の子も、離れたところで安心したため息をついている。  
・・・・・・母さんもきっと見てくれてるんだろう。

甘えはいけないと想つけど、でも。

今は、この温もりが心地いい。

side プレシア

「・・・・・・・

モニターの向こうで、笑っているフェイト。

控えめだけど、私の前では絶対に見せないもので。

同じくジュエルシードを求めているという白い子に、抱きつかれて

いた。

・・・・・ 唐突に、あの時ゴキトとつぶ年と一緒にいた少女のことを思い出す。

アリシアやフロイトのことで葛藤するわたしを、「かっここ」と評してくれた、ダークグレーの短髪の少女。モニターでは確認できなけれど、きっと私と同じようにこの光景を見ていることでしょう。

「・・・・・

もう一度、フロイトを見つめる。

始めは、アリシアさえいればよかつた。

寂しい思いをさせた分、うんと我が仮をさせのつもりだった。

・・・・・だけ。

あの少女に言われてから、在りし日のあの子が私に言つた願いを思い出す。

妹が欲しい！ だつてそつすれば、お留守番だつて寂しくないし、ママのお手伝いもできるでしょ？

優しい、あの子なりの願い。

きっとあの子は、私の今までの行動を見て、絶望してこのことじよ。

だったら、今からでも。

「・・・・・ フロイト

フロイトのことを、愛しまじょ。

護つましょ'。

その為、

「・・・・・私は、悪役を演じましょ'」

第一一十七話海上上で（後書き）

「この方で思いつきスランプしちゃって、じばらく執筆進まなかつた自分です、はい。

とりあえず、A、Sまでがんばりたい・・・・・！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8172/>

---

とある姉の原作破壊

2011年8月4日19時43分発行